

市浦村 五月女菫遺跡



1983・3・20

青森県北津軽郡市浦村教育委員会

## 序 文

市浦村教育委員会  
教育長 俵 谷 佐之一

津軽安東一族の本拠地であったとされる十三湊は、往古において最も繁栄した土地であったとされているところであります。

このたび、市浦村の村史研究の足がかりとして、「五月女遺跡」発掘の機会に恵まれました。その調査結果については、後述するとおりであります。当市浦村に縄文時代の晩期において、亀ヶ岡式土器を使用した人々の生活が現実であったことが証明され、また、出土した遺物の豊富なこと、および、その芸術性のすぐれていることを目前に見て、たゞ驚くばかりであります。

調査を担当された調査員各位の努力と、その発掘成果に心から敬意を表する次第であります。

この発掘成果によって、わが郷土、市浦村は、古代、中世のみならず、原始の世においても、すぐれた文化をもった人々の生活があったことが現実のものとなりました。

わたしたちは、これらの遺跡と文化財を市浦村の貴重な文化遺産として後世に伝えていきたいと考えています。

末尾になりましたが、遺跡の土質試験については、昭和鑿泉株式会社土質研究所の御好意をいただき、岩石の顕微鏡鑑定では、弘前大学宮城一男教授の御指導を賜わり、さらに遺物のうち、骨類、堅果類等は、早稲田大学金子浩昌氏に鑑定をいただき、貝類については、青森県教育センター橋本守美指導主事に鑑定をわずらわした。

ここに明記して深甚の謝意を表する次第であります。

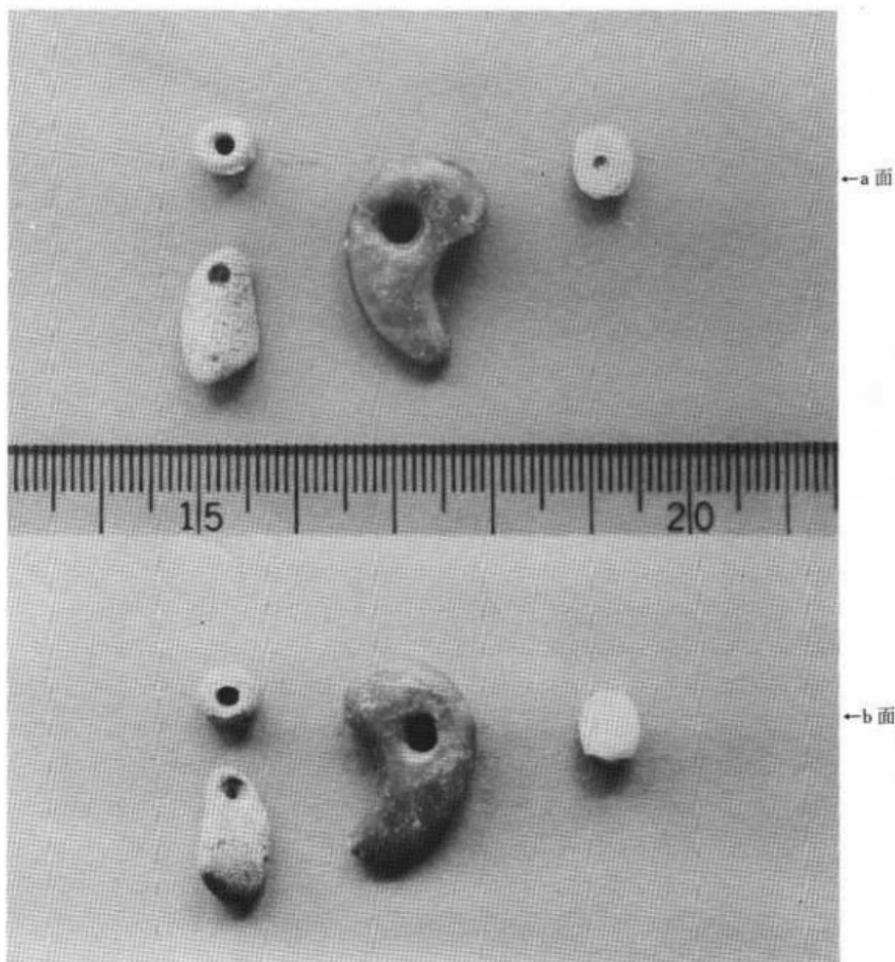
〔土面〕

(写真X 1)  
(上下)



[五月女菴遺跡出土、勾玉・小玉等]

(写真X2)  
(上下)



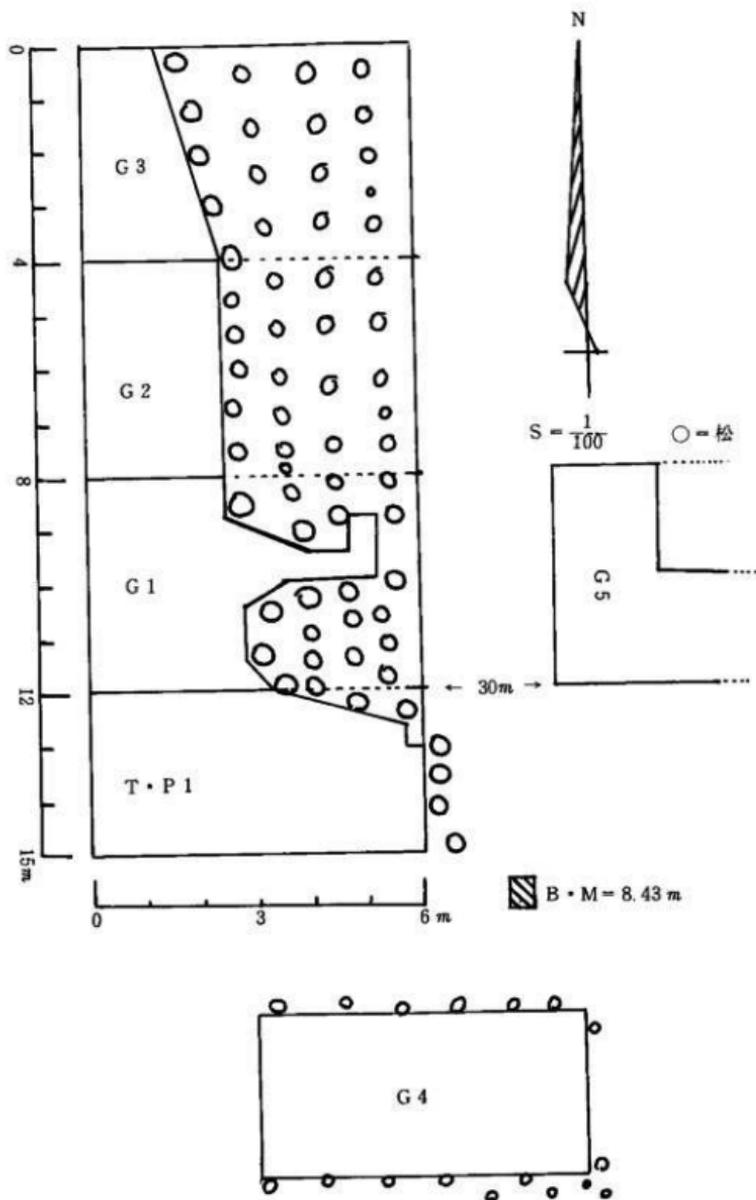


[岩質鑑定試料とした磨製石斧]





〔第2図〕〔グリット配置図〕



(中心部)



(西方より写す)

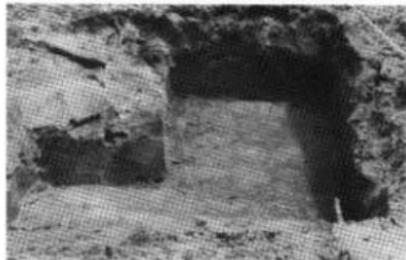


↑  
(開田地)

(保安林の現状)



(G5の状況) 遺物の出土は、全くない。



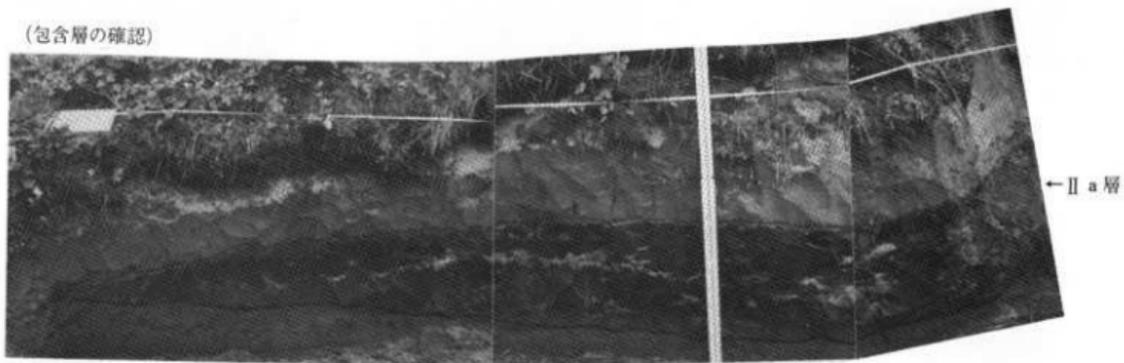
[五月女菴遺跡の予備調査]

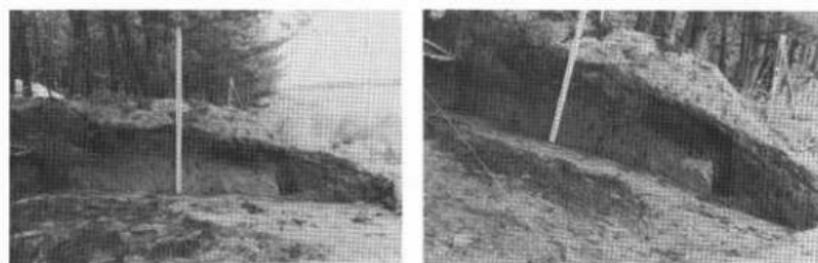
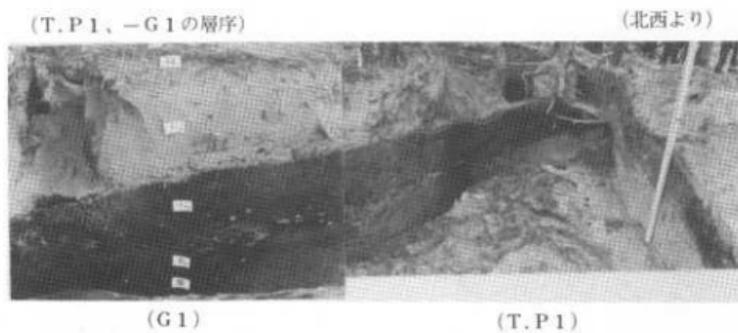
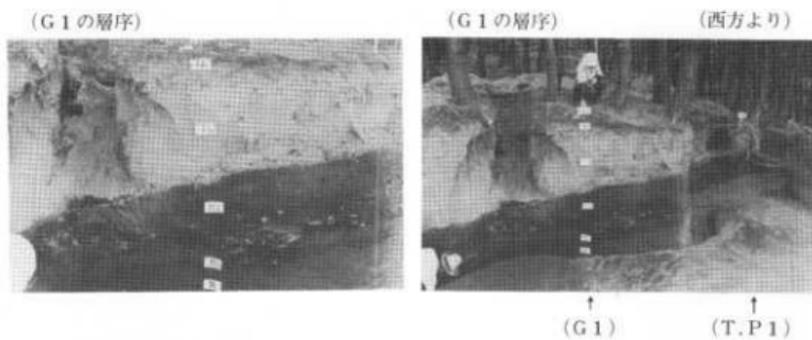
(写真2)

(中心部)



(包含層の確認)





(T.P1の南壁層序) ← (北西より写す) → (T.P1の南壁層序) → II a層がない。

〔層序と、遺物出土状況〕

(写真4)

(調査第一日の状況)

(西方より)



(G 2 の最終日の層序) (西方より)



(調査最終日の層序→G3-G2) (西方より)



(G 2 南壁付近の遺物出土状況) (西方上より)



(G 1、G 2 における I b 層  
下位の遺物出土状況)

(西方より)



(G 2 南壁付近の遺物出土  
状況→同上のアップ)

(西方より)



(G1-II a 層中位より)



(同左)



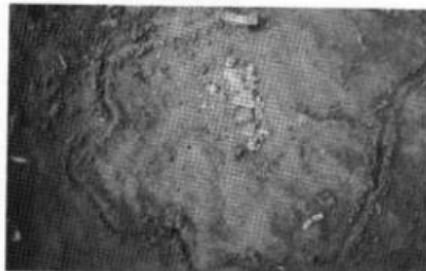
(G1-II a 層中位より)



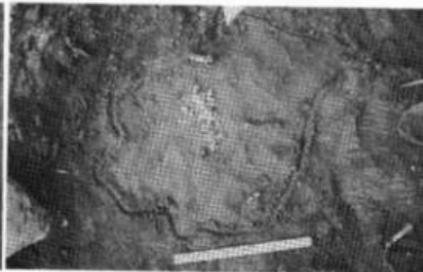
(同左)



(G1-II a 層中位より)



(同左)

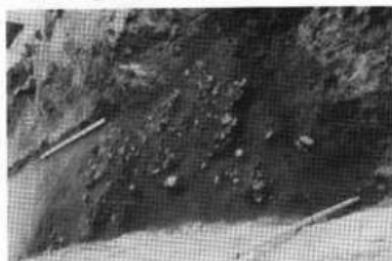


〔遺物出土状況〕 → (土器の廃棄パターンを見せる出土状況)

(写真6)

— (いずれも東上方より)

(G1-Ⅱ a層下位)

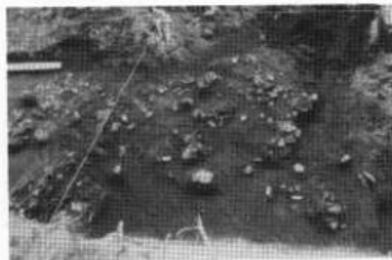


(G1-Ⅱ a層下位)



(T.P1)

(G1)



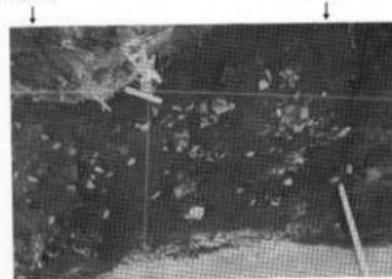
(T.P1)

(G1)



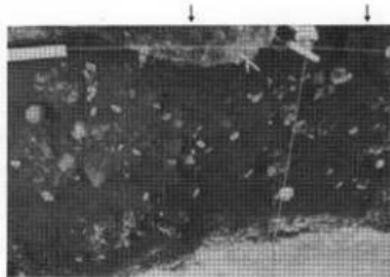
(G2)

(G1)



(G2)

(G1)



〔遺物出土状況〕

(写真7)

(G 3-Ⅱ b 下の壺形土器)



(同左)



(T. P 1-Ⅱ a 層上位の土器出土状況)



(同左) (松の根が土器の中へ) (南方より)



(G 1-Ⅱ a 層上位の土器出土状況)  
(南方より)



(G 1-Ⅱ a 層中位の土器、石器出土状況)  
(南方より)



## 例 言

1. 本報告書は、青森県北津軽郡市浦村大字相内字相内454に所在する「五月女遺跡」の昭和56年8月4日同16日にわたる発掘調査の記録である。
2. 調査は、市浦村教育委員会が主体者となり、後述する調査員によって行われた。
3. 本報告書の執筆は、地学関係については、川村真一が担当した。その際、土質試験については、昭和警泉株式会社土質研究所、ならびに、岩石の顕微鏡鑑定では、弘前大学宮城一男教授の御指導をいただいた。
4. 本報告書のうち、地学関係を除き、他の一切は、新谷雄蔵が担当、執筆したが、その際、骨類、堅果類の鑑定は、日本大学金子浩昌講師に、貝類は、青森県教育センター指導主事橋本守美氏に鑑定していただいた。  
ここに記して深謝の意を表します。
5. 凡例は、つぎのとおりである。
  - (1) 遺物番号は、完形品、復原土器、その他を一括して、写1～写55とした。  
また、土器の破片は、P・L1～P・L120とし、通し番号1～726とした。
  - (2) 石器・石製品等については、S・P・L1～S・P・L55とし、器種別に通し番号を付した。
  - (3) 本文の土器実測図番号は、図版の番号と一致する。
  - (4) 土器破片P・L1～P・L120のうち、出土グリット・層位を特記していないものは、すべて、Ⅱa層出土である。
  - (5) 土器・石器、その他をとおして、必要なものには、縮尺を入れてある。
6. 最後に発掘調査を快く承諾された地主である山田竹利氏の御厚意に感謝の意を表します。

# 総 目 次

○表紙 (土面)	
○序 文	
(写X 1～X 3)	1
○〔第1図〕・市浦村五月女菴遺跡付近地形図	4
○〔第2図〕・グリット配置図	5
(写真1～写真7)	6
○例 言	13
☆総目次	14
〔I〕調査に至る経過と調査要項	16
〔II〕遺跡周辺の地学的環境	17
△〔表1-1・表1-2〕……(1)比重・(2)粒度	18
○〔第3図〕・基本層序図	21
○〔第4図〕・屏風山における各種砂丘の粒度組成	21
○〔第5図〕・I b層の粒度組成	21
○〔第6図〕・III層の粒度組成	21
〔III〕グリットの設定とセクションについて	22
○〔第7図〕・G 2・G 3東壁セクション図	24
○〔第8図〕・T, P 1東壁セクション図	25
○〔第9図〕・T, P 1南壁セクション図	26
○〔第10図〕・主要遺物出土地点図	27
☆出土遺物の目次 (再掲)	28
〔IV〕出土遺物	29
△〔表2〕・縄文時代編年表	30
△〔表3〕・No.1～No.5……完形・復原土器	31
△〔表4〕・土器型式別・器形別分類数表	36
(1) 土器・土製品	37
☆破片土器群別・型式別索引 No.1—1・2・3	43
(2) 石器・石製品	45
△〔表5〕・石器・石製品一覧表 No.1～No.17	46
(3) 骨類・貝類・堅果類	63
○〔第11図〕・骨類・貝類・堅果類出土位置図	64
☆考察の目次 (再掲)	70
〔V〕考 察	71

〔I〕 遺跡の立地	71
〔II〕 出土遺物	72
(1) 出土土器	72
△〔表6〕・施文別土器分類表	75
△〔表X〕・郡別・型式別施文比率表	76
○〔第12図〕・第9群・第10群土器主文様図	78
(2) 出土石器・石製品	80
△〔表7〕・石器器種別岩質分類表	82
(3) 骨類・貝類・堅果類	86
〔VI〕 おわりに	87
(参考文献)	87
〔VII〕 出土遺物 (資料)	88
〔I〕 土器・土製品	89
(1) 完形・復原土器	89
・写1～写55 (実測図を含む)	89
(2) 破片土器	152
・P. L 1～P. L 120	152
〔II〕 石器・石製品	272
・S. P. L 1～S. P. L 55	272
〔III〕 骨類・貝類・堅果類	312
・b写1～b写8	312

## 〔I〕 調査に至る経過と調査要項

### (1) 調査に至る経過

今回調査の対象となった「五月女遺跡」は、飛砂防止保安林の中に所在する遺跡である。

この飛砂防止保安林の一部が保安林を解除され、開田することになったのである。

その開田作業の際、多量の遺物が出土したことの通報を受けた市浦村教育委員会は、その遺跡の保存と、保護対策を講ずるため、遺跡の西側面にて、遺物包含層が露出する一地点を発掘調査することにしたのである。

### (2) 調査要項

- 調査期間 自昭和56年8月4日  
至昭和56年8月16日
- 遺跡所在地 青森県北津軽郡市浦村大字相内字相内454番地
- 土地所有者 山田竹利
- 発掘法と発掘面積 ・グリット法による。

- 発掘面積 約77.4㎡
  - ・ G 1 = 13.4 ㎡
  - ・ G 2 = 10.0 ㎡
  - ・ G 3 = 7.4 ㎡
  - ・ G 4 = 1.8 ㎡
  - ・ T・P 1 = 16.6 ㎡
  - ・ G 5 = 1.2 ㎡
  - 合計 77.4 ㎡

- (3) 調査主体者 市浦村教育委員会 代表 教育長俵谷佐之一

- 主 管 市浦村教育委員会 古川 徹

- (4) 顧 問 ・ 郷土史研究者 豊島 勝蔵

- ☆ 特別参加 ・ 北奥文化研究会長 成田不二雄

### (5) 調査員

- ・ 調査担当者 ・ 日本考古学協会会員 新谷 雄蔵
- ・ 地学担当 ・ 日本地学教育学会会員 川村 真一
- ・ 発掘担当 ・ 北奥文化研究会会員 太田 文雄
- ・ ・ 北奥古代文化研究会員 桜井 有一
- ・ ・ 北奥文化研究会会員 岩崎 繁芳
- ・ ・ 北奥文化研究会会員 小山 英治

## 〔Ⅱ〕 遺跡周辺の地学的環境

### 1. 地形 (第1図)

市浦村は津軽半島西側中央部に位置し、十三湖の西および北部を占める。

市浦村の東側は四ツ滝山 (669 m)、木無岳 (587) と連なる中山山脈によって蟹田町と境し、北側は四ツ滝山 (669 m) から西の板割山 (178 m) を経て脇元海岸北部の山稜で小泊村と接する。西側は日本海に面し、南側は大略十三湖で中里町・車力村と境する。

十三湖の西側は浜堤状砂丘地帯となっており、十三集落をのせている。北東側は、北岸と太田川、相内川に明瞭な段丘がみられ、北西側は磯松集落まで砂丘が続いている。

市浦村に発達する主要河川には南から相内川、唐川、磯松川がある。これら河川のうち最も大きい相内川は、太田川・桂川・山王坊沢の三河川が相内で合流したもので、十三湖北岸に流入し河口には小規模ながら三角洲を形成している。

市浦村の相内地区は十三湖の北岸にあり、南東は相内川と、北は唐川で境されている。北東は標高50m付近から急に高度を増し唐川城址から津軽山地へと続き、西側は五月女酒原を経て日本海と接している。

相内地区の主要地形は、唐川水路に沿った低地帯、相内川河口三角洲、および南東から北西へ伸びる標高10m～20mの洪積段丘である。相内地区集落の中心はこの段丘上にある。

本遺跡は十三湖北西の中島北方約0.7km、段丘の西縁にある。西側での段丘崖は明瞭ではないがこれは新时期砂丘砂におおわれているためであると思われる。

唐川水路西側の五月女酒原および東側には東西方向の幅350m～400m、十三湖北西岸から南北方向約2kmにわたり針葉樹の防風林となっている。

十三湖中の中島北方の湖岸より約700m、唐川水路東側防風林帯のさらに東側にあたる部分は標高4m～6mを示し、東西約200m、南北約400mの区域は水田として開墾整地され、所々に切割ができています。本遺跡はこの開墾区域の東縁切割で発見された。

この整地区域の東側幅約100mはさらに防風林帯となっており、6m～10mのゆるい起伏をもつ地形になっている。このやや高いところは風向(西風)と同方向に伸びており、縦列砂丘の性格をもつ地形と考えられる。整地の際にできた切割はこの縦列砂丘を切ったために生じたもので、本遺跡は丁度この部分に包蔵されていたものである。

### 2. 地質および層序 (第3・4・5・6図)

遺跡付近の基盤は中砂ないし細砂からなる砂層で、遺跡の南方約700mの十三湖中の中島におけるボーリング資料によれば、地表下約20mまでが中～細砂である。その下40mまでが砂礫、40m以下が泥岩となっている。

遺跡における基本層序は、〔第3図〕のとおりである。各層の特徴の概要を次にのべる。

I a 層 表土

I b 層 灰白色砂層。おもに下部と上部に厚さ3～5cmの粗砂の薄層を挟む。とくに下部では7～8cm間隔で挟む部分がある。

本層中部から採集した砂の粒度分析では粗砂分11～15%、細砂分83～88%、シルト分0.5～2.6%の値を示した。本層の下部に石器が包含されている。

II a 層 黒土層。遺物の主要包含層で砂質の黒土である。遺物は上部より下部に多い。上部の方にはしまりのよい黒土で構成されている部分があり、下部は細砂質の黒土に0.5～1.0mmの粗砂を含む部分がある。北方へ行くにしたがい厚さを減じ尖滅する。

II b 層 黒褐色細砂層。II a 層からIII層への漸移層である。

III 層 黄褐色砂層。本遺跡の基盤を構成する層で、主体は黄褐色の細砂である。径0.1～0.2mmの細砂中に径1mmの石英粒のほか、安山岩質の粗砂を含む。

本層の粒度分析の結果は、粗砂分8～11%、細砂分87～91%、シルト分0.3～0.8%の割合であった。

### 3. 遺跡付近の砂丘砂

本遺跡の主要遺物包含層（II a 層）の上、下に細砂を主体とする砂層（I b 層及びIII層）があることはすでにのべたとおりである。

この両砂層について特徴の相違、時代的差異が認められるならば、遺跡の営まれた時期が一層明確になると考えられることから、I b 層およびIII層の両砂層について粒度等の分析を試みた。資料は各層中A・B・Cの3地点より採取した。分析結果は次のとおりである。

(1) 比重

〔表1-1〕

地 点 層	A	B	C	平均
I b	2.662	2.656	2.655	2.658
III	2.659	2.682	2.640	2.660

資料採取地点 粒 度	I b 層						II 層					
	A		B		C		A		B		C	
4.76 mm以上の粒子 %	0		0		0		0		0		0	
細砂分(4.76~2 mm) %	0.1	0.1	0	0	0.1	0.1	0	0	0.1	0.1	0	0
粗砂分(2~0.42 mm) %	14.6		11.2		15.8		10.9		7.8		10.6	
細砂分(0.42~0.074) %	82.7	97.3	88.3	99.5	83.2	99.0	88.8	99.7	91.3	99.1	88.6	99.2
シルト分	2.6		0.5		0.9		0.3		0.8		0.8	
最大粒径 mm	4.76		2.00		4.76		2.00		4.76		2.00	
60%粒径 mm	0.245		0.24		0.26		0.21		0.24		0.25	

上記分析結果に表われた数値の示すとおり両層には殆んど差異は認められないように思われる。一方、屏風山砂丘について水野・堀田・葛西(1967)の研究報告がある。

(水野・堀田・葛西(1967):津軽屏風山砂丘の地形 東北地理20-1)

それによれば、屏風山砂丘について粒度組成・中央粒径値・分級度を調べた結果、A、B、C、Dの四つの型に分類することができるという。(第4図)すなわち、A型は2φに60%以上集中するもの、B型は1φに50%近く集中するもの、C型は1φと2φのものがそれぞれ約40%前後のもの、D型は2φに極大部があるが30~40%であり、他の粒度の組成率も高く、四つの型のうちで最も海浜が悪い。

これらの結果と、中央粒径値、分級度、露頭観察からA型を新期砂丘砂、B型は旧期砂丘砂、C型は屏風山、D型は浜堤砂とした。そして、A型の新期砂丘砂は縄文前期の沖積世最大海進後の海退に伴う砂浜の拡大によって供給形成されたものと考えている。

本遺跡のI b 層、II 層の両層の粒度組成を図に表わずと第5・6図のとおりで、水野等(1967)のA型と類似しているものと考えることができよう。

以上の結果から、遺跡の主要生活層であるII a 層の上層(I b 層)と下層(III層)とはいずれも新期砂丘砂で、両層との時代的間隙はなく、本遺跡はわりあい短期間に埋積された可能性が高い。

このことは、I b 層、II a 層から出土する遺物にも時代的ずれがなく、地質上の推定と矛盾していない。

4. 石斧・石刀・石棒等に使われている緑色堅硬岩の岩石名について（写真×3下段参照）  
県内各地の遺跡から出土する石斧類はいずれも緑色堅硬緻密な岩石でつくられているが、この岩石名について肉眼的観察という制限から種々の岩石名がつけられていた。

今回、たまたま同質の岩石を岩石薄片にし、顕微鏡的特性から岩石名を決定できたので、以下に報告する。

〔岩石名〕

緑れん石・透角閃石ホルンフェルス

(Epidote-tremolite hornfels)

〔肉眼的特性〕

緑色細粒で一見、緑色凝灰岩のような感じがするが、実際、源岩は角礫凝灰岩だったと思われる。黒色斑点部は角れき、白色部は長石の残跡であろう。

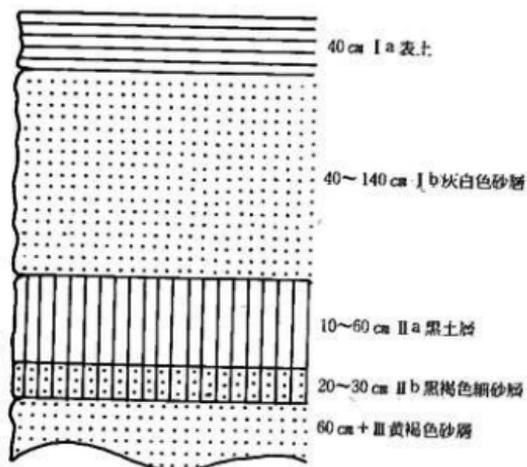
〔顕微鏡的特性〕

典型的な「ホルンフェルス組織（グラノブラスチック組織）」を示す。主成分鉱物（変晶）は透角閃石がもっとも多量（屈折率で確認、 $\alpha = 1.60 \sim 1.625$ 、 $\pi = 1.663 \pm$ ）で、少量の緑れん石を含む。その他、源岩中の斜長石が希に残存している。要するに、斜長石、角閃石、輝石等を含む塩基性の凝灰岩が接触変成を受けて形成された岩石と思われる。

なお、これと類似のホルンフェルスが本県では東岳に産出する。

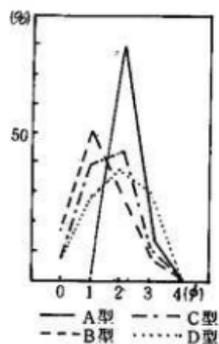
〔第3図〕

五月女遺跡基本層序図



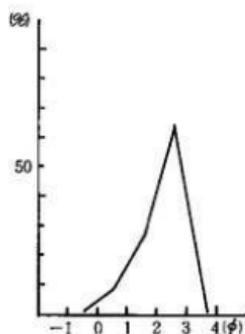
〔第4図〕

屏風山における各種砂丘の粒度組成  
(水野・編田・葛西、1967)



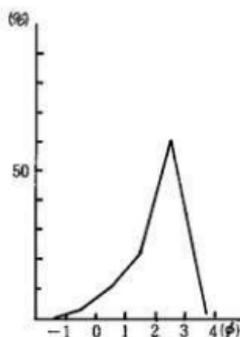
〔第5図〕

I b 層の粒度組成



〔第6図〕

III 層の粒度組成



### 〔Ⅲ〕 グリットの設定と、セクションについて

(発掘口誌抄) (第2. 7. 8. 9. 図)

・8月4日、雨、顧問豊島、調査員全員、市浦村教育委員会に集合、発掘の打合わせを行う。  
午前は、遺跡西側の開田面に沿って露出する切り通し面を整理、層序、包含層、および、地山を観察する。包含層は、黒土層をなしており、南から北へ向かって次第に幅がせまくなり消滅する様子である。

包含層の最も厚い地点(最も高い地点)を基準に、南より北へ向かって、南北4m、東西に5mのグリットを組み、南より北へT・P1、G1、G2、G3のグリットを組み合わせることとする。

午後は、杭打ち、テープ張りを行い、除草を行うも、松林であるあた、保安林をさけて発掘することにする。

露出する断面の観察から、第3図に示すとおり、基本層序を、Ia、Ib、IIa、IIb、III層とする。

T・P1の発掘を先行させ、掘り下げるも、Ia層、およびIb層上面には、遺物の包含はない、Ib層下位において、少数の遺物が出土する。

Ib層は、深く、1.5m程度である。そのため、作業日程を考えて、明日は、ユンボーにより、Ia、Ib上層を削ぐこととする。

・8月5日、雨、今日も雨が降るも、砂地遺跡のため、作業に支障がないのが幸いである。

今日は、ユンボーを導入し、G1、G2、G3のIb層上層まで削ぎとりにかかる。

その後整地し、T・P1・G1・G2・G3を一揃に掘り下げる。

Ib層下位に近づくにつれて、風化した土器片が散見し、石器類も出土しはじめる。

土器片は、大洞C2式である。土器の殆んどが風化しているのが注意される。

・8月7・8日、晴、雨、今日(7日)も、一揃に掘り下げる。T・P1の南方9.5mにG4のグリットを設定する(南北3m×東西6m)。また、G1の東方約30m地点にG5を4m×4mで設定する。

G4は、一段と低くなる地形に設定した。その目的は、包含層がT・P1より南へ下降するもののように観察されるから、その状態を知る目的である。また、G5は、最も高い地点へ設定し地層を確認するために設定した。

・8日は、T・P1、G1では、IIa層上面に達する。G4は、Ib層に石器の出土が多いが、IIa層はない。

また、T・P1の東壁セクションにおいて、IIa層の幅がせまくなり消滅するようである。

すなわち、T・P1の内壁では、IIa層は西方に存在せず、G4にも存在しないことが判明する。

出土遺物は、Ib層下位より、IIa層上面に至るにつれて多量に出土する。

遺物は、人洞 C2 式土器、A 式土器、石錐を中心とした石器類である。

・8月9・10日、晴・曇、T・P1、G1は、Ⅱa層を掘り下げる。G2は、午前でⅡa層へ達するG3は、今日一日Ib層を掘り下げる必要がある。G2よりG3に至る（南より北へ）Ⅱa層は、次第に下降し、その幅はせまくなっている。遺物は、T・P1、G1、G2に多く、G3は殆んど遺物が出土しない。

・8月11・12日、晴・曇、G3は、Ⅱa層を。G2は、Ⅱa層中位へ、G1はⅡa層中位へ、T・P1は、Ⅱa層下位へ掘り進むことになる。

11日は、Ⅱa層中位で、一度発掘面を整理することにする。また、G5は、Ib層が深く、遺物が出ないので今日で発掘を中止することにした。

11・12日とも、遺物は、まとまって出土する。最も濃密なのは、G2の南壁近くと、G1の北壁付近である。土器が堆積し、いわゆる廃棄パターンを如実に見せている。発掘面を整理し、写真を撮影する。

・8月15・16日、曇・雨、今日（15日）より、Ⅱa層下位へ掘り進む、なお、G4は、Ib層からⅢ層で、Ⅱa層は存在せず、また、T・P1の南壁もIb、Ⅱa層は、存在せずⅢ層となっており、一部に開田時の盛土が残されている。

・15日ではⅡa層下位まで掘り下げる。G3ではⅡa層から遺物の出土は殆んどない。G2では、Ⅱa層下位まで遺物が、その南半に多く、特に南壁近くに集中している。G1においても北半に遺物が多く、南半は、平均的に出土する。T・P1では、北半が多く、南半東壁付近に多い。

・16日、今日は、午前でⅢ層を掘り下げることにする。G3では、その北壁近くでⅡa層が消滅している。また、T・P1の南壁セクションでⅡa層は、消滅しかけている状態である。

また、G3においても、Ⅲa下層より壺形土器2個体が出土するも（写真7.写26.27）他に遺物は出土しない。

G2、G1、T・P1では、Ⅲ層上面まで遺物の堆積があるが、Ⅲ層内の出土はない。

16日、午後、発掘面を整理し、セクション図を作成する。（第7・8・9図）

発掘は終了した。村当局の協力、人夫の方々の連日の労苦に感謝したい。有難うございました。

誠に貴重な学習をさせていただきました。村当局の方々に心から御礼申し上げます。

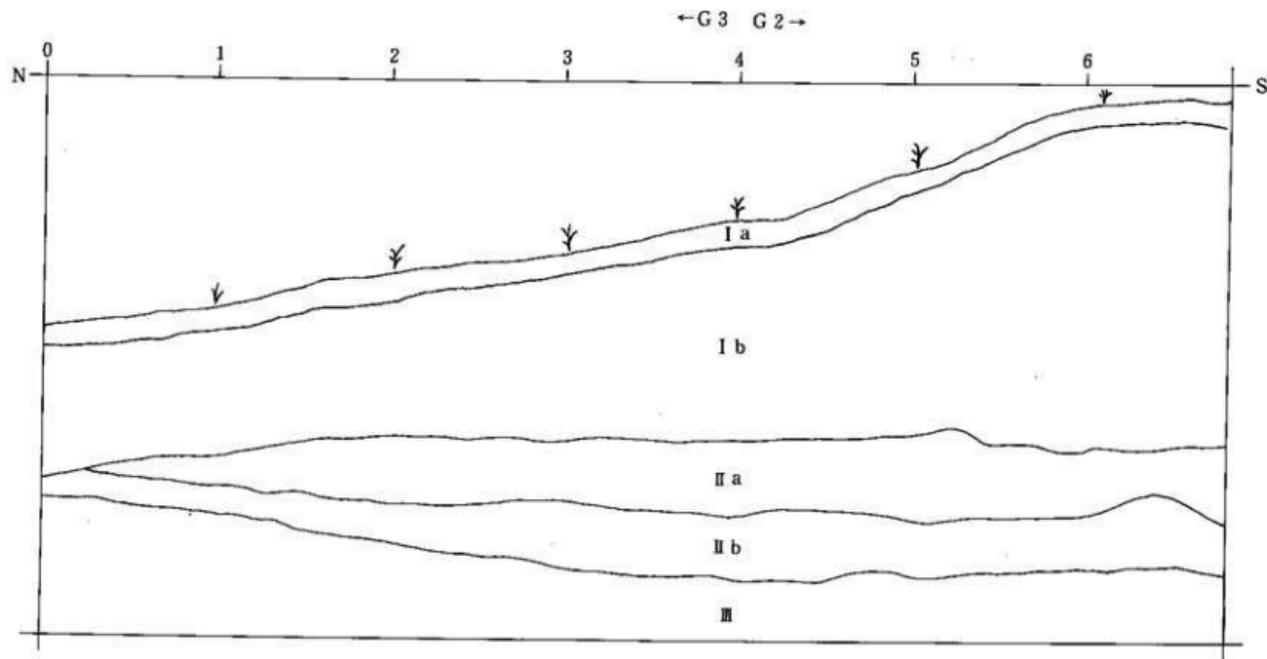
（調査員一同）

#### ☆ 発掘参加作業員氏名

・佐々木トミ    ・佐藤 トク    ・三和 ツマ    ・佐藤 トシ    ・工藤 ヌイ  
・佐藤 義夫    ・秋田谷 節    ・安保サツミ    ・丁子谷アキエ    ・三浦 栄子

(第7図) G2、G3東壁セクション図

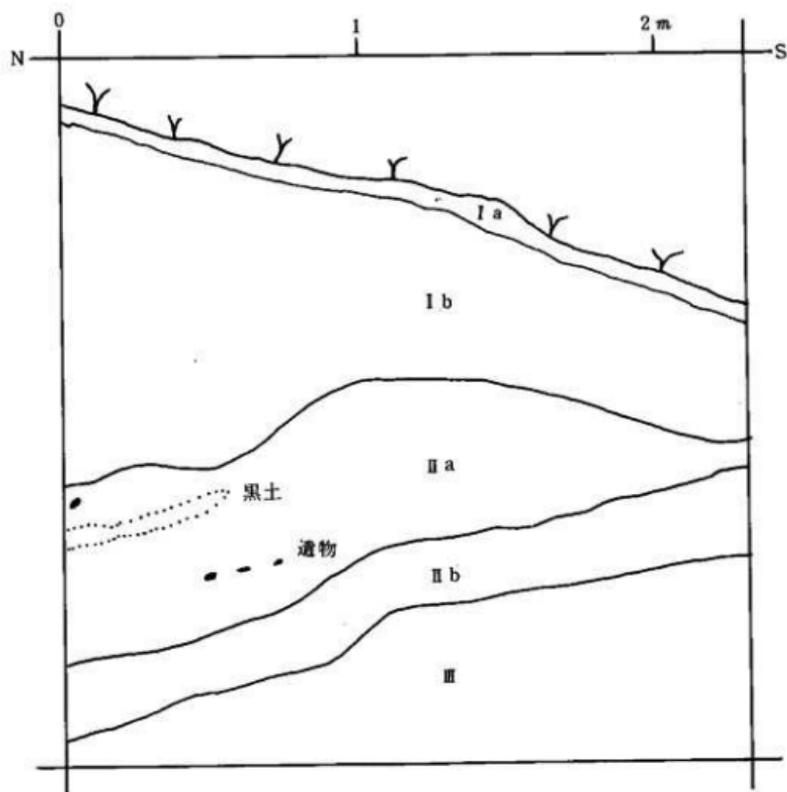
$$S = \frac{1}{20}$$



(第8図) T・P1東壁セクション図

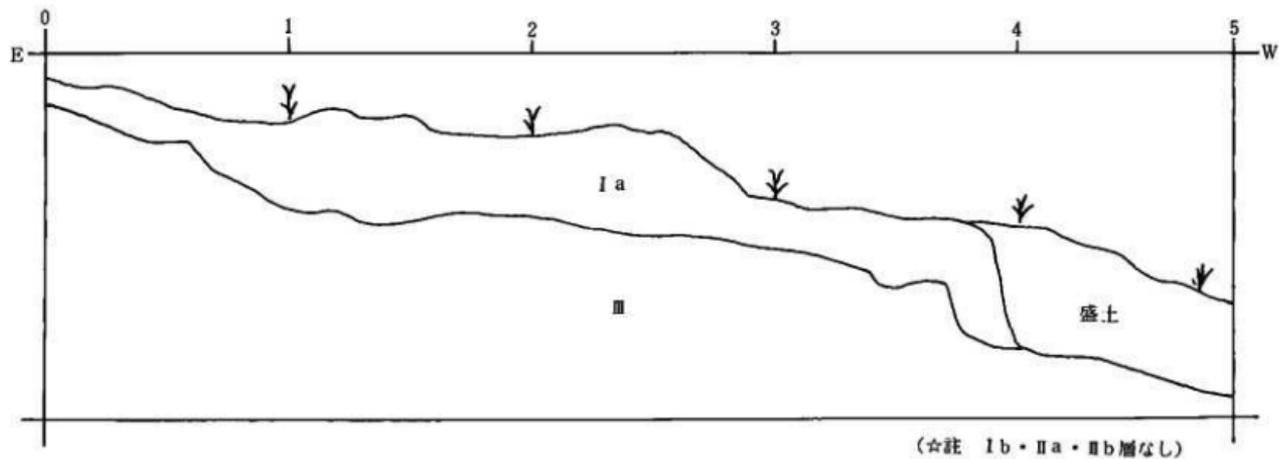
$$S = \frac{1}{20}$$

眼高レベル 55.7 cm  
水平系レベル 80.7 cm



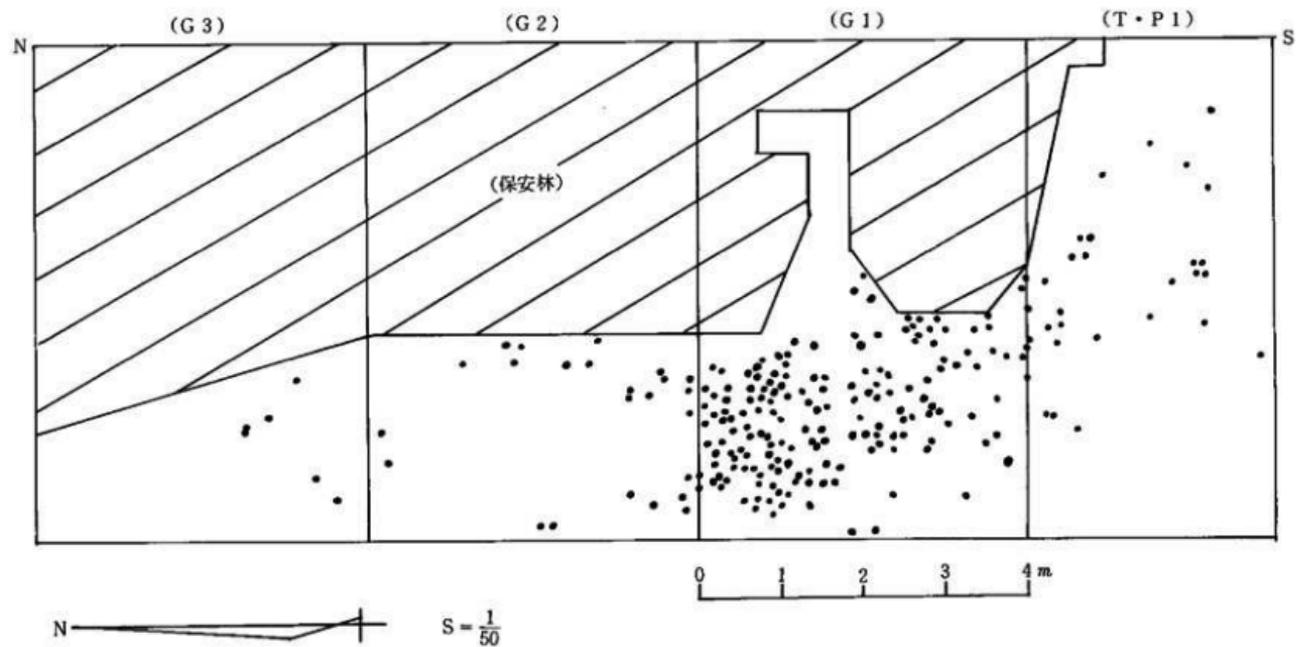
〔第9図〕 T・P 1 南壁セクション図  $S = \frac{1}{20}$

眼高レベル 55.7 cm  
水平系レベル 54.3 cm



〔第10図〕 主要遺物出土地点図（Ⅱa層出土遺物垂直分布図）

（土器・土製品・石器・石製品分布図）



## ☆ 出土遺物の目次 (再掲)

### (1) 土器・土製品

#### (a) 本遺跡出土土器の各型式 (表2→編年表)

[縄文時代中期・後期の土器]

#### (b) 群別・型式別土器 (表4)

- ・第1群土器 円筒上層d2式
- ・第2群土器 十腰内I式
- ・第3群土器 十腰内II式
- ・第5群土器 十腰内V式

[縄文時代晩期の土器] (表3・4、写1～55、P. L1～120)

#### (c) 群別・型式別土器 (表4)

- ・第6群土器 大洞B・C式
- ・第7群土器 大洞C1式
- ・第8群土器 大洞C2式
- ・第9群土器 大洞C2-A式(仮称)
- ・第10群土器 大洞A式

#### (d) 器形別出土数について(晩期のみ)

[用語について]

#### (e) 本遺跡が造営された時期について(出土土器の検討から)

#### (f) 完形・復原土器、および破片土器について、

### (2) 石器・石製品 (表5-No1～17、S・P・L1～55)

#### (a) 石器・石製品の分類

#### (b) 石器・石製品の岩質分類

### (3) 骨類・貝類・堅果類 (写6-2、写15-2、写2-2、写18-2、写37-2、第11図、写真5、 b写1～8)

[資料No1の骨類] -b写1-1

[ " No2 " ] →写真は、細片のため写さず。

[ " No3 " ] →同上

[ " No4 " ] →同上

[ " No5 " ] -b写2-1・2～b写5-7

[ " No6 " ] -b写5-1、b写6-1

[ " No7 " ] -細片のため写真を写さず

[ " No8 " ] b写6-2

[ " No9 " ] b写7-1

[ " No10 " ] b写7-2

[ " No11の堅果類] b写8-1

[II a 層上位・中位出土植物炭化物] 参考資料6写8-2

#### 〔Ⅳ〕 出土遺物

、出土した遺物は、(1)土器・土製品、(2)石器・石製品、(3)骨類、貝類、堅果類に分けられる。これらのものは、総量で、リンゴ用ダンボール箱約30箱の量である。

以下、(1)～(3)の順に、出土遺物について述べることにする。なお、できるだけ、遺物を多く揭示したい意図でサンプルをとったが、全部は不可能であった。しかし本遺跡の全容を報告できるものと考えている。

〔表2〕

〔縄文時代編年表 (含市浦村五月女遺跡)〕 (1983・1 新谷)							
推定年代	区分	上器型式	五月女遺跡出土器型式	主要遺跡			
6000 5000 4000 3000	(草創期) 早期	(省略)	/	鳴子遺跡 (鯉ヶ沢)			
	前期	a・b・c・d1・d2式	/	原子A遺跡 (五所川原市)			
	中期	a・b・c・d1・㊸e式	○第1群土器 (d2式)	妻の神遺跡 (金木町)			
	後期	(十腰内) ① ② Ⅲ Ⅳ ⑤式	○第2群土器Ⅰ式 ○第3群土器Ⅱ式 ○第5群土器Ⅴ式	十腰内遺跡 (弘前市)			
2000	晩期	(大洞) B式	B1 B2	/	土居1号遺跡 (板柳町) ↓ ↑ 観音林遺跡 (五所川原市) ↓ × × 砂沢遺跡 (弘前市)		
		○ B・C式	B・C1、B・C2	○第6群土器		第11群土器	
		○ C1式	/	○第7群土器			
		○ C2式	/	○第8群土器			第15群土器
		○ C2-A式 (仮称)	/	○第9群土器			
		○ A式	/	○第10群土器			
		A'式	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	/			
弥生時代	前期・中期・後期			垂柳遺跡 (田舎館村)			

☆ (註、第4群→十腰内Ⅲ式Ⅳ式を欠く) ○印は本遺跡出土型式

昭和56年8月4日～昭和56年8月16日

〔市浦村五月女菴遺跡出土土器整理表〕 — (完形・復原土器)

〔表3〕 (No.1)

号 No.	群 別	器 形	出土区・層位	P No.	現存	土器型式	精製・粗製別	実測図 No.	計測値		色調・焼成・胎土	装 文 (模文)	備 考 (註記を含む)
									11径×器高×底径×器厚				
写 1	7	深鉢	G1-II a中	/	復原	大洞 C1式	精製土器	1	17.2×14.2×4.8×0.5~0.6		灰黒色・良好・最良	四段の羽状縄文 (R.L+L.R)	○O段多条のR.L+O段多条のL.R による羽状縄文。 ・朱のり土器
2-1	8	鉢形	G1-II a中	/	完形	C2*	精製土器	/	12.0×8.7×4.4×0.3~0.5		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L.R)	○骨片内蔵あり ・口縁部小形突起 胴部X字文のくずれた曲線浮文 縄文
2-2	*	*	*	1a 1b	*	*	*	2-2	*		*	*	*
3	9	鉢形	G1-II a中	/	復原	C2 A*	精製土器	3	15.3×9.5×5.8×0.6		褐色褐色・最良・最良	左傾縄文 (L.R)	・口縁上縁割目、平行沈線文3条、 入組工字文の縄文である。
4	8	鉢形	G1-II a中	/	復原	C2*	精製土器	4	17.2×10.2×5.2×0.3~0.4		灰黄色・最良・良	左傾縄文 (L.R) 地文も含む	・大洞C2式の典型的器形文、 口縁割目、平行沈線文3条。
5	8	鉢形	G2-II a中	/	復原	C2*	半精製土器	5	19.8×15.6×6.2×0.5		灰白色・良好・最良	ほぼ縦位器文 (L.r)	縦化する器文の縄文とされる鉢形 土器は、この期のマタイプである。
6-1	8	鉢形	TP1-II a中	/	完形	C2*	半精製土器	/	16.6×10.9×6.5×0.6		灰黒色・良好・良	単純曲線器文 (L.r)	○骨片内蔵あり、口縁割目、平行沈 線文。
6-2	*	*	*	1a 1b	*	*	*	6-2	*		*	*	*
7	9	鉢形	G1-II a中	/	復原	C2-A	精製土器	7	18.7×12.0×5.7×0.4		褐色褐色・良好・良	地文に縄文   左傾 胴下部縄文   L.R	・器形、口縁部形態は大洞C2式の 特徴を有するも地文は、入組工字 文の要素を見せる。
8	10	鉢形	G1-II a中	/	復原	A	精製土器	8	17.2×11.2×5.2×0.5~0.6		褐色褐色・良好・良	左傾縄文 (L.R) 地文も同じ	・大洞C2式地文がくずれ、入組工 字文が完成した地文である。
9	8	鉢形	G1-II a中	/	復原	C2*	精製土器	9	16.0×10.9×5.1×0.6		褐色褐色・良好・良	左傾縄文 (L.R)	・大洞C2の曲線文と大洞A的入組 工字文の要素あり。
10	8	深鉢形	G2-II a中	/	復原	C2*	粗製土器	10	11.1×10.5×4.5×0.5		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L.R)	・口縁小浅状、平行沈線文3条、内 面太い沈線1条。
11	8	鉢形	G2-II a下	/	復原	C2*	粗製土器	11	9.6×7.8×5.0×0.5		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L.R)	口縁に平行沈線文3条あり。
12	8	鉢形	G2-II a中	/	復原	C2*	精製土器	12	11.4×7.5×4.7×0.4		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L.R)	・口縁上縁割目・平行沈線文3条一 条。
13-1	8	鉢形	G1-II a中	/	復原	C2*	粗製土器	/	11.0×7.7×3.6×0.5		灰黒色・良好・良	縦位器文 (単純、L.r)	○骨片内蔵あり。朱を内蔵した痕跡 を認める。

〔市浦村五月女遺跡出土土器整理表〕 — (完形・復原土器)

〔表3〕 (No.2)

写 No.	群 別	器 形	出土区・層位	P No.	現存	土器型式	材質・粗製別	未測 No.	計 測 値		色調・焼成・胎土	銘 文 (縄 文)	備 考 (註記を含む)
									口径×器高×底径×器厚				
写 13-2	8	鉢形	G1-II a中	1 a 1 b	復原	大調 C2式	粗製土器	13-2	11.0×7.7×3.6×0.5		灰黒色・最良・最良	縦位押赤文 (車輪, L, r)	○骨粉内蔵あり, 本を内蔵した復原 を認める。
* 14	10	鉢形	G1-II a上		現 存	A	粗製土器	14	因上復原値 14.3×5.0×4.4×0.3~0.4		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○口縁内部に沈線文1条、外面A式 の典型的縄文あり。
* 15-1	8	鉢形	G1-II a中		完 形	C2+	粗製土器	/	13.2×7.8×4.7×0.6		*	左傾縄文 (L, R)	○骨片内蔵あり、縄文のL, RはO 段多条である。
* 15-2	*	*	*	1 a 1 b	*	*	*	15-2	*		明赤褐色・最良・最良	*	*
* 16	8	鉢形	G1-II a下		復 原	C2+	粗製土器	16	11.4×7.5×4.7×0.4		灰黄色・最良・良	縦位押赤文 (L, $\frac{r}{r}$ )	○口縁に沈線文3条、縦位押赤文の 縄文も一パターンである。
* 17	8	鉢形	G1-II a中		完 形	C2+	粗製土器	17	17.7×10.2×5.6×0.4~0.5		灰白色・良好・最良	左傾縄文 (L, R)	○口縁下に沈線文3条、底径に対 して口径の大きな特徴である。
* 18-1	8	鉢形	G1-II a中		復 原	C2+	粗製土器	/	15.4×10.7×6.8×0.5~0.6		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○骨片内蔵あり、口縁上端刻目、平 行沈線文3条
* 18-2	*	鉢形	*	1 a 1 b	*	*	*	18-2	*		*	*	*
* 19	8	鉢形	G1-II a F		復 原	C2+	粗製土器	19	24.5×15.7×6.7×0.6×0.7		暗赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○口縁に沈線文3条、肩部に1条施 文、大形鉢である。
* 20	8	深鉢	G2-II a中		復 原	C2+	粗製土器	20	14.2×12.7×6.4×0.6		明赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○口縁内部把手し有段口縁をなす。
* 21	8	把手付 鉢形	G1-II a中		復 原	C2+	粗製土器	21	11.1×9.0×4.6×0.5~0.6		暗赤色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○把手上部欠損、口縁上端に小突起 と沈線文、肩部に沈線1条めぐる。
* 22	8	鉢形	G2-II a中		復 原	C2+	平筒製土器	22	15.3×13.0×5.7×0.4		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○胎土・焼成とも最良で底径が小さ いのが特徴。
* 23	8	深鉢	G2-II a上		復 原	C2+	粗製土器	23	16.5×14.5×6.0×0.5~0.6		灰黒色・良好・良	左傾不整縄文	○重量のある土器、粘土粒をつなぐ 2条の沈線文あり。
* 24-1	8	深鉢	C1-II a中		復 原	C2+	平筒製土器	/	13.6×10.6×5.1×0.5		灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○骨粉内蔵あり。
* 24-2	*	*	*	1 a 1 b	*	*	*	24-2	*		*	*	*
* 25-1	8	盃形	G1-II a下		上下欠 失?	C2+	粗製土器	/	7.1×5.1×3.7×0.5~0.6		灰褐色・良好・良	無文	○骨粉内蔵あり、上半欠失するも盃 形土器であろう。

〔市浦村五月女菴遺跡出土土器整理表〕—(完形・復原土器)

〔表3〕 (No.3)

写 No.	群 別	器 形	出土区・層位	P No.	現 存	土 器 型 式	精製・粗製別	実測箇 No.	計 測 値		色調・焼成・胎土	施 文 (圖 文)	備 考 (註記を含む)
									口径×器高×底径×器厚				
写 25-2	8	壺形	G1-II a 下	1a 1b	上 半欠	?	C2式	粗製土器	25-2	7.1×5.1×3.7×0.5~0.6	灰褐色・良好・良	無文	○骨片内蔵あり、上半欠するも壺形土器であろう。
*	26	7	壺形	G3-II b 下	△	完 形	大同 C1*	精製土器	26	9.1×16.1×7.1×0.5	灰褐色・良好・良	左傾縄文 (L・R)	*口縁上部に縄文帯、球形の割部が特徴。
*	27	7	壺形	G3-II b 下	△	完 形	C1*	平精製土器	27	6.8×10.6×6.7×0.3~0.5	灰褐色・良好・良	左傾縄文 (L・R)	*口縁部無文研磨、球形の割部が特徴。
*	28	8	壺形	G1-II a 中	△	完 形	C2*	精製土器	28	10.6×14.5×5.5×0.8	灰白色・最良・良	無文	○四脚壺形土器、口縁部に特徴あり。
*	29	8	壺形	G2-II a 上	△	完 形	C2*	精製土器	29	7.3×14.9×5.3×0.3~0.6	明黄褐色・良好・良	施文の縄文 (R・L)	*未ぬり、縄文は施文として、胴下半は右傾する。
*	30	8	壺形	G1-II a 中	△	復 原	C2*	平精製土器	30	8.5×14.9×5.3×0.6~0.7	灰褐色・最良・良	左傾縄文 (L・R)	*大同C2式壺形土器の一バリエーションである。縄文のL・Rは、O段多条である。
*	31	8	壺形	G1-II a 上	△	完 形	C2*	粗製土器	31	6.6×12.2×4.2×0.7	赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L・R)	*口縁に小形突起、肩部研磨、縄文は、O段多条。
*	32	8	壺形	G1-II a 中	△	完 形	C2*	粗製土器	32	8.8×16.2×5.7×0.6	白灰褐色・良好・良	左傾縄文 (L・R)	*細い壺形土器(雑形土器)
*	33	8	小壺形	G1-II a 中	1	復 原	C2*	精製土器	33-1	3.0×6.0×2.8×0.5	黄白色・最良・最良	無文	肩部下縁に浅施文1本一属する。
*	33	8	壺形	G1-II a 中	2	完 形	C2式	粗製土器	33-2	5.5×7.0×3.8×0.5	明黄褐色・良好・良	無文	細口壺(雑形土器)
*	34	8	小壺形	C1-II a 中	1	ほ ぼ 完 形	C2式	精製土器	34-1	2.7×5.2×1.8×0.4	明黄白色・最良・最良	無文	*雑形土器、写34-1と比較すると器形の相違が理解される。
*	34	8	*	G1-II a 下	2	完 形	*	平精製土器	34-2	2.7×5.5×2.6×0.5	赤褐色・最良・最良	*左傾縄文 (L・R)	雑形土器
*	34	8	*	G1-II a 下	3	*	*	粗製土器	34-3	2.5×5.1×1.5×0.4	黄褐色・不良・良	無文	*縄文の施文一貫部左傾、割部横走下半左傾する。
*	35	8	壺形	G1-II a 下	△	ほ ぼ 完 形	C2*	粗製土器	35	9.7×22.8×7.8×0.5~0.8	灰褐色・良好・良	*L・R縄文左傾・横走	*口縁部無文、肩部一隅部へ左傾する細い不整(L・R)縄文施文。
*	36	8	壺形	G2-II a 中	△	復 原	C2式	粗製土器	36	8.3×16.1×6.5×0.4~0.5	赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L・R)	○骨片、貝、魚骨内蔵あり。
* 37-1	10	壺形	G1-II a 上	△	復 原	A*	粗製土器	37-1	9.2×20.4×5.9×0.5×0.7	赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L・R)	○骨片、貝、魚骨内蔵あり。	

〔市浦村五月女遺跡出土土器整理表〕— (完形・復原土器)

〔表3〕 (No.4)

写 No.	器 別	器形	出土区・層位	P No.	復原	土器型式	精製・粗製別	実測 No.	計 測 値		色調・焼成・胎土	施 文 (縄 文)	備 考 (註記を含む)
									口徑×器高×底径×器厚				
写 37-2	10	壺形	G1-II a上	1 a 1 b	復原	大割 A *	粗製土器			9.2×20.4×5.9×0.5-0.7	赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	○骨片、貝、魚骨内蔵あり
*	38	10	壺形	G2-II a下	復原	A *	粗製土器	38		9.8×25.4×7.3×0.4-0.5	明赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	・大形壺で、大割A式のパターンである。
*	39	10	壺形	G1-II a下	復原	A *	粗製土器	39		6.9×8.8×4.2×0.3-0.4	灰赤褐色・良好・良	左傾縄文 (L, R)	・口縁上部・肩部に各沈線文、肩部無文。
*	40	8	台鉢 付形	G2-II a下	復原	C2 *	粗製土器	40		13.1×9.2×6.7×0.4	灰黒色・良好・良	左傾縄文 (L, R) ( $\frac{2}{3}$ )	・口縁上端縄文、沈線文3条、縄文は、0段多条である。
*	41	9	台浅鉢 付形	G1-II a中	復原	C2 *	精製土器	41		18.0×8.0×10.0×0.4-0.8	灰黄色・最良・最良	無文	・台高3.6cm、口縁部に沈線文、内面に沈線文1条あり。
*	42	8	台鉢 付形	G1-II a上	1	復原	C2 *	粗製土器	42-1	現存高 8.2×5.3×7×0.3-0.4	灰黒色・良好・良	右傾不整縄文 (R, L)	・袖珍土器、口縁～胴部寸欠失、台部欠失
*	42	8	皿形	G1-II a中	2	*	C2 *	*	42-2	6.2×2.0×5.8×0.3	赤褐色・良好・良	無文	・袖珍土器、手づくねによる成形
*	42	8	台鉢 付形	G1-II a上	3	ほろ 完形	C2 *	*	42-3	2.4×1.9×2.2×0.3-0.4	灰褐色・良好・良	無文	・袖珍土器、手づくねによる成形
*	43	8	皿形	G1-II a中	復原	C2 *	半精製土器	43		14.3×4.3×0×0.4-0.5	灰黒色・良好・良	・2条の沈線文	・内面口縁下に沈線文1条施文
*	44	8	皿形	G2-II a中	1	復原	C2 *	半精製土器	44-1	11.8×3.1×0×0.4	灰黒色・最良・最良	無文	・外面無文・内面1条の沈線文
*	44	8	皿形	G2-II a中	2	ほろ 完形	C2 *	*	44-2	11.3×3.6×0×0.4-0.5	灰黒色・良好・良	・外面2条の沈線文	・内面沈線文なし。
*	45	8	皿形	G1-II a上	復原	C2 *	粗製土器	45		13.9×3.6×0×0.3-0.4	赤褐色・不良・不良	無文	・胎土に砂粒を含み、焼成も悪く、もろい。
*	46	8	皿形	G1-II a上	復原	C2 *	精製土器	46		15.1×4.7×0×0.5	灰白色・良好・良	無文	・内面・外面とも無文である。
*	47	9	盃形	G2-II a中	1	復原	C2-A *	粗製土器	47-1	13.0×5.2×0×0.4-0.5	灰黒色・良好・良	・外面2条の沈線文あり	・朱ぬり、朱ぬり土器の焼成・胎土は特別の技術による。
*	47	*	G1-II a中	2	完形	C2-A *	粗製土器	47-2		15.4×6.4×4.5×0.4-0.6	灰黄色・良好・良	・無文	・器内面に1条の沈線文がめぐる
*	48	9	盃形	G1-II a中	復原	C2-A *	粗製土器	48		15.3×5.8×3.4×0.6	灰黒色・良好・良	・外面は無文、内面に沈線文1条	・朱ぬり痕・やわらかい焼成、そのための胎土選定があるようである。

〔市浦村五月女菰遺跡出土土器整理表〕 — (完形・復原土器)

〔表3〕 (No.5)

号 No.	群 別	器 形	出土区・層位	P No.	現存	土器型式	材質・肌製別	実測 No.	計 測 試		色調・焼成・胎土	施 文 (施 文)	備 考 (注記を含む)
									11径×器高×底径×器厚				
写 49	10	甌形	G2-II a中	/	復原	大洞 A式	精製土器	49	11.0×4.0×3.7×0.3~0.6		灰黒色・良・良	・無文	朱ぬり、口縁・押圧文・肩部山形突起あり。
* 50	10	浅鉢	G1-II a中	/	ほぼ 完全	A*	精製土器	50	17.2×6.1×6.1×0.6		明灰黄色・最良・最良	・縄文なし ・入組工字文	・連続山形突起が特徴である。 朱ぬり、朱ぬり土器の胎土の選定・焼成温度が配慮されている。
* 51	10	浅鉢	G2-II a中	/	ほぼ 完全	A*	精製土器	51	17.6×5.7×3.6×0.3~0.4		明赤黄色・最良・最良	・無文	・口縁下に2条の沈線文、や、上げ底
* 52	6	注土 11器	G2-II 下	/	復原	HC*	精製土器	52	最大山 5.5×8.8×12.6×0.4		黒色・最良・最良	・口縁半周伏文 ・割部ニ、交叉文の施文	黒色研削注土器
* 53	8	壺形	G2-II a下	/	復原	C2*	精製土器	53	? ? ? 4.5×8.0×5.0×0.4~0.7		黄褐色・最良・良	・左傾縄文 (L, R)	・口部・底部欠大、大洞C2式の典型的な文様
* 54	8	注上 11器	G1-II a下	1a 1b	現存 子	C2*	精製土器	/	/		灰黒色・良・良	・左傾縄文 (L, R)	・ほぼ六角形をなす器形、大洞C2式施文と同A式施文を見せるものである。
* 54	8	異土 形器	G1-II a下	2	ほぼ 完全	C2*	半精製土器	54-2	2.1×9.0×0.8×0.2~0.3		灰黒色・良・良	・右傾懸糸文 (R-2)	流部上面に沈線文2条施文、口縁上端欠大
* 55	8	台形	G2-II a中	1	上半欠	C2*	精製土器	/	/		赤褐色・悪・良	・沈線文1条	朱ぬり土器である。
* 55	8	台形	G1-II a下	2	*	C2*	粗製土器	/	/		暗褐色・悪・悪	・無文	・器外面もろい、手づくねによる成形
* 55	8	軸土 形器	G1-II a中	3	11寸欠	C2*	粗製土器	/	/		暗褐色・良・良	・無文	・縦位のなでの痕を認める。壺形
* 55	8	軸土 形器	G1-II a中	4	4寸欠	C2*	粗製土器	/	/		赤褐色・良・	・無文	・手づくねによる成形・鉢形
* 55	8	軸土 形器	G1-II a中	5	4寸欠	C2*	粗製土器	/	/		赤褐色・良・良	・綾杉文施文	・手づくねによる成形・壺形?
* 55	8	軸土 形器	G1-II a中	6	4寸欠	C2*	粗製土器	/	/		朱ぬり・最良・良	・無文	・手づくねによる成形・壺形
* 55	6	小蓋 形器	G1-II a下	7	4寸欠	BC*	精製土器	55-7	/		朱ぬり・最良・良	・菱形文	・朱ぬり土器特有の器外面の割痕あり。

〔表4〕

市浦村		五月女遺跡出土土器、形式別、器形別分類数表															1983. 1. (新谷)									
型 式	群別	精 製 上 器										粗 製 土 器					計	備 考								
		鉢形	浅鉢形	深鉢形	壺形	台付鉢形	甕形	注口形	溝形	土面	土偶	鉢形	浅鉢形	深鉢形	壺形	台付鉢形			甕形	製壺形	異形	土製品				
円筒上層 d 2 式	1																				1	☆中期の土器				
十椀内I式	2																				4	☆後期の土器				
十椀内II式	3																				3	☆第4群(十椀内III・IV式)を欠く。				
十椀内V式	5																				7					
大 洞 B・C式	6			2	3				①												25	51	1	①	82 (83)	
大洞C1式	7	③			①										①						14	23	3	③	96 (88)	☆晩期の土器
大洞C2式	8	③			⑤	①			①					③	④	③	⑥		①	①	1	20	12	⑤	362 (159)	
大 洞 C2-A式 (仮称)	9	④			①			②											①			1		⑥	151 (159)	☆大洞C2 A式は、仮 称である。
大洞A式	10		④						①						③							1		⑦	50 (57)	粗土器数 (796)
( 計 )		⑦	④		⑦	①		②	②	①		③		④	③	③	④	①		①				⑧		粗製土器数 (391)
		55	10	120	81	11	36	2	39	1	10	2	71	151	43	3	58		20	13				726		粗製土器数 (404)
		62	14	120	88	12	36	4	41	1	11	2	84	155	59	8	64	1	20	1	13				795	
備 考	1. 半精製土器は、粗製に含めた。 2. 破片土器のうち、鉢形と深鉢形土器の分類には差異がある。 3. 数字は出土した土器のサンプル数をあらわす。(個体数)。空白○で囲むものは、実形・復原土器数である。																									

- (1) 土器・土製品、(表2、表3-No1~No5、表4および、写1~写55、P. L1~120、図版→実測図1~53)

さきに述べたとおり、出土した土器・土製品は、りんご用ダンボール(43×38×33)で、約28箱(2箱は石器類)の出土である。

これらの出土土器を精査し、完形土器、復原土器、および破片のうち代表的なものを抽出して、当遺跡出土土器の全容が把握できるように配慮してサンプルし、本報告に掲げたものである。

(a) 本遺跡出土土器の各型式(表2)

本遺跡より出土した土器は、その大部分は、縄文時代晩期の土器群である。また、ごく少数の縄文時代中期円筒土器 d2 類、および、縄文時代後期の「腰内Ⅰ式、同Ⅱ式、同Ⅲ式」の各型式の土器が少数含まれている。

これらの土器群を群別、型式別に整理し編年表にまとめると、(表2)のようになる。

(表2)に示すように、本遺跡より出土した土器群を、群別、型式別に分類すると、第1群~第15群土器に分類される。

このうち、第11群、第12群、第13群、第14群、第15群土器は、粗製土器である。

以下、各群、各型式ごとに、簡単に解説してみることにする。

(b) 群別、型式別土器(表4)

○第1群土器(円筒上層式土器d2類)←(中期)－P・L1－1

この群とした土器は、(表4)に示すとおり、わずか1点の出土で、小破片である。このものは、深鉢形の円筒土器と思われるもので、器表面に粘土紙を貼りつける、いわゆる貼付文(てんぶもん)のあるもので、その貼付文の上には、縄文の押圧文が無いものである。また、胎上には砂粒を含むものである。

○第2群土器(十腰内I式土器)←(後期) P・L2－7. 8. 9. 12

(表4)に示すように、第2群とした十腰内I式土器は、破片数で、4片の出土である。

この第2群(十腰内I式)土器は、当地方に近い「十腰内遺跡」を標式遺跡とするもので、縄文時代後期初頭の土器型式である。

出土土器は、いずれも深鉢形土器の破片であって、これらのものは、沈線文が、横走するもの、磨消縄文の手法を見せるもの、半分に割った竹等によってやや右下りに沈線を縦位に施文するもの等が認められる。

○第3群土器(十腰内II式)←(後期)－P・L1－2. 4. 6

この第3群(十腰内II式)土器は、3片の出土である。このものも深鉢形土器の破片と思われる。

これらのものは、P・L1－2・4・6に示すように、平行沈線文を縦にS字状に連結する施文のもの(2・6)、および、磨消縄文の手法を見せるもの(4)もある。(註、P・L1－4としたものは、第5群土器の可能性もあるが一応この群とした。)

☆ 註、第4群土器、すなわち、十腰内III式、および、十腰内IV式土器は、検討の結果、出土しないので、欠番とした。(P・L1－3を十腰内III式と誤認したためである。)

○第5群土器(十腰内V式)←(後期)－P・L2－10, 11, P・L3－13～17。

この群の土器は、全部で7片の出土である。

このものは、瘤付土器とも言われるもので、ボタン状の瘤を有するもの(15)、瘤に十字の施文のあるもの(13)、もあり、この瘤を中心に、磨消縄文が施文されるものである。

そして、この十腰内V式土器の施文要素は、つぎの縄文晩期の土器型式である大洞B1式の施文に近づいていることを示している。(特にP・L3－13・14・17)

竈以上、縄文時代中期、後期の土器について述べたのであるが、その出土数は、総数15片である。これらの土器片は、多分混入と見てよいのであろう。付近の踏査を十分にしていので断定は控えるが、一応混入として処理をすることにする。

つぎに第6群土器について述べるのであるが、第6群土器から第10群土器、および、第11～第15群土器は、縄文時代晩期の土器群である。

すなわち、土器型式で、大洞B・C式、大洞C1式、大洞C2式、大洞A式の各型式の土器である。本遺跡においては、(表2)に示す縄文時代晩期の土器型式六型式のうち、B式、A式(Aダッシュ式)を除く、四型式の土器が出土した。以下、それについて述べることにする。(但し、第9群土器とした大洞C2-A式→仮称については後述する。)

(縄文時代晩期の土器) (表4、表3、写1～写55、P.L1～P.L120、実測図→図版1～53)

#### (C) 群別・型式別土器(表4)

- 本遺跡から出土した縄文時代晩期の土器は、既述したとおり、第6群～第10群土器、および、第11群～第15群土器に群別した。

これらの土器群を型式別に分類し、整理すると、(表4)に示すようになる。

(表4)に示すように、出土した土器をその群別、型式別に分類し、さらに器形別に分類して、再掲するとつぎようになる。

#### ◎第6群土器(大洞B・C式)→総数83(1)

- 精製土器→深鉢2、壺形3、注口26(1)
- 半精製・粗製土器→深鉢51、壺形1

#### ◎第7群土器(大洞C1式)→総数68(2)

- 精製土器→鉢形12、深鉢7、壺形5、皿形3、注口14
- 半精製・粗製土器→鉢形23、深鉢3、壺形1

#### ◎第8群土器(大洞C2式)→総数413、(51)

- 精製土器→鉢形32、浅鉢4、深鉢20、壺形55、台付鉢8、皿形13、盥形2、注口11、異形土器1、把手10、土偶2
- 半精製・粗製土器→鉢形60、深鉢64、壺形54、台付鉢8、皿形46、製塩土器(深鉢形)20、異形土器1、土製品12

◎第9群土器（大洞C2-A式→仮称）→総数159（8）

- 精製土器→鉢形17、浅鉢2、深鉢84、壺形22、台付鉢1、皿形7、盥形2。
- 半精製・粗製土器→鉢形1、深鉢21、盥形1、土製品1。

◎第10群土器（大洞A式）→総数57（7）

- 精製土器→鉢形1、浅鉢8、深鉢7、壺形3、台付鉢3、皿形13、《土面1》
- ・半精製・粗製土器→深鉢1、壺形3、皿形18。

以上のように、群別、型式別、器形別に整理されるのである。

なお、第11群～第15群土器としたものは、それぞれの型式別に分類し、含めて計算してあるので念のため申し添えておく。

また、総数のつきに「」で示した数字は、完形または復原した土器数である。このことについては後述する。

(d) 器形別出土数について、（晩期のみ）

(c)において、群別、型式別の出土数と、各型式に属する器形別出土数、すなわち、各型式における土器組成のありさまを、（表4）をもとに明らかにしようと試みた。

この項では、晩期の各型式をとおした、器形別出土数をまとめ、晩期における器形別土器数（土器組成）のあり方を眺めてみよう。

○精製土器

鉢形62、浅鉢形14、深鉢形120、壺形88、台付鉢12、皿形36、盥形4、  
注口41、異形土器1、土面1、把手10、土偶2。

○半精製・粗製土器

鉢形84、浅鉢形0、深鉢形140、壺形59、台付鉢8、皿形64、盥形1、  
製塩土器20（深鉢形）異形土器1、土製品13。

以上のようになっている。すなわち、(C) (d)における型式別の土器組成のあり方、および縄文時代晩期全期間をとおした器形別土器数の推移は、その型式の特徴や、晩期という一時期の特色を理解する一助になるものと考えられる。

なお、このことについては、考察の項で再度述べることにした。

〔☆ 註、用語について〕

本報告書において、「精製土器」「半精製土器」「粗製土器」という用語を使用してある。  
この用語について簡単に述べておきたい。

○精製土器

本報告書において「精製土器」と記しているものは、次の各項に該当するものである。

- 1) 晩期の各型式における主文様の施文されるもの。
- 2) 朱ぬりのあるもの。
- 3) 無文でも、研磨された器面のもの。
- 4) 1)～3)のいずれかを兼ねているもの。

○粗製土器

本報告書において、「粗製土器」と記しているものは、次の各項に該当するものである。

- 1) 口縁直下より縄文のみ施文されるもの。
- 2) 口頸部のみに、その属する型式の施文があり、肩部下より底部まで縄文、撚糸文、条痕文の施文されるもの。
- 3) 無文で、研磨されていないもの。
- 4) 煮沸痕があり、主文様のないもの。

○半精製土器

本報告書において、「半精製土器」と記してあるものは、次の各項に該当するものである。

- 1) 口頸部に、その属する型式の施文があり、肩部より底部へ縄文が施文されるものでも、胎上、焼成が特に良く、口頸部が研磨されているもの。
- 2) 施文は、粗製土器と同様であるが、仕上がりが美麗で堅緻な焼成のもの。

以上の区分によって、「精製・半精製・粗製土器」の用語を使用している。

(e) 本遺跡の造営された時期について（出土土器の検討から）

本遺跡の発掘調査において、出土した土器群は、第1～第15群土器に分けられ、それを土器型式によって型式分類すると、最も古いものは、縄文時代中期の円筒上層式土器d2類であり、つぎは、縄文時代後期の十腰内I・II・V式土器であることは既に述べたとおりである。（表2・表4参照）

また、本遺跡を営んだ最も中心となる時期は、出土土器が示すように、大洞C2式土器が最も多く、つぎに、大洞C2-A式→（仮称）とした土器が多いことが理解される。念のために、（表4）

から再開すると、下記ようになる。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{大洞B・C式} \quad 83 (1) \\ \text{大洞C1式} \quad 68 (2) \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} \text{大洞C2式} \quad 413 (51) \\ \text{大洞C2-A式} \quad 159 (8) \\ \text{大洞A式} \quad 57 (7) \end{array} \right\}$
---	---

以上のように、本遺跡を造営した人々が、多くの土器を造り生活したのであるが、その中心時期は、大洞C2式土器を使用した時期であり、その生活の連続の中で、大洞C2-A式→(仮称)の土器を使用し、若干の大洞A式土器を使用し始めた時期に、この遺跡を放棄したものであろう。

この、大洞C2→(C2-A)→A式土器を検討すると、極めて連続性を持っていることが認められる。(註・本遺跡の地域性をもった連続性である。)

また、大洞B・C式→大洞C1式土器を検討した場合も、大洞B・C式の名残りを止める大洞C1式土器の出土が濃密である。(註・一般的連続性である。)

しかし、大洞C1式土器と、大洞C2式土器では、その出土数は、極端に違い、また器形別、すなわち、土器組成の上からも、さらに施文の連続性の問題からも断層がある。

したがって、大洞B・C～C1式期と、大洞C2～A式期に分けて本遺跡を考える必要がある。このことについては、考察の項でさらに述べることにしたい。

(「完形・復原土器、および、破片土器について(表3、表4、実測図→図版1～53、写1～55、P.L1～P.L120)

本遺跡より出土した完形・復原土器は、(表3-No.1～5、および写1～55、実測図→図版1～53)に示すとおり、約69個体分である。

これらの個々については、(写1～55)において記述しているので一読されたい。

また、破片土器については、(P.L1～P.L120)に、解説してあるので、ここでは省略する。

◎第1群～第5群土器 (中期・後期の土器)		P・L1～P・L3 No 1～17
◎第6群～第10群土器 ◎第11群～第15群土器 (晩期の土器)		P・L4～P・L100 P・L101～P・L120 No 18～627
群別・型式別	P・L No	土器 No
○第6群土器 (大洞B・C式)	P・L4～P・L9 P・L92～P・L96	18～48、50 556～563、572～581、 583～585、588～593
○第7群土器 (大洞C1式)	P・L9～P・L14  P・L21 P・L50 P・L64 P・L65 P・L93 P・L94～96	49、51～73、74、77～85、 90～95、97～100、102～103 133 324 375、378 387～389 564～571 582a～582b 586～587、594～596
○第8群土器 (大洞C2式) (☆注P・L18～114・116・ 117は第9群土器へ)	P・L1 P・L11～14 P・L15～25 P・L27 P・L29 P・L30～33 P・L50 P・L52～56 P・L63 P・L65 P・L66～74 P・L75～87  P・L89～90	3、5 75、76、86～89、96、101 104～167 177、178 185 186～211 320～323、325、326 329～343 373、374 384、386 390～443 444～471、473～480、 485～491、493～505、 507、509～514、516、 517 534、537、540、542、 547

	P-L91 P-L97~100	548、550~554 597~601、603、615、 616、619~627
○第9群土器 (大洞C2-A式→仮称)	P-L18 P-L26~27 P-L34~49 P-L51 P-L61~62  P-L80 P-L88~90  P-L98~99	114、116、117 168~176、179、180 212~319 327、328 358、359、361、 362~368、370、371、 472 518~529、531~534、 539、541、544 604、617
○第10群土器 (大洞A式)	P-L27~28 P-L57~60 P-L61~62  P-L64~65  P-L82 P-L84~87 P-L89~90  P-L91	181~183、184 344~355 356、357、360、369、 372 376、377、379~383、 385 481~484 492、506、508、515 530、535、536、543、 545、546 549、555
○第×群土器	P-L98~99	602、605~614、618
○第11群土器(1類) (第7群土器)併行	P-L101~102	628~636、637~642
・第11群土器(2類) (第8・9群土器)併行	P-L103	643~646
・第11群土器(3類) (第8・9群土器)併行	P-L104~105 P-L120	647、648、649、650、 723
・第11群土器(4類) (第8群土器)併行	P-L106	651~659
・第11群土器(5類) (第8群土器)併行	P-L107	660~665

○第12群土器 (製塩土器) (a類~b類)	P.L.108 ~ 111	666 ~ 675、676 ~ 679 686 ~ 688、680 ~ 684
○第13群土器 (第8群土器) 併行	P.L.111 P.L.112	685、687、689、690 691 ~ 694
○第14群土器 (第8・9群土器) 併行 (a類、b類、c類)	P.L.113 ~ 114	695、696、697 ~ 699
○第15群土器 (第8群土器) 併行 (a類、b類)	P.L.115 ~ 120	700、717、719、721、 701 ~ 716、718、720、 722、724 ~ 726

## (2) 石器・石製品 (表5-No 1~17、S-P.L.1~55)

本遺跡の発掘調査において出土した石器・石製品は、総数で442点の多数にのぼる量である。発掘面積77.4㎡という広さに比して、石器の出土数は、きわめて濃密であるということが可能である。

これらの石器、石製品を、器種別に分類すると、つぎのように分けられる。

## (a) 石器・石製品の分類

① 石鏃 ・有柄 106 ・無柄 1	② 石槍 32 小形石槍 51	③ 石錐 46	④ 削器 有柄 24 無柄 21
⑤ 播器 35	⑥ 石斧 6 石斧状石器 6	⑦ 抉入石器 2	⑧ 石刀 5
⑨ 石棒 2	⑩ 石錘 2	⑪ 鋸形石器 1	⑫ タタキ石 11
⑬ クボミ石 1	⑭ 磨痕のある 扁平石器 14	⑮ 剥離痕のある 扁平石器 3	⑯ 磨痕や打欠 きのある扁 平石器 9
⑰ 石製装身具 ・自然石に穿孔のあるもの 11 ・勾玉 1 ・小玉未完成品 (原石に穿孔のあるもの)	・ペンダント状石器 1 ・小玉完形品 2 8	⑱ 長方形石製 品 1 ⑲ 緑石原石 37 ⑳ 接合資料 1	

以上のように、石器・石製品を含めて約20器種に分類することができる。

つぎに、これらの石器・石製品に使用された岩質について述べると、つぎようになる。

(b) 石器・石製品の岩質分類

①珪質頁岩	226 (51.01%)	⑥黒曜石	4
②頁岩	1	⑦碧玉	11 (2.48%)
③めのう	73 (16.47%)	⑧螢白石	2
④ホルンフェルス	83 (18.73%)	⑨安山岩	5
⑤流紋岩 (錦石)	13 (2.93%)	⑩玄武岩	3
⑥流紋岩	10 (2.25%)	⑪花崗閃緑岩	7
⑦流紋岩 (めのう)	1	⑫石英	1
☆ (総数 442)		⑬ひすい	3

以上のように、15岩質になっている。このうち注目すべきは、⑥のひすいである。このものは、S・P・L 52-1・2・3、表5-No.17-1・2・3に示すとおり、勾玉完形品1こと、未完成品2ことである。

青森県内においては、ひすいの原石は産出しないというのが通説であるとするれば、当然そこには交流の問題を考えてみる必要があろう。縄文時代晩期の遺跡からは、ひすいの勾玉等が、本県においては報告例が若干ある。

このことから、かなり広汎な範囲にわたって、交流の問題を考えてみる必要があろう。

以上、石器の器種、および、その岩質について述べてきたのであるが、各器種の類別、計測値、出土層位等については、(表5-No.1~17)に示してある。

また、S・P・L 1~55には、その写真を掲示した。スペースの都合で詳細は記し難いので、要点のみ考察の項において述べることにしたい。

市浦村五月女遺跡出土・石器・石製品等一覧表

[表5] - 161

種別	類別	P. L. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×器厚)cm	重量(g)	岩質	出土区・層位
石 鏃 (有柄 石鏃)	- 類	1	1	☆ 3.07 × 1.07 × 0.42	1.1	珪質頁岩	G1-IIa下
			2	☆ Pich 3.06 × 1.27 × 0.63	☆ 1.8	"	G2-IIa中
			3	3.75 × 1.35 × 0.75	2.5	"	G3-IIa中
			4	2.91 × 0.92 × 0.35	0.8	"	G1-IIa中
			5	3.5 × 1.3 × 0.41	1.2	黒曜石	G1-IIa中
			6	3.1 × 1.17 × 0.54	1.2	珪質頁岩	G2-IIa中
			7	☆ 2.28 × 1.2 × 0.42	☆ 0.8	"	G1-IIa中

[表5] - No.2

種別	類別	P. I. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×厚み)cm	重量(g)	岩質	出土区・層位	
有柄 石鏃	一 類 つ ぶ き	1	8	8	Pich 2.88 × 1.20 × 0.42	0.9	珪質頁岩	G1-IIa中
			9	9	☆ 3.18 × 1.32 × 0.56	☆1.3	"	G1-IIa下
			10	10	3.3 × 1.4 × 0.45	1.4	"	TP1-IIa上
			11	11	3.55 × 1.26 × 0.46	1.2	めのう	G1-IIa中
			12	12	☆ Pich 3.4 × 1.3 × 0.5	☆1.5	珪質頁岩	G1-IIa中
			13	13	☆ Pich 2.85 × 1.25 × 0.4	☆1.1	"	G1-IIa上
			14	14	☆ 2.58 × 1.25 × 0.4	☆1.9	"	G1-IIa上
			15	15	2.72 × 1.32 × 0.45	1.2	"	G1-Ib上
			16	16	☆ 2.75 × 1.27 × 0.4	☆1.1	めのう	TP1-Ib中
			17	17	☆ 2.68 × 1.9 × 0.4	☆1.3	珪質頁岩	G1-IIa中
			18	18	Pich 2.5 × 1.32 × 0.42	1.0	"	G4-Ib下
			19	19	3.1 × 1.3 × 0.4	1.3	"	G1-IIa
			20	20	☆ 2.25 × 1.42 × 0.48	☆1.6	"	TP1-Ib中
			21	21	2.7 × 1.1 × 0.52	0.95	めのう	TP1-Ib中
		22	22	2.35 × 1.52 × 0.45	1.1	"	G1-IIa中	
		23	23	3.12 × 1.25 × 0.5	1.7	珪質頁岩	G4-Ib下	
		24	24	☆ 3.1 × 1.7 × 0.62	☆2.2	ホルンフェルス	G1-IIa中	
		25	25	3.2 × 1.4 × 0.49	1.1	珪質頁岩	G1-IIa中	
		26	26	☆ 2.92 × 1.3 × 0.5	☆1.4	めのう	G1-IIa中	
		27	27	☆ 3.14 × 1.5 × 0.5	☆1.5	珪質頁岩	TP1-Ib中	
		28	28	☆ 3.05 × 1.36 × 0.6	☆1.7	"	TP1-Ib上	
		29	29	3.86 × 1.52 × 0.8	3.0	めのう	TP1-IIa中	
		30	30	☆ 3.16 × 1.35 × 0.51	☆1.7	"	G1-IIa中	
		31	31	3.02 × 1.43 × 0.7	1.9	珪質頁岩	G1-IIa下	
		32	32	2.59 × 1.15 × 3.5	0.8	"	G1-IIa下	
		33	33	3.12 × 1.1 × 0.35	0.8	"	G1-IIa中	
		34	34	3.7 × 1.3 × 0.4	1.5	"	TP1-Ib中	
		35	35	先端部磨痕あり 2.4 × 1.1 × 0.35	0.6	"	TP1-Ib中	

〔表5〕-6/3

種別	類別	P. I. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×器厚)cm	重量(g)	岩質	出土区・部位	
(有柄) 石叢	一 類 つ ぶ き	4	36	36	3.55 × 1.25 × 3.8	0.9	珪質頁岩	G1-IIaD
			37	37	先端部磨損 3.17 × 1.15 × 0.49	1.0	"	G1-IIa上
			38	38	☆磨損先端にある。 2.96 × 1.4 × 0.36	☆ 1.1	"	G1-IIa上
			39	39	☆ 2.82 × 1.4 × 0.4	☆ 1.1	"	G4-1b中
			40	40	☆ 2.37 × 1.32 × 0.38	☆ 1.1	"	TP1-IIa上
			41	41	3.26 × 1.20 × 0.32	1.2	"	G1-IIa中
			42	42	4.01 × 1.4 × 0.37	1.3	"	TP1-IIa上
			43	43	☆ 3.71 × 1.38 × 0.51	☆ 1.4	"	G1-IIa中
			44	44	3.85 × 1.25 × 0.82	1.4	"	G1-IIa中
			45	45	先端磨損 5.42 × 1.23 × 0.58	3.6	"	G1-1b上
			46	46	4.01 × 1.28 × 0.72	3.4	"	G2-IIa上
			47	47	☆ Pitch 3.17 × 1.6 × 0.58	☆ 1.6	"	G1-IIa中
			48	48	3.12 × 1.68 × 0.58	2.4	"	TP1-IIa中
			49	49	☆ 2.98 × 1.80 × 0.49	☆ 1.9	めのう	TP1-1b中
	50	50	2.49 × 1.25 × 0.44	0.9	珪質頁岩	G1-1bD		
	51	51	2.77 × 1.45 × 0.28	0.6	"	G1-IIa中		
	52	52	4.15 × 2.03 × 0.8	4.05	"	G1-IIa中		
	53	53	3.12 × 1.97 × 0.61	2.0	"	G1-IIa中		
	54	54	2.78 × 1.42 × 0.45	1.3	めのう	TP1-IIa中		
	55	55	3.35 × 1.6 × 0.52	1.9	珪質頁岩	G1-1b中		
	56	56	☆ 2.5 × 1.8 × 0.48	☆ 1.6	めのう	G1-IIa中		
	57	57	☆ 2.10 × 1.3 × 0.32	☆ 0.7	珪質頁岩	G1-IIa		
	58	58	☆ 2.08 × 1.32 × 0.45	☆ 0.95	めのう	G1-IIa上		
	59	59	3.51 × 1.2 × 0.41	1.4	珪質頁岩	G1-IIa中		
	60	60	☆ 2.8 × 1.15 × 0.40	☆ 1.0	めのう	G1-IIa中		
	61	61	2.8 × 1.0 × 0.40	0.8	珪質頁岩	G1-IIa中		
	62	62	2.12 × 1.2 × 0.3	0.7	"	G1-IIa中		
	63	63	☆ 3.98 × 1.1 × 0.5	☆ 1.7	"	G1-1bD		
		三 類						

〔表5〕-6.4

種別	類別	P. L No	整理No	計測値 (長径×最大幅×器厚)cm	重畳(伊)	岩質	出土区・層位	
(有納) 石鉄	三 類	6	64	64	3.26 × 1.20 × 0.38	1.2	珪質頁岩	G1-IIa中
			65	65	4.12 × 1.22 × 0.55	2.2	めのう	TP1-Ib中
			66	66	☆ 2.56 × 1.3 × 0.4	☆ 1.0	珪質頁岩	TP1-IIa中
			67	67	☆ 3.42 × 1.20 × 0.6	☆ 1.8	"	G1-Ib中
			68	68	☆ 3.40 × 1.90 × 1.10	☆ 1.85	"	G1-Ib中
			69	69	3.25 × 1.10 × 0.4	1.1	"	G1-IIa中
			70	70	3.0 × 1.05 × 0.36	1.0	めのう	G4-Ib下
			71	71	☆ 3.33 × 1.47 × 0.52	☆ 2.3	"	TP1-Ib中
			72	72	4.10 × 1.4 × 0.46	1.8	"	G1-Ib中
			73	73	2.28 × 1.05 × 0.38	0.65	"	TP1-表採
			74	74	2.82 × 1.07 × 0.32	0.55	珪質頁岩	G1-Ib上
			四 類	7	75	75	☆ 1.90 × 1.5 × 0.31	☆ 0.48
	76	76			☆ 2.25 × 1.38 × 0.42	☆ 0.7	黒曜石	G1-IIa下
	77	77			☆ 2.05 × 1.35 × 0.49	☆ 0.9	珪質頁岩	TP1-IIa上
	78	78			2.75 × 2.12 × 0.6	2.3	"	G1-IIa中
	79	79			☆ 2.38 × 1.62 × 0.63	☆ 1.55	"	TP1-Ib中
	80	80			☆ 2.5 × 1.52 × 0.63	☆ 1.6	"	G1-IIa下
	81	81			☆ 2.55 × 1.6 × 0.48	☆ 1.3	"	G1-Ib上
	82	82			2.83 × 1.82 × 0.49	1.5	"	TP1-Ib
	83	83			2.18 × 1.3 × 0.49	0.9	"	G1-IIa下
	五 類	8	84	84	☆ 1.79 × 1.17 × 0.47	☆ 0.4	"	G1-IIa中
			85	85	2.1 × 1.08 × 0.30	0.5	"	G1-IIa中
			86	86	1.98 × 0.93 × 0.48	0.6	"	G1-IIa中
			87	87	☆ 2.5 × 0.99 × 0.30	☆ 0.6	"	G1-IIa中
			88	88	☆ 2.23 × 1.22 × 0.40	☆ 0.7	"	G1-Ib中
			89	89	2.0 × 1.1 × 0.40	0.7	めのう	TP1-IIa中
			90	90	2.3 × 1.1 × 0.52	0.95	珪質頁岩	G1-Ib下
91			91	1.75 × 0.79 × 0.38	0.4	めのう	G1-Ib上	

〔表5〕-65

種別	類別	P. L. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×器厚)cm	重積(9)	岩石	出土区・層位		
(有柄) 石鏃	六類	9	92	92	☆ 1.79 × 1.0 × 0.32	☆ 0.5	めのう	G1-表採	
			93	93	☆ Flake 2.90 × 1.17 × 0.43	☆ 1.1	珪質頁岩	G1-Ib上	
			94	94	☆ 3.10 × 1.80 × 0.55	☆ 2.6	"	G1-IIa中	
			95	95	☆ 3.12 × 1.40 × 0.52	☆ 1.7	めのう	G1-IIa下	
			96	96	4.45 × 1.90 × 0.9	3.9	珪質頁岩	G1-IIa上	
			97	97	6.12 × 1.28 × 0.85	4.9	流紋岩(綿石)	G1-IIa中	
	七類		98	98	3.10 × 1.70 × 0.61	1.8	珪質頁岩	TP1-Ib中	
			99	99	3.75 × 2.08 × 0.82	3.8	めのう	G1-Ib上	
	八類		100	100	4.32 × 1.6 × 0.71	3.5	"	G1-IIa上	
			101	101	☆ 2.55 × 1.30 × 0.5	☆ 1.0	珪質頁岩	G1-IIa中	
	X類		102	102	☆ 2.2 × 1.45 × 0.51	☆ 1.0	めのう	TP1-IIa上	
			103	103	☆ 2.72 × 1.45 × 0.41	☆ 1.3	珪質頁岩	G1-表採	
			104	104	☆ 2.72 × 1.75 × 0.55	☆ 2.1	"	TP1-Ib上	
			105	105	☆ 3.38 × 1.80 × 0.55	☆ 2.5	"	G1-Ib上	
			106	106	☆ 2.27 × 1.78 × 1.62	☆ 1.4	"	TP1-Ib中	
			石槍  (小形) 石槍	一類	10	107	107	Point 4.4 × 1.68 × 0.72	4.3
108	108	鏃 2.96 × 1.19 × 0.62				2.0	珪質頁岩	G1-IIa中	
109	109	鏃 3.74 × 1.3 × 0.42				1.2	"	G1-IIa中	
110	110	Point 3.6 × 1.65 × 0.82				3.6	"	G1-Ib下	
111	111	Point 2.79 × 1.4 × 0.72				2.4	"	G4-Ib下	
112	112	Point 3.2 × 1.92 × 0.81				3.9	めのう	G1-IIa中	
113	113	3.0 × 1.48 × 0.45				1.9	"	TP1-IIa上	
二類	11	114		114		2.95 × 1.56 × 0.62	2.5	"	G1-IIa中
		115		115		3.6 × 1.95 × 0.95	5.9	"	G1-IIa中
		116		116		2.70 × 2.7 × 0.55	2.1	珪質頁岩	G1-IIa上
		117		117		3.2 × 1.56 × 1.55	3.8	"	TP1-IIa上
		118		118		3.18 × 1.8 × 0.50	1.8	"	TP1-Ib中
		119		119		2.77 × 1.75 × 0.6	3.3	"	G4-Ib下

〔表5〕— 166

種別	類別	P. L. No	整理No	計測値 (長径×最大幅×厚) cm	重量(g)	岩質	出上区・層位		
小形 石槍			120	120	3.94 × 1.73 × 0.69	3.5	珪質頁岩	TP1-IIa上	
			121	121	3.0 × 1.71 × 0.75	4.1	"	G1-Ia上	
			122	122	2.79 × 1.04 × 0.54	1.3	めのう	G1-Ib上	
			123	123	3.35 × 1.6 × 0.65	3.2	"	G2-IIa中	
	二 類	12		124	124	4.78 × 1.36 × 0.95	4.8	珪質頁岩	G1-IIa下
				125	125	3.8 × 1.31 × 0.62	2.9	"	TP1-IIa中
				126	126	2.40 × 0.66 × 0.36	0.6	"	G1-IIa中
				127	127	3.12 × 0.85 × 0.6	1.4	めのう	G2-IIa中
				128	128	3.9 × 0.98 × 0.71	2.5	"	TP1-IIa中
				129	129	3.52 × 1.05 × 0.6	2.1	珪質頁岩	TP1-IIa上
				130	130	3.04 × 0.72 × 0.52	0.9	"	TP1-IIa上
				131	131	2.76 × 0.75 × 0.43	0.9	"	G1-IIa上
				132	132	2.81 × 0.8 × 0.57	1.2	"	TP1-Ib上
四 類						133	133	4.4 × 1.32 × 0.75	3.5
134	134	drill ? 3.7 × 1.1 × 0.6	2.7			"	G1-IIa中		
無納 石藏	一 類			135	135	☆ 2.74 × 1.67 × 0.35	☆ 1.2	"	G1-IIa中
小形 石槍	五 類 (未完)			Placc point ?	136	136	4.85 × 1.75 × 1.0	7.2	"
	六 類	137	137		3.24 × 1.42 × 0.6	1.8	"	TP1-IIa下	
		138	138		4.05 × 1.7 × 0.65	4.5	"	G1-IIa中	
		139	139	☆ 2.12 × 1.1 × 0.3	☆ 0.6	"	G2-IIa中		
		140	140	☆ 2.35 × 1.35 × 0.67	☆ 1.9	めのう	G2-Ib中		
		141	141	☆ 2.75 × 1.42 × 0.85	☆ 3.2	"	TP-IIa中		
		142	142	3.6 × 2.28 × 0.90	5.8	"	TP1-IIa中		
		143	143	1.92 × 1.58 × 0.46	1.0	珪質頁岩	G1-IIa上		
	144	144	☆ 2.8 × 1.46 × 0.86	☆ 3.2	めのう	G4-Ib中			
	145	145	2.95 × 1.5 × 0.78	3.8	"	G4-Ib下			
不定形 欠損品	146	146	2.08 × 1.32 × 0.42	1.1	"	G4-Ib下			
147	147	1.9 × 0.97 × 0.32	☆ 0.6	"	G1-IIa上				

〔表5〕-67

種別	類別	P. L. No	整理No		計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・部位
小形 石楯	七 類	13	148	148	3.49 × 1.66 × 0.55	2.7	珪質頁岩	G1-1b上
			149	149	☆ 2.8 × 1.12 × 0.6	☆ 1.9	"	G1-表採
			150	150	☆ 2.7 × 1.82 × 0.47	☆ 1.0	"	G1-IIa上
			151	151	☆ 2.40 × 1.2 × 0.45	☆ 1.0	"	TP1-IIa上
			152	152	☆ 2.25 × 1.0 × 0.6	☆ 1.0	"	G1-IIa下
			153	153	☆ 2.7 × 2.01 × 0.7	☆ 2.7	"	TP1-IIa上
			154	154	☆ 2.81 × 0.9 × 0.3	☆ 0.6	"	TP1-IIa中
			155	155	☆ 2.48 × 0.92 × 0.50	☆ 1.0	"	G4-1b中
			156	156	☆ 2.7 × 0.86 × 0.5	☆ 1.1	めのう	TP1-1b上
			157	157	☆ 2.48 × 0.8 × 0.5	☆ 0.7	珪質頁岩	G1-IIa下
			158	158	☆ 2.23 × 0.67 × 0.45	☆ 0.5	"	G2-IIa下
石籠	一 類	14	159	1	☆ 4.75 × 1.95 × 0.70	☆ 4.9	波紋岩(錦石)	G1-1b上
			160	2	☆ 4.0 × 2.65 × 1.1	☆ 5.4	"	G4-1b下
			161	3	☆ 2.65 × 2.15 × 0.66	☆ 3.7	"	TP1-IIa中
			162	4	☆ 2.4 × 1.5 × 0.57	☆ 1.3	珪質頁岩	G1-IIa上
			163	5	☆ 2.3 × 1.16 × 0.4	☆ 0.9	"	G4-1b下
			164	6	☆ 3.5 × 1.35 × 0.72	☆ 3.5	"	G1-1b下
			165	7	☆ 3.9 × 1.93 × 0.64	☆ 4.9	ホルンフェルス	G1-IIa中
			166	8	☆ 3.98 × 1.70 × 0.7	☆ 3.6	珪質頁岩	G4-1b下
			167	9	3.12 × 1.26 × 0.4	1.5	へき玉	G4-1b下
	二 類	15	168	10	4.38 × 0.8 × 0.7	2.3	珪質頁岩	G1-IIa中
			169	11	5.68 × 0.62 × 0.48	1.8	"	G2-IIa中
			170	12	☆ 2.95 × 0.75 × 0.62	☆ 1.3	"	G2-IIa中
			171	13	4.27 × 0.62 × 0.49	1.1	"	TP1-IIa上
			172	14	Point ? 3.38 × 0.65 × 0.39	0.9	めのう	G1-IIa中
			173	15	☆ 2.28 × 0.68 × 0.48	☆ 0.7	珪質頁岩	G1-IIa中
			174	16	4.9 × 0.91 × 0.58	2.6	"	TP1-IIa中
			175	17	Point ? 4.32 × 0.7 × 0.45	1.4	"	G1-1b中

[表5] - 68

種別	類別	P. L. No	整理No	計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位	
石 錐	三 類		176	18	Point ? 4.95 × 1.0 × 0.71	3.4	珪質頁岩	G1-IIa中
			177	19	3.68 × 0.75 × 0.52	1.6	"	G4-Ib下
			178	20	4.95 × 0.70 × 0.48	1.7	"	TP1-Ib中
			179	21	4.26 × 0.84 × 0.79	2.96	"	G1-IIa中
			180	22	3.99 × 0.82 × 0.62	2.15	めのう	G1-IIa中
			181	23	5.93 × 1.0 × 0.85	5.5	珪質頁岩	G1-IIa中
	四 類	16	182	24	4.6 × 0.93 × 0.6	2.4	"	G1-IIa下
			183	25	3.85 × 0.88 × 0.8	1.9	"	G1-IIa中
			184	26	4.55 × 1.25 × 0.92	5.3	"	G1-IIa下
			185	27	☆ 4.10 × 1.16 × 0.82	☆ 2.9	めのう	G1-IIa中
			186	28	3.47 × 1.0 × 0.85	2.5	"	G1-IIa下
			187	29	☆ 3.92 × 0.98 × 0.96	☆ 4.1	珪質頁岩	G1-IIa中
			188	30	5.6 × 1.08 × 0.78	5.9	"	G1-IIa中
			189	31	3.65 × 1.5 × 0.65	2.4	"	G4-Ib下
			190	32	3.1 × 0.9 × 0.49	1.4	めのう	G1-IIa中
			191	33	3.4 × 1.15 × 0.50	1.8	"	G1-Ib上
	192	34	☆ 2.62 × 0.96 × 0.75	☆ 1.9	"	TP1-Ib中		
	五 類	17	193	35	3.50 × 0.65 × 0.42	1.1	"	G1-IIa下
			194	36	3.1 × 0.32 × 0.39	0.6	"	G1-IIa中
			195	37	3.9 × 0.32 × 0.35	0.6	"	G1-Ib上
			196	38	2.68 × 0.90 × 0.62	1.4	"	G1-IIa上
			197	39	2.1 × 0.42 × 0.6	0.2	"	TP1-Ia上
			198	40	2.95 × 0.49 × 0.36	0.5	"	TP1-IIa下
199			41	3.12 × 0.42 × 0.32	0.4	"	G1-IIa下	
六 類		200	42	4.75 × 3.10 × 0.45	5.5	珪質頁岩	G1-IIa中	
		201	43	3.9 × 1.56 × 0.71	3.2	"	G1-IIa上	
		202	44	5.2 × 1.7 × 0.62	5.9	"	TP1-IIa中	
		203	45	5.49 × 2.79 × 1.1	10.8	"	G1-Ib上	

〔表5〕—69

種別	類別	P. L No	整理No		計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位
石楨	一類	18	204	46	4.90 × 3.24 × 1.12	13.6	珪質頁岩	G1-IIa中
			205	1	4.7 × 1.75 × 0.7	4.46	ホルンフェルス	G1-IIa中
			206	2	5.52 × 1.55 × 0.85	7.92	珪質頁岩	G2-IIa下
			207	3	Pich 6.58 × 1.8 × 0.65	7.7	"	TP1-IIa下
			208	4	7.95 × 2.55 × 1.10	7.3	流紋岩(錦石)	G1-Ib上
			209	5	4.55 × 1.93 × 0.92	8.1	めのう	TP1-IIa上
			210	6	6.15 × 2.42 × 1.67	19.2	珪質頁岩	G2-IIa中
	二類	19	211	7	5.0 × 2.75 × 1.80	13.1	"	G1-IIa下
			212	8	4.85 × 2.6 × 1.75	13.2	"	G1-IIa中
			213	9	4.75 × 2.3 × 1.25	10.7	"	TP1-IIa中
			214	10	5.48 × 2.88 × 1.15	15.7	"	G4-Ib下
			215	11	3.9 × 2.49 × 1.16	9.3	めのう	G1-IIa中
			216	12	4.1 × 2.22 × 0.92	7.9	珪質頁岩	TP1-IIa上
	四類	20	217	13	4.51 × 2.15 × 0.85	7.1	"	G2-IIa下
			218	14	3.45 × 3.12 × 0.72	7.0	"	G1-IIa中
			219	15	4.36 × 1.5 × 0.77	4.5	"	G1-IIa下
			220	16	4.64 × 1.95 × 0.51	4.4	ホルンフェルス	G1-Ib上
			221	17	4.0 × 2.2 × 0.8	5.65	珪質頁岩	TP1-IIa上
			222	18	5.42 × 2.91 × 1.12	15.9	"	TP1-IIa上
			223	19	4.52 × 1.8 × 0.8	4.97	めのう	G1-IIa中
	五類 (不定形・欠損品)	21	224	20	☆ 4.5 × 2.05 × 0.78	☆ 5.65	珪質頁岩	G1-IIa中
			225	21	☆ 2.1 × 2.26 × 1.1	☆ 2.5	"	G1-IIa中
			226	22	☆ 2.75 × 1.35 × 0.81	☆ 2.9	"	G1-IIa下
			227	23	☆ 34 × 0.95 × 0.7	☆ 3.2	"	G1-IIa中
			228	24	☆ 5.1 × 3.21 × 1.55	☆ 21.0	"	G1-IIa中
			229	25	☆ 3.75 × 1.1 × 0.6	☆ 2.0	めのう	G1-IIa上
			230	26	☆ 2.15 × 20 × 0.58	☆ 2.6	珪質頁岩	G2-IIa上
231			27	☆ 1.48 × 2.30 × 0.42	☆ 1.2	"	G2-IIa上	

〔表5〕-610

種別	類別	P. L. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位			
有柄 削器	六 類	22	232	28	5.25 × 0.95 × 0.68	3.9	珪質頁岩	G1-IIa中		
			233	29	2.92 × 0.95 × 1.05	2.5	めのう	G1-IIa下		
			234	30	5.22 × 1.69 × 0.75	4.7	珪質頁岩	G1-IIa下		
			235	31	0.65 × 0.71 × 0.6	2.6	"	TP1-IIa中		
			236	32	3.75 × 1.1 × 0.7	2.8	"	TP1-IIa中		
	一 類	23	237	1	裏面 bulb 5.3 × 5.8 × 1.08	26.6	"	G1-IIa中		
			238	2	3.98 × 5.3 × 0.87	12.6	"	G1-IIa中		
			239	3	4.4 × 5.65 × 1.06	21.1	"	G1-IIa中		
			240	4	4.64 × 4.62 × 1.33	14.8	めのう	G2-IIa下		
			241	5	4.0 × 4.4 × 0.9	13.2	"	G1-IIa下		
			242	6	4.0 × 6.67 × 1.12	19.4	珪質頁岩	G1-IIa下		
		24	243	7	4.03 × 5.84 × 0.85	11.3	"	G2-IIa下		
			244	8	3.82 × 6.32 × 0.92	18.23	"	G1-IIa下		
			245	9	4.72 × 4.27 × 1.20	19.10	"	G1-IIa下		
			246	10	pitch 5.62 × 5.45 × 1.15	24.0	"	G1-IIa中		
			247	11	2.9 × 2.7 × 0.6	4.15	"	TP1-Ib上		
			二 類	25	248	12	4.4 × 7.2 × 0.86	23.1	蛋白石	G1-IIa中
					249	13	2.87 × 5.12 × 0.8	16.45	珪質頁岩	G1-IIa中
	250	14			5.8 × 4.7 × 1.48	28.08	"	G1-IIa中		
	251	15			3.1 × 6.82 × 0.86	17.5	"	G1-IIa上		
	252	16			4.06 × 5.44 × 1.1	22.0	"	G1-IIa中		
	253	17			2.86 × 3.91 × 0.98	9.7	黒曜石	TP1-IIa上		
	26	254		18	5.3 × 3.7 × 0.83	16.1	珪質頁岩	G1-IIa上		
255		19		7.0 × 4.33 × 1.27	37.6	"	TP1-IIa上			
256		20		6.7 × 3.52 × 1.08	20.0	"	TP1-IIa中			
257		21	6.35 × 1.82 × 0.8	10.1	"	G1-IIa中				
258		22	6.41 × 3.0 × 1.35	27.8	"	G1-IIa中				
259		23	6.86 × 3.15 × 1.15	22.9	"	G1-IIa下				

種別	類別	P. L No	整理No	計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位	
無柄 削器	一類 (不定形)	27	260	24	7.46 × 2.97 × 1.47	29.5	珪質頁岩	G1-IIa中
			261	25	5.28 × 9.13 × 1.44	69.1	蛋白石	G1-IIa下
			262	26	7.15 × 4.3 × 1.83	34.4	珪質頁岩	G1-IIa下
			263	27	8.58 × 6.16 × 1.76	96.6	"	G1-IIa中
			264	28	7.24 × 4.16 × 1.82	18.12	"	TP1-Ib上
		265	29	9.40 × 6.08 × 1.50	95.2	"	TP1-IIa中	
		266	30	4.07 × 7.48 × 0.93	30.6	"	TP1-IIa中	
		267	31	3.28 × 4.91 × 2.0	21.3	"	G4-IbF	
		268	32	5.02 × 8.28 × 1.55	77.35	"	G1-IIa下	
		269	33	4.90 × 4.67 × 1.20	31.8	"	G4-Ib中	
		270	34	4.23 × 8.2 × 1.06	44.35	"	G2-IIaF	
		271	35	4.96 × 5.98 × 1.0	32.3	"	G2-IIaD	
		272	36	6.05 × 7.02 × 2.25	98.2	"	G4-Ib上	
		273	37	3.12 × 5.17 × 0.87	11.4	"	G1-IIa中	
		274	38	2.75 × 4.76 × 0.88	12.4	"	TP1-IIa中	
	275	39	7.16 × 3.58 × 1.16	23.6	"	G1-IIa中		
	276	40	5.7 × 3.55 × 1.3	20.4	流紋岩(錦石)	TP1-Ib中		
	277	41	6.0 × 6.97 × 1.35	44.5	珪質頁岩	G4-Ib中		
	二類 Flake Scraper	30	278	42	4.5 × 2.17 × 0.6	9.5	ホルンフェルス	G4-Ib中
			279	43	3.76 × 2.0 × 0.8	6.5	黒曜石	G1-IIa中
280			44	6.1 × 3.0 × 0.8	14.4	珪質頁岩	G2-IIa下	
281			45	5.4 × 3.2 × 0.6	14.1	ホルンフェルス	G1-IIa中	
三類 楕円形 半月形 不定形	31	282	1	4.0 × 2.6 × 0.75	5.3	めのう	TP1-Ib下	
		283	2	4.15 × 3.4 × 0.78	6.3	ホルンフェルス	TP1-IIa中	
掻器 一類 (楔形)	32	284	3	3.79 × 2.10 × 0.55	3.4	珪質頁岩	G1-IIa下	
		285	4	4.66 × 2.56 × 0.6	6.0	"	G2-IIaD	
		286	5	4.1 × 2.2 × 0.68	5.1	"	G2-IIa下	
		287	6	4.36 × 2.46 × 0.76	6.1	"	G1-Ib中	

〔表5〕—6.12

種別	類別	P. L. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位	
極器	二類	33	288	7	3.8 × 2.2 × 0.92	6.6	めのう	G2-1bF
			289	8	☆ 4.0 × 2.08 × 1.11	☆ 7.0	珪質頁岩	G1-IIaF
			290	9	3.96 × 2.32 × 1.05	9.3	"	G2-IIaF
			291	10	2.9 × 0.35 × 0.56	1.9	めのう	TP1-1b中
			292	11	3.94 × 1.75 × 0.95	5.8	"	G1-IIa中
			293	12	2.64 × 1.34 × 0.45	1.4	珪質頁岩	G1-IIa中
			294	13	4.18 × 2.18 × 0.96	7.2	ホルンフェルス	G4-1b上
	三類	34	295	14	4.77 × 3.17 × 0.86	13.7	"	TP1-1b中
			296	15	5.25 × 2.93 × 0.86	19.96	"	TP1-IIa中
	297		16	4.8 × 3.92 × 2.18	27.2	珪質頁岩	TP1-IIa上	
	298		17	6.5 × 2.22 × 1.1	20.4	流紋岩	G1-IIa中	
	299		18	4.45 × 2.28 × 1.1	10.4	珪質頁岩	G1-IIa中	
	300		19	5.08 × 2.14 × 1.1	12.3	"	G4-1b中	
	四類	35	301	20	6.0 × 2.92 × 1.6	23.9	"	TP1-IIa中
			302	21	5.90 × 2.62 × 1.68	24.3	"	G1-IIaF
	六類	a	303	22	5.3 × 2.8 × 1.61	22.4	めのう	G1-IIaF
			304	23	☆ 2.97 × 2.8 × 1.3	☆ 12.6	"	G1-IIa中
			305	24	4.85 × 3.25 × 1.82	28.4	"	G1-IIaF
		b	306	25	4.32 × 2.62 × 1.68	18.5	珪質頁岩	G4-1b中
			307	26	4.18 × 2.72 × 0.92	11.5	"	TP1-IIa上
			308	27	3.7 × 2.74 × 1.15	12.4	"	G4-1b中
c		309	28	4.68 × 4.1 × 1.45	31.6	"	G4-1b中	
		310	29	7.45 × 4.7 × 2.2	64.9	"	G2-1b中	
		311	30	2.55 × 1.75 × 0.7	3.3	めのう	G1-IIaF	
e	312	31	2.45 × 0.72 × 0.4	0.7	"	G1-IIa中		
	313	32	2.65 × 1.48 × 0.65	1.9	"	G1-IIaF		
	314	33	4.52 × 2.75 × 1.85	19.2	珪質頁岩	TP1-IIa中		
	315	34	3.49 × 3.1 × 1.61	15.6	"	TP1-IIa中		

[表5] - 613

種別	類別	P. L. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位
			316 35	6.58 × 3.16 × 1.85	31.2	珪質頁岩	TP1-IIa中
石斧	一類	38	317 1	☆ 5.2 × 4.0 × 1.2	☆ 20	ホルンフェルス	G2-IIa下
			318 2	6.7 × 2.2 × 1.1	30	"	G1-IIa中
			319 3	10.2 × 7.0 × 2.1	120	"	TP1-IIa中
			320 4	7.5 × 6.5 × 2.5	240	"	TP1-IIa中
			321 5	☆ 3.7 × 4.3 × 2.0	☆ 60	"	G4-Ib中
			322 6	6.0 × 3.8 × 1.2	40	"	G1-IIa下
			石斧状石器	二類	39	323 1	11.3 × 5.1 × 2.5
324 2	14.2 × 6.5 × 1.9	270				ホルンフェルス	G2-IIa中
325 3	12.5 × 5.6 × 1.8	190				"	TP1-Ib上
326 4	11.9 × 5.0 × 2.2	180				玄武岩	G2-IIa中
327 5	5.35 × 5.4 × 1.8	70				ホルンフェルス	G1-IIa中
328 6	Pich 付着 10.0 × 4.4 × 1.6	110				安山岩	G4-Ib上
挟入石器		40				329 1	3.96 × 2.22 × 0.68
			330 2	6.2 × 3.63 × 1.15	20.1	"	G1-IIb上
石刀		40	331 1	☆ 9.1 × 3.4 × 1.1	☆ 45	ホルンフェルス	G1-IIa下
			332 2	☆ 8.3 × 3.0 × 1.3	☆ 30	"	G1-IIa中
			333 3	☆ 16.0 × 3.4 × 0.8	☆ 60	"	G1-IIa中
		41	334 4	☆ 3.9 × 3.08 × 0.5	☆ 10	"	G2-IIa中
			335 5	☆ 12.8 × 3.8 × 1.2	☆ 52	"	G2-IIa下
石棒		42	336 1	☆ 7.6 × 3.28 × 1.6	☆ 70	"	G2-IIa中
			337 2	☆ 5.08 × 2.7 × 1.56	☆ 50	"	G4-Ib上
石鏃		42	338 1	5.3 × 5.3 × 0.8	10	花こう閃緑石	G1-IIa中
			339 2	5.4 × 5.3 × 1.6	70	ホルンフェルス	G1-IIa中
銛形石器		41	340 1	6.82 × 4.88 × 1.5	29.4	珪質頁岩	TP1-IIa下
		43	341 1	9.8 × 7.9 × 4.1	430	安山岩	G4-Ib中
			342 2	10.0 × 6.8 × 5.2	480	花こう閃緑石	TP1-IIa上
			343 3	10.3 × 6.9 × 3.8	385	ホルンフェルス	G2-IIa中

(表5) - 614

種別	類別	P. I. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位	
タタキ石		44	344	4	10.3×8.0×3.1	390	花こう閃緑石	TP1-IIa中
			345	5	朱ぬり痕あり。 10.1×9.3×7.3	1,030	安山岩	G1-IIa中
			346	6	13.1×9.2×6.0	1,120	花こう閃緑石	TP1-Ib上
			347	7	8.5×8.3×7.7	790	めのう	G1-IIa下
			348	8	5.6×5.5×5.0	260	流紋岩(錦石)	G1-IIa中
			349	9	6.2×6.4×6.2	410	"	G1-IIa中
			350	10	13.5×7.4×7.2	600	安山岩	G2-IIa中
			351	11	12.8×8.6×3.8	590	ホルンフェルス	G2-IIa下
クボミ石		45	352	1	15.3×12.8×6.0	1,760	"	G2-IIa下
磨痕のある扁平石 器		46	353	1	8.6×3.7×1.3	70	"	G1-IIa下
			354	2	7.6×3.1×1.3	60	"	G4-Ib中
			355	3	7.9×7.7×1.05	30	流紋岩	G1-IIa上
			356	4	8.3×5.1×1.4	95	"	G1-IIa上
			357	5	6.9×5.8×1.5	80	ホルンフェルス	G1-Ib下
			358	6	5.6×3.1×0.9	30	玄武岩	G4-Ib中
			359	7	6.7×2.8×0.7	20	流紋岩	G1-IIa中
			360	8	6.0×2.8×0.9	20	ホルンフェルス	G1-Ib下
			361	9	6.1×2.9×0.8	20	流紋岩	G1-IIa上
			362	10	4.08×2.6×0.75	18	ホルンフェルス	G1-IIa上
			363	11	4.5×2.6×0.62	10	流紋岩	G4-Ib上
			364	12	4.3×3.2×0.7	15	ホルンフェルス	G4-Ib中
			365	13	4.3×2.9×0.55	10	"	G1-Ib上
			366	14	3.7×2.6×0.6	10	流紋岩	G4-Ib上
剥離痕のある扁平石 器		48	367	1	5.1×4.8×2.3	82	花こう閃緑石	TP1-Ib上
			368	2	6.8×5.3×1.5	77	"	TP1-Ib上
			369	3	7.1×5.2×1.6	90	"	TP1-Ib上
			370	1	9.5×6.1×1.9	146	ホルンフェルス	G2-IIa下
			371	2	8.3×4.3×1.1	73	"	G1-IIa下

〔表5〕—615

種別	類別	P. L. No.	整理No.	計測値 (長径×最大幅×器厚)cm	重量(g)	岩質	出土区・層位			
磨痕や 打欠ある 扁平石器		49	372	3	8.6×4.5×1.1	67.7	ホルンフェルス	G2-IIa上		
			373	4	10.0×4.6×1.1	73.8	頁岩	G1-Ib上		
			374	5	7.4×5.3×1.8	101.6	ホルンフェルス	G4-Ib上		
			375	6	8.6×6.5×1.5	145.	"	G4-Ib上		
		50	376	7	7.2×4.85×1.3	64.8	"	G4-Ib上		
			377	8	6.9×5.7×1.85	112.9	流紋岩	G1-IIa下		
			378	9	5.9×4.8×1.4	58.8	ホルンフェルス	G4-Ib上		
		石製装 身具類	自然石に 穿孔のあるもの	51	379	1	(1.4×0.6)長径×短径 4.3×2.9×1.4	22.	珪質頁岩	G1-IIa中
					380	2	(2.2×1.7)長径×短径 5.0×4.3×2.2	53.5	流紋岩	G1-IIa中
381	3				(1.7×0.9)長径×短径 4.4×3.6×1.8	30.05	石英	G1-IIa中		
382	4				(0×0)長径×短径 3.9×3.0×1.8	25.3	流紋岩(めのう)	G1-IIa中		
383	5				☆(×) 4.0×2.6×2.8	☆ 15.0	珪質頁岩	G2-Ib中		
384	6				(2.1×1.5)長径×短径 4.8×4.3×2.1	37.0	"	G1-IIa中		
385	7				(1.2×1.1) 3.0×2.5×2.3	15.6	流紋岩(錦石)	G1-IIa下		
386	8				(1.2×0.9) 4.2×3.5×1.6	30.2	"	G1-IIa下		
387	9				(0.9×0.6) 4.5×4.0×1.3	26.9	"	G1-IIa下		
388	10				(0.6×0.6) 4.4×3.3×1.9	18.5	"	G1-IIa下		
389	11				(1.2×0.9) 4.0×3.0×1.6	20.06	玄武岩	G2-Ib下		
ペンダント 状石製品	390				12	☆ 3.37×2.42×0.62(s)	☆ 3.30	ホルンフェルス	TP1-Ib中	
勾玉 完形品 勾玉 未完成品 勾玉 完形品 小玉 未完成品 および原 石に未完 の穿孔あ るもの	52		391	1	2.2×1.2×0.5	2.1	ひすい	G1-IIa中		
			392	2	1.7×1.25×0.7	1.8	"	G1-IIa下		
			393	3	2.2×1.3×0.6	1.9	"	G1-IIa中		
			394	4	0.58×0.68×0.4	0.1	碧玉	G1-IIa上		
			395	5	1.42×0.8×0.5	0.4	"	G1-IIa中		
			396	6	0.68×0.6×0.4	0.2	"	G1-IIa中		
			397	7	0.4×0.93×0.44	0.65	"	G1-Ib上		
			398	8	1.8×1.18×0.62	1.5	"	TP1-Ib上		
		399	9	1.7×0.9×0.7	0.6	"	G1-IIa中			

[表5] -No.16

種別	類別	P. L. No	整理No	計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出上区・順位		
緑色原石			400	10	1.4 × 1.1 × 0.7	1.4	碧玉	TP1-IIa中	
			401	11	2.1 × 1.9 × 1.1	4.9	"	TP1-IIa中	
			402	12	2.9 × 1.65 × 1.2	7.3	"	G1-IIa中	
			403	13	1.6 × 1.46 × 0.9	2.7	"	G1-IIa下	
		長方形 石製品	53	404	1	4.6 × 2.28 × 0.42	6.9	ホルンフェルス	G1-IIa中
				405	1	1.85 × 1.74 × 1.02	3.7	"	G1-IIa中
	406			2	1.85 × 1.88 × 1.5	1.7	"	G1-IIa中	
	407			3	1.9 × 1.1 × 0.7	1.2	"	G1-IIa中	
	408			4	0.85 × 0.7 × 0.5	0.4	"	G1-IIa中	
	409			5	1.25 × 1.14 × 0.85	1.3	"	TP1-IIa中	
	410			6	2.12 × 1.63 × 0.96	3.4	"	TP1-IIa中	
	411			7	1.65 × 1.92 × 0.80	1.6	"	G1-IIa下	
	412			8	2.74 × 2.22 × 0.9	7.48	"	G1-IIa中	
	413			9	1.9 × 1.15 × 0.75	0.5	"	G1-IIa中	
	414			10	3.6 × 2.1 × 0.8	7.9	"	G2-IIa中	
	415			11	1.22 × 0.96 × 0.8	1.1	"	G1-IIa中	
	416			12	2.0 × 1.34 × 0.1	3.3	"	TP1-IIa中	
	417			13	1.5 × 1.2 × 1.0	2.3	"	TP1-IIa中	
	418			14	2.43 × 1.3 × 0.93	2.5	"	TP1-IIa中	
	419			15	1.4 × 0.7 × 0.7	1.1	"	G1-IIa上	
	420			16	0.85 × 0.55 × 0.35	0.2	"	G1-Ib下	
	421			17	3.97 × 1.54 × 0.75	7.3	"	G1-Ib下	
	422			18	1.1 × 0.9 × 0.47	0.6	"	G1-IIa中	
423	19			0.8 × 0.73 × 0.6	0.65	"	TP1-IIa下		
424	20			2.35 × 1.80 × 1.1	4.2	"	G2-IIa中		
425	21	1.2 × 1.97 × 0.8	0.8	"	G1-IIa下				
426	22	2.05 × 1.55 × 1.02	3.5	"	G1-IIa下				
427	23	1.85 × 1.08 × 0.7	1.2	"	G2-IIa中				

〔表5〕-617

種別	類別	P. I. No	整理No	計測値 (長径×最大幅×器厚) cm	重量(g)	岩質	出土区・層位	
緑石原石		54	428	24	2.1 × 1.87 × 1.07	5.25	ホルンフェルス	G2-IIa中
			429	25	3.0 × 1.8 × 1.0	5.1	"	G4-Ib中
			430	26	2.7 × 1.4 × 1.5	6.3	"	G2-IIa中
			431	27	0.95 × 0.91 × 0.6	0.6	"	G2-IIa中
			432	28	1.2 × 1.28 × 0.87	1.4	"	G1-IIa中
			433	29	1.2 × 0.8 × 0.64	0.5	"	G1-IIa中
			434	30	0.4 × 1.3 × 1.1	1.4	"	G4-Ib中
			435	31	1.64 × 1.0 × 1.0	2.2	"	G1-IIa中
			436	32	2.17 × 1.67 × 1.05	4.4	"	G4-Ib中
			437	33	4.33 × 2.8 × 1.14	19.3	"	G2-IIa中
			438	34	3.3 × 2.37 × 1.47	14.7	"	G1-IIa下
			439	35	4.87 × 2.02 × 1.5	18.4	"	G1-IIa下
			440	36	3.7 × 3.02 × 1.92	28.3	"	G4-Ib中
			441	37	4.32 × 3.8 × 2.7	46.2	"	G2-IIa中
接合資料		55	442	1		流紋岩(錫石)	G2-IIa下	

(3) 骨類、貝類、堅果類（写6-2、写15-2、写2-2、写18-2、写37-2、実測図一図版6-2、15-2、2-2、18-2、37-2、第11図、写真5）

本遺跡の発掘において、興味深い事例を発掘することができた。それは標記した骨類、貝類、堅果類の出土と、その出土状況である。

骨類のうち、土器内に内蔵されて出土したものは、全部で5個体である。

そのうちわけは、第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器4個体、うち1個体は、精製鉢形土器で他は粗製鉢形土器である。

また、他の1個体は、第10群土器（大洞A式）の壺形土器で、この壺形土器の中には、多量の骨片、貝類等が内蔵されていた。

また、発掘面のうち、第11図に示すとおり、G1-II a中、G1-II a下、T・P1-II a中、すなわち、グリットG1および、T・P1のII a層上層・中層・下層において、第8群土器（大洞C2式）と共伴して、骨類、堅果類が出土した。

以下、これらについて、資料No1～資料No11に整理して述べることにする。

なお、これらの骨類、堅果類については、日本大学金子浩昌氏に鑑定を依頼した。また、貝類については、青森県教育センター橋本守美氏に鑑定を依頼した。ここに記して謝意を表する次第である。

それでは、骨片・貝類・堅果類が内蔵されて出土した土器（5個体）については、資料No1～5とし、また、発掘面上より出土した骨類、堅果類は、資料No6～11として、つぎに述べることにし縄文時代晩期の大洞C2式、同A式土器を使用して生活した縄文人の食生活について、その一端をのぞいてみようと思う。

〔資料No1〕（写6-1、写6-2、実測図6-2、b写1-1、第11図）

写6-1、に述べてあるように、資料No1が内蔵されていたものは、第8群土器（大洞C2式）の粗製鉢形土器である。

このものの器形、施文、色調、焼成等については、写6-1、（実測図6-2）に示すとおりである。

このものは、第11図に示すとおり、T・P1-II a中より直立して出土したものである。この鉢形土器の中には、写6-2、実測図6-2のとおり下記に示す骨類が内蔵されていた。

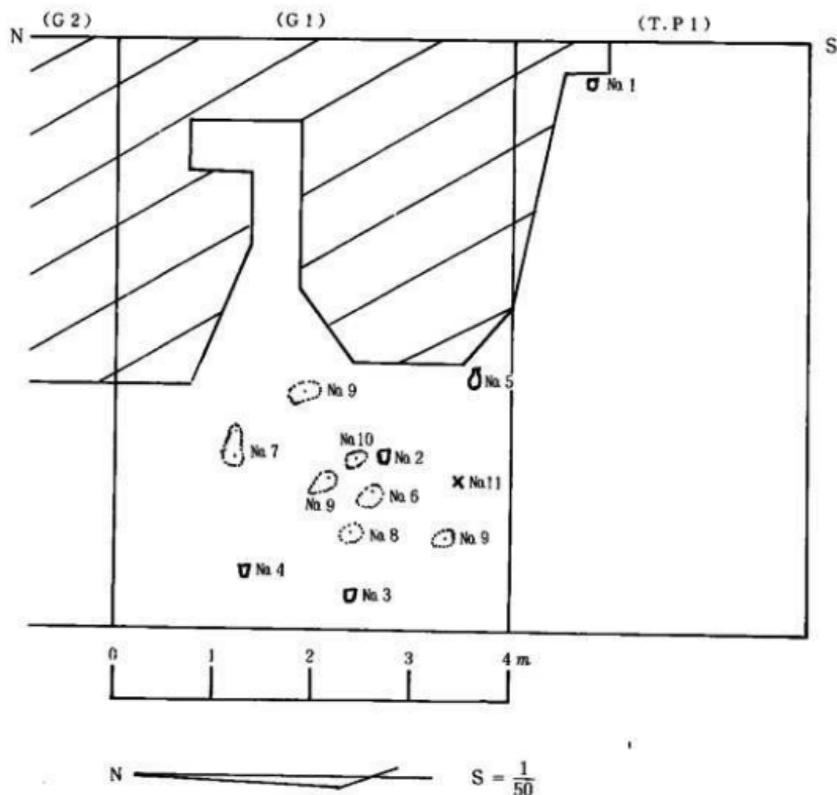
---

（資料No1の骨類）

- ・ 獣骨片 4 （種別不明）
  - ・ 鹿の脛骨1
-

〔第11図〕 骨類・貝類・堅果類出土位置図

- |   |  |  |
|---|--|--|
| } | 資料No.1 → 写6 → 実測図6-2 → b写1-1 = 眼高 55.7 → 遺物高 147.5   |  |
|   | 資料No.2 → 写15 → 実測図15-2 → b写1-2 = 眼高 54.5 → 遺物高 152.3 |  |
|   | 資料No.3 → 写2 → 実測図2-2 → b写2-1 = 眼高 55.7 → 遺物高 155.0   |  |
|   | 資料No.4 → 写18 → 実測図18-2 → b写2-2 = 眼高 54.5 → 遺物高 165.0 |  |
|   | 資料No.5 → 写37 → 実測図37-2 → b写3-1・2、4-3・4、5-5・6、        |  |
|   | 6-7 = 眼高 54.5 → 遺物高 143.0                            |  |
|   | 資料No.11 →  |  |
|   | b写8-3 = 眼高 54.5 → 遺物高 166.0                          |  |
|   | (☆No.6 ~ No.10は省略する。)                                |  |



〔資料No 2〕 (写15-1、写15-2、実測図15-2、第11図)

このものも、写15-1に述べたように、第8群土器(大洞C2式)の粗製鉢形土器である。

器形、施文等については、写15-1の記述にゆずって、このものも直立して、G1-Ⅱa中より出土した。(G1-Ⅱa中-グリットG1、Ⅱa層、中位の省略である。以下も同様)

この粗製鉢形土器内からは、写15-2、実測図15-2に示すように資料No 2とした骨類が内蔵されていた。なお、この骨類は、細片のため写真は写していない。

---

(資料No 2の骨類)

- ・鹿の臼歯片 1 (M1位に比定される)
- ・管状の獣骨片 1 (種別不明)

---

〔資料No 3〕 (写2-1、写2-2、実測図2-2、第11図)

この資料No 3の骨片を内蔵した土器も、第8群土器(大洞C2式)の精製鉢形土器である。この鉢形土器そのものについては、写2-1の記述にゆずり、このものには、写2-2、実測図2-2に示す状態で骨類と思われるものが内蔵され、G1-Ⅱa下より直立して出土した。その内蔵されていた骨類は、細片のため写真は写していない。

---

(資料No 3)

- ・不明の骨片、(但し、骨であるかどうかは確かでない。)

---

〔資料No 4の骨類〕 (写18-1、写18-2、実測図18-2、第11図)

この土器も第8群土器(大洞C2式)の粗製鉢形土器である。この土器は、G1-Ⅱa中より直立して出土した。この土器そのものについては、写18-1に記述があるので省略する。

この鉢形土器には、写18-2、実測図18-2に示す状態で、骨類と思われる遺物が内蔵されていた。この骨類は、細片のため、写真は写していない。

---

(資料No 4の骨類)

- ・殆んど海綿体のみになった骨片 1
- ・肋骨片と思われる細長い骨 1
- ・鯨骨ではないかと思われる小片(3×2.5cm)

〔資料No 5の骨類・貝類〕 (写37-1、写37-2、実測図37-1、b写2-1・2、b写3-3・4、b写4-5・6、b写5-7、第11図)

この資料No 5を内蔵した土器は、第10群土器(大洞A式)の壺形粗製土器である。

この土器そのものについては、写37-1に記してあるので省略する。

このものは、G1-II a上より、横位に倒れて出土したもので、この土器の周辺下より骨粉が若干出土し、骨類が内蔵されることが、予想されたものである。

この壺形土器に内蔵されていた資料No 5とした骨類、貝類は、つぎのとおりである。

(資料No 5の骨類、貝類)

$\frac{1}{7}$  { カモ類、左鳥口骨、ほぼ完存する標本1。  
・大形陸獣の小骨片1。

$\frac{2}{7}$  { 魚骨→7点。  
・マグロ類と思われる鯔骨1(かなり大形になるものである)。  
・鳥骨→大形鳥類上腕骨の小片3。  
・獣骨→海獣骨片かと思われるもの3。  
・鹿骨→足根骨1。

・魚骨→カサゴ科の一種→副楔骨1。

$\frac{3}{7}$  { 其他種不明内蔵骨片3。

$\frac{4}{7}$  { 鯔棘片

・獣骨→鹿、猪類の肋骨片1。

・焼けた骨のかたまり1点、殆んど灰状となっているものである。

$\frac{4}{7}$  { 上と同様の焼けた獣骨片と思われる海綿体部分の小片が、8~9点。

・魚骨→30点。これらの大部分は、鯔棘片で、中に鯔蓋骨などの破片と思われるものがある。  
鯔蓋骨は、ウグイ類ではないかと思われる。

・大形魚の鯔骨1。(No 4のものと同じのものと思われる。) マグロ類と思われる。

・他に、魚骨片13点。

$\frac{5}{7}$  { 内蔵骨として、ウグイ類左鯔蓋骨片1、その他1。

・背椎骨1、カレイ類尾椎骨1点(椎体横径4.0、上下にのびる神経、血管、棘の先端が欠損する。

$\frac{6}{7}$  { 木炭小片3。

・焼けた獣骨小片7。

・魚骨→大部分鯔棘の破片、1点完存するものあり。

・貝類→ヤマトシジミと思われる。その破片6点。

- 7/7
- ・フネガイ科のなかま、(全体が完全でないので種名までは同定できない。較表に何条の肋があるか不明)
  - ・カヤの実のように見られるもの1点。

〔資料No.6の骨類〕 (第11図、b写5-1、b写6-1)

この資料No.6とした骨類は、土器内に内蔵されていたものではなく、G1-II a中の発掘面上から検出したもので、このものは、第8群土器(大洞C2式)の粗製鉢形土器破片が倒立したかたちでII a 層中に刺さっている下に所在したものである。多分大洞C2式土器に伴うものであろう。

(資料No.6の骨類)

- ・ニホンシカ、右M2歯冠部は完存。ごく僅かな咬耗をみるのみである。咬耗示数6。2才半位の年令、おそらく雄、歯冠長21.5mm、歯冠幅12.0mm。
- ・他に、破砕した臼歯の破片が10点程。

〔資料No.7の骨類〕 (第11図)

この資料No.7としたものは、第11図に示すようにG1-II a下の発掘面より、第8群土器(大洞C2式)の土器片と伴出したものである。多分この期のものと考えてよいと思う。

この資料No.7としたものは、つぎの骨類である。なお、この骨類は、細片のため写真は写していない。

(資料No.7の骨類)

- ・焼けた獣骨小片6、(部位を確認できる程保存状況は良くない。)
- ・獣骨片 15、(いずれも、シカ、イノシシといった大型獣のものであろう。)

〔資料No.8の骨類〕 (第11図、b写6-2)

この資料No.8としたものは、G1-II a中の下位より出土したもので、このものも第8群土器(大洞C2式)とともに伴出したものである。この期のものと考えてよいように観察した。

(資料No.8の骨類)

- ・すべて、シカの臼歯の断片化したものである。おそらく3~4位の歯があったものと思われるが復原することはできない。歯質からみて歯の咬耗は、さ程の進行をまだみない状況下にあった個体のものであろう。

〔資料No 9の骨類〕（第11図、b写7-1）

この資料No 9としたものも、G 1-Ⅱ a下の発掘面より出土したもので、このものも第8群土器（大洞C 2式）の破片が堆積した中から出土したものである。このものも大洞C 2式期のものと考えられる。これらの資料No 9とした骨類は、鑑定の結果つぎの骨類である。

---

（資料No 9の骨類）

- ・25個の破片であるが、すべて歯牙の破損したもの、シカ、および、イノシシの歯がみられるが著しく破損しているために、歯の位置などは確認できない。いずれも、おそらく後臼歯のものであり、未萌出歯を含むと思われる。

---

〔資料No 10の骨類〕（第11図、b写7-2）

この資料No 10とした骨類は、b写8-2に示すように、右列、中列、左列に分けて示してある。このうち、右列は、G 1-Ⅱ a下、中列は、G 1-Ⅱ a中、左列は、T・P 1-Ⅱ a中、G 1-Ⅱ a中より出土したものである。（なお出土位置の詳細については、第11図による。）

これらのものは、いずれも第8群土器（大洞C 2式）の鉢形、壺形土器の破片と共伴していたが、これらのもも大洞C 2式期のものと思われる。

それでは、この資料No 10とした骨類の鑑定結果について、右列、中列、左列に分けて述べることにする。

---

（資料No 10の骨類）

- ・右列→焼けた獣骨片。シカあるいはイノシシのものであろう。
- ・中列→シカの臼歯小片4、焼けた獣骨片3、魚の鱗棘片1。
- ・左列→焼けた獣骨片9、シカの臼歯片1、イノシシの臼歯片3。

---

〔資料No 11の堅果類〕（第11図、b写8-1）

このものは、G 1-Ⅱ a上の発掘面より出土したものである。このものも第8群土器（大洞C 2式）の土器片と共伴して出土した。

---

（資料No 11の堅果類）

- ・葉の実の炭化物 1

---

〔参考資料〕 植物炭化物（b写8-2）

以上、資料No 1～11にわたって、本遺跡の発掘調査において出土した骨類、貝類、および堅果類について、その鑑定結果を、鑑定者である金子浩昌氏、(資料No 5- $\frac{7}{7}$ を除く。)の原文に忠実に記録させていただいた。

また、資料No 5- $\frac{7}{7}$ については、これも原文に忠実に、橋本守美氏の原稿をのせたつもりである。資料が、きわめて小片、かつ破損しているため、その御労苦に深謝の意を表する次第である。

また、他に、写13-1・2、写24-1・2、写25-1・2にも若干の骨片があったが、記述は省略した。

## ☆ 考察の目次 (再掲)

〔Ⅰ〕 遺跡と立地

〔Ⅱ〕 出土遺物

- (1) 出土土器
  - ① 土器型式について
  - ② 出土土器の施文について
  - ③ 第9群土器について
  - ④ 第12群土器について (製塩土器)
  - ⑤ その他の土器 (皿形、注口土器) について
  
- (2) 出土石器・石製品
  - ① 石器・石製品の岩質について
  - ② 石器の出土数とその問題点について
  - ③ 石鏃について
  - ④ 小形石槍について
  - ⑤ 石錘について
  - ⑥ 石槍について
  - ⑦ 削器、搔器について
  - ⑧ 石斧、石斧状石器、袂入石器、銛形石器、石錘等について
  - ⑨ タタキ石、クボミ石、磨痕、打ち欠きのある石器
  - ⑩ 石棒、長方形石製品、石製装身具、緑色原石について
  - ⑪ 参考資料
  
- (3) 骨類・貝類・堅果類

## 〔V〕 考 察

### 〔I〕 遺跡と立地

〔II〕-1、地形の項で述べたとおり、遺跡は、新期砂丘上に位置する。この新期砂丘は開田によって切り割りのできたのであるが、この切り割りの南北断面に遺跡が所在した。

そして遺跡の層序については、基本層序（第3図）に示すとおりであるが、この層序のうち、II a層が主包含層をなしている。

このII a層をはさむ、I b、III層の粒度組成を分析すると、I b層とIII層は、いずれも新期砂丘砂であり、両層には時代の間隙はなく、本遺跡は、ごく短期間に埋積された可能性が強いとの結論が得られるのである。

このことは、I b層中位より下位に包含される土器片が、主として大洞C<sub>2</sub>式土器であり、また、主包含層であるII a層出土の主流となる土器群は、第8群とした大洞C<sub>2</sub>式土器で同じ型式の土器が、I b層、II a層に包含されることから、地学的分析とは、基本的には、矛盾しないのである。

しかし、出土土器の項で述べたように、地学的には短期間に営まれた遺跡ではあるが、その時間の範囲内において、II a層の堆積期間には、人間生活の移り変わりがあったのであろう。

それを土器型式または、土器文化で示すと、既述のように、大洞B・C式～大洞C<sub>1</sub>式土器文化であり、また、大洞C<sub>2</sub>式～大洞A式土器文化であったのである。

さらに、詳細に検討すると、大洞C<sub>1</sub>式土器の施文には、その一型式前の大洞B・C式土器の「羊歯状文」—しじょうもん—が濃密に残存しており、主として大洞B・C式の後葉から、大洞C<sub>1</sub>式の前葉に至る時間を強く暗示しており、土器文化の変遷を見せている。

また、同様に、第8群とした大洞C<sub>2</sub>式土器が、大洞C<sub>2</sub>-A式→（仮称）とした第9群土器に比重をうつし、大洞A式土器に移行するという。土器文化の変遷移行が、時間の流れとともにあったのである。

すなわち、新期砂丘砂の堆積という短期間の自然現象の中に、人間生活の変化、または、土器文化の変遷を見せる遺物を包蔵する遺跡が「五月女遺跡」なのである。

発掘面積約77.4㎡は、遺跡のほんの一部であって、多くの遺物が未だ保安林の地下に眠っているのであろう、大切に保存したい遺跡の一つである。

さらに付加すると、本遺跡の発掘において、レベル原点とした地点は、標高8.43mであった。そして、II a層上面の高地点は、標高約6.3m、低地点は、標高約6.2mである。すなわち、縄文時代晩期の後葉大洞A式土器（本遺跡出土土器の下限型式）を使用した時期において、標高約6mの地点に人間生活が可能であったのである。そのことは、海水面の高さ、十三湖の変遷等々興味深い問題を提起してくれる遺跡でもある。

## 〔Ⅱ〕 出土遺物

### (1) 出土土器について

市浦村瓦月女遺跡の発掘において、出土した土器類は、既に述べたとおり、リング用ダンボール箱にて約28箱の量である。

これらの出土土器を検討した結果、(表3)に示すように、完形・復原土器約69個体、および、これも(表4)に示したとおり、破片土器726片をサンプリングし掲示した。

以下、この出土した土器類について若干の考察を加えてみたい。

#### (a) 土器型式について、(表2、表4)

出土した土器類を、土器型式によって型式区分すると、次のようになる。

---

○第1群土器	円筒上層式土器d <sub>2</sub> 類
○第2群土器	十腰内I式土器
○第3群土器	◇ II式土器
○第5群土器	◇ V式土器
○第6群土器	大洞B・C式土器
○第7群土器	大洞C <sub>1</sub> 式土器
○第8群土器	◇ C <sub>2</sub> 式土器
○第9群土器	大洞C <sub>2</sub> -A式土器(仮称)
○第10群土器	◇ A式土器
○第11群土器	粗製土器群で、第1～第10群土器の各型式に共伴する。
○第12群土器	
○第13群土器	
○第14群土器	
○第15群土器	

---

以上の15群に分類したのであるが、型式別に分類すると、縄文時代中期のもの1型式、同じく縄文時代後期のもの3型式、および、縄文時代晩期のもの4型式となる。(但し大洞C<sub>2</sub>-A式→仮称を入ると5型式)

なお、円筒上層式土器の型式分類については、江坂(石神遺跡、1970)、村越(円筒土器文化、1974)の二者があるが、本報告書では、後者による。

また、当地方において、縄文時代後期における土器型式の分類、編年については、川村(大曲I号遺跡、1968)、および、渡辺(十腰内遺跡、1968)があるが、本報告では後者によった。

### 〔中期・後期の土器〕

◎縄文時代後期の土器型式において、本遺跡では、3型式、すなわち、十腰内Ⅰ式、十腰内Ⅱ式、および、同Ⅴ式に比定される、第2群、第3群、第5群土器の出土を見たのであるが、第4群土器として想定した、十腰内Ⅲ式・同Ⅳ式土器の出土はない。そのため、欠番としたのである。

この十腰内Ⅲ式に比定される土器群は、当津軽平野北半部においては、きわめて出土例が少ないものである。現在までのところ、当地方では、金木町「神明町遺跡」(杉山他、1980)に、その報告がある程度である。また、十腰内Ⅳ式に比定される土器群も、当地方には、出土例が少なく、そのままとった報告例は、標式遺跡である「十腰内遺跡」のみである。

本遺跡出土の第2群、第3群土器とした、十腰内Ⅰ式・同Ⅱ式土器は、標式遺跡出土のものと比較しても、また、津軽平野北半部より出土するものと比較しても地域性は認められないノーマルなものである。

また、第5群土器とした十腰内Ⅴ式比定の出土土器は、その瘤の形状、施文において、地域性が認められる。

すなわち、瘤そのものが、扁平でボタン状を呈するもの、瘤上に十字の刻目文が付される点々々である。

中期・後期の土器群については、その出土数も少ないので(表4参照、つぎに晩期の土器について述べることにする。

### 〔晩期の土器〕

◎本遺跡より出土した縄文時代晩期の土器群は、既述したように、第6群～第15群土器に一応分類したものである。

このうち、第11群～第15群土器としたものは、粗製土器のうち、一群にまとまるものを分類した。

第6群～第10群土器については、既述したように、型式分類し、個々の土器については、(表3)(表4)、および写1～55、P.L1～120、に記述してあるので参照されたい。

本遺跡出土の晩期に属する土器群を山内清男(考古学1—3、1930)の型式分類によると、大洞B、C・C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式の4型式となるのであるが、筆者は、分類にあたって、(表2→編年型式表)に示したように、仮称として、「大洞C<sub>2</sub>—A式」を設定し、第9群土器とした土器群をこれにあててみたのである。

残念ながら遺跡の性格上(砂地遺跡)、それを層位的に把握することができなかったのが仮称としておきたいと思う。このことについては、後で再び述べたい。

すなわち、これを加えて、第6～第10群土器に分類した。

○(表4)に示すように、本遺跡より出土した土器数(ほぼ個体数、注、第11~15群土器も所属型式に含めてある。→表示した数は、サンプル数であるが、出土数に対する比率は、不十分ながら考慮した。)より見ると、第8群土器(大洞C<sub>2</sub>式)が最も多いのである。

すなわち、出土土器数から考えて、本遺跡を造営した中心時期は、大洞C<sub>2</sub>式土器を使用した時期と考えてよいであろう。

また、土器の施文を検討すると、第6群土器と第7群土器は、時間的にきわめて近接した、または、連続的要素を認めることが可能である。

それは、第6群土器(大洞B・C式)の主文様である「羊歯状文」の要素が、第7群土器(大洞C<sub>1</sub>式)の施文に濃密に残存しており、その比率が大きく、典型的な大洞C<sub>1</sub>式の主文様を明確に施文される土器が少ないことから理解されるのである。(例えば、X字文、K字文、大腿背文等々)

さらに、第8群土器(大洞C<sub>2</sub>式)、第9群土器(大洞C<sub>2</sub>-A式→仮称)、および、第10群土器(大洞A式)の施文を検討すると、これも、きわめて連続性を認めることができる。

それに加えて、(表4)に示す出土数を検討しても理解されるように、第6~第7群、第8~第10群の二つの時期に本遺跡の性格を考えてみる可能性があるかも知れないのである。そのことは、(表4)に示す、器形別土器数(土器組成)のあり方からも推察が可能であるが、層位的きめ手がないので推論の域をでないのが残念である。

#### (b) 出土土器の施文について(表6)

つぎに本遺跡より出土した第6~第15群土器について、施文されている縄文の燃りや糸の方向等について若干の検討を加えてみたい。

この(表6)としたものは、「出土土器施文別分類表」として示してあるが、主眼とするところは、縄文の燃りの方向や、その施文のあり方を知りたい目的で整理してみた。

その基礎資料として、写1~55・P.L1~120において示したように、晩期の土器約708個体について、縄文のあり方を表示してある。

(注)この(表6)には、施文のうち、主文様があっても縄文、燃糸文のあるものは、すべてその数に入れ、縄文、燃糸文のないもので主文様のみのもは、主文様の欄に入れたものである。

〔表6〕

五月女遺跡出土 施文別七器分類表 (縄文、燃糸文、無文、主文様別分類表)									
型 式 別	復原・完形土器			破 片 等			燃 糸 文	無 文	主文様のあるもの (地文なし)
	数	L・R	R・L	数	L・R	R・L			
円筒上層 式土器d2類	/	/	/	1	0	0	0	1	0
十 腰 内 I 式	/	/	/	4	0	1	0	0	3
十 腰 内 II 式	/	/	/	6	2	2	0	2	0
十 腰 内 V 式	/	/	/	7	5	2	0	0	0
大洞 B・C 式	①	0	0	76	37	4	3	6	① 26
大洞 C 1 式	②	②	0	62	14	4	15	4	25
大洞 C 2 式	⑤	②	② 〔1〕	399	176	12	④ 35	② 154	② 22
大洞 C 2-A 式 (仮称)	⑧	⑥	0	143	77	2	15	① 19	① 30
大洞 A 式	⑦	④	0	28	11	1	3	② 5	① 8
計	☆69	③	② (1)	☆ (708) 726	(315) 322	(23) 28	④ 71	(188) ③ 191	(111) ⑤ 114
完形、復原土器 % (施文%)	/	☆ 49.2 %	☆ 2 %	/	/	/	5.7 %	36.2 %	5.7 %
破片土器 % (施文%)	/	/	/	/	☆ 44.3 %	☆ 3.8 %	9.7 %	26.3 %	15.7 %

☆ 註 { (L・Rは、O段多条のものを含む)  
(○印は、完形、復原土器の数である。)  
(L・r, or R・ℓ→燃糸文は一括して掲げた。)

{ ( ) 内数字は、晩期のみの合計である。 }

(表6)を検討してみると、つぎのことが理解されるように思う。

- ① 中期・後期については、出土数が少ないので不明。(省略)
- ② 晩期の各型式においては、 $L \cdot R \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ または、 $L \cdot R \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ が最も多く、 $R \cdot L \left\{ \begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix} \right.$ または、 $R \cdot L \left\{ \begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix} \right.$ がごく少ない。
- ③ 燃糸文の施文されるものは、大洞C<sub>2</sub>式で最も多く、他の型式では少ない。(註、これは、大洞C<sub>2</sub>式の鉢形土器で、単軸燃糸文が縦位に施文されるものが多く出土したためである。)
- ④ 各型式ごとの縄文、燃糸文、その他の比率は、つぎの表Xのように計算される。

縄文時代晩期大洞B・C～A式土器における施文比率表					
(群別・型式別施文比率表) (表X)					
群別 (土器型式)	$L \cdot R \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ $L \cdot R \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$	$R \cdot L \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ $R \cdot L \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$	$L \cdot \left\{ \begin{smallmatrix} r \\ r \end{smallmatrix} \right.$ $R \cdot \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ (燃糸文)	無文	主文様
第6群土器 (大洞B・C式)	48.05%	5.19%	3.89%	7.79%	35.06%
第7群土器 (大洞C <sub>1</sub> 式)	25.0%	6.25%	23.43%	6.25%	39.06%
第8群土器 (大洞C <sub>2</sub> 式)	43.77%	2.59%	8.66%	39.11%	5.33%
第9群土器 (大洞C <sub>2</sub> -A式)仮称	54.96%	1.32%	9.93%	13.24%	20.52%
第10群土器 (大洞A式)	42.85%	2.85%	8.57%	20.0%	25.71%
大洞B・C式～ 大洞A式の総合%	44.78%	3.21%	9.65%	27.41%	14.92%

この(表X)に示したように、縄文時代晩期の各型式における土器群の縄文原体とその施文のあり方は、各型式の平均値で、二段単節縄文( $L \cdot R \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ )、または、0段多糸の二段単節縄文( $L \cdot R \left\{ \begin{smallmatrix} \ell \\ \ell \end{smallmatrix} \right.$ )が、約44.78%を占めており、施文される縄文の糸の方向は、左下りに斜行するものが殆んどである。

これに対して、(表X)に示すように、二段単節縄文 ( $R \cdot L \left[ \frac{r}{r} \right]$ )、または、同 ( $R \cdot L \left[ \frac{r}{r} \right]$ ) は、各型式の平均値で、約3.21%である。しかもその縄文の糸の方向は、右下りの斜行縄文である。

すなわち、縄文原体の回転方向は、横方向に一定していることを示しているのである。

このうち、 $L \cdot R \left[ \frac{\theta}{\theta} \right]$ 、と  $L \cdot R \left[ \frac{\theta}{\theta} \right]$  では、前者が多く後者は、僅少である。

また、他の遺跡における比較資料に乏しいので比較検討はむずかしいのであるが、( $L \cdot R \left[ \frac{\theta}{\theta} \right]$ ) 縄文が多用される傾向は、当地方においては、縄文時代晩期の一般的傾向と認められ、この傾向は、大洞A'式(砂沢式)土器群まで継承されるものと認められる。(新谷,1975)

#### (e) 第9群土器について

既に述べてきたように、第9群土器→「大洞C<sub>2</sub>-A式」と仮称した一群の土器は、大洞C<sub>2</sub>式土器を使用した期間の後半から大洞A式土器を使用するに至る移行期の土器群として位置づけを与えたいと考察したものである。

しかしながら、既述したように、層位的把握が不可能であったため、仮称としておきたい。

第9群土器の器形、施文等、型式学的特徴については、写3・7~9、写47-1・2、写48、53の完形・復原土器、および、P・L26~28、P・L34~49、P・L51、61、62、P・L80、88~90、P・L99に記述があるので省略する。

また、第8群(大洞C<sub>2</sub>式)、第9群(大洞C<sub>2</sub>-A式→仮称)、第10群(大洞A式)土器の上文様(精製土器)の相違については、図版→実測図3、4、7、8、9、14、29、49、50、53および、第12図→第9群、第10群土器上文様図を比較されれば理解されるであろう。

すなわち、第9群土器は、第10群(大洞A式)土器の主文様である「人組み工字文」が、完成する前の過渡期の施文を主文様とする一群の土器をあてたのである。(註・古崎昌一氏の提唱した日の浜式土器に類似する)

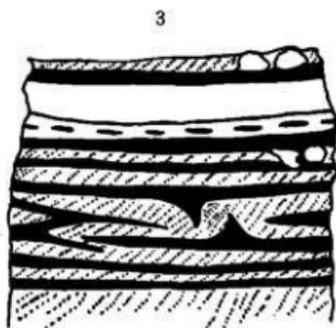
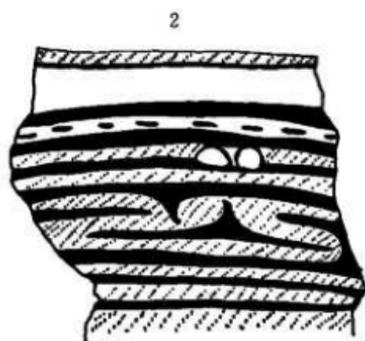
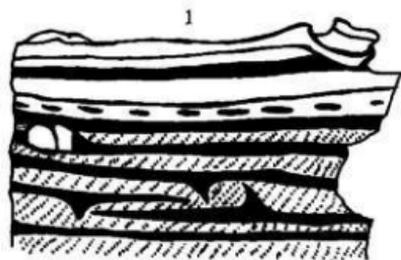
この第9群土器(大洞C<sub>2</sub>-A式→仮称)としたものは、(表4)に示すとおり、第8群土器の出土数や器形別出土数と比較するとき、その出土数や土器組成が、きわめて単純であることが読みとれる。

このことから、この第9群土器を使用した人々は、第8群土器を含めた土器組成をもっていたことが推察される。また、第9群土器では、その出土数は、精製土器において、深鉢形84、壺形21、粗製土器において、深鉢形21、となっており、深鉢形土器が、出土数の66.03%を占めていることに注目したい。

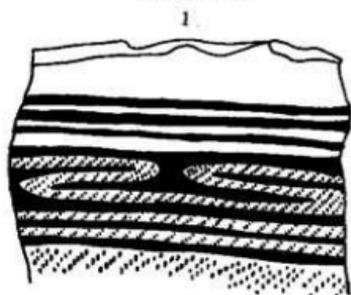
すなわち、深鉢形土器、壺形土器、鉢形土器と順に第8群土器より移行したものである。

〔第12図〕 第9群土器と第10群土器の単位文様

(第9群土器)



(第10群土器)



なお、第9群土器については、未完であるので今後とも研究を深めたいと考える。

(d) 第12群土器について(製塩土器) → (P. L.108~P. L.111)

第12群土器として分類した粗製深鉢形土器は、当西北五地方において最初に確認できたところの「製塩土器」である。

そして、この製塩土器は、型式学的分類として、二型式に分けられる。それ故、この二型式の製塩土器について、それぞれ、つぎの型式名を与えたいと考える。

---

〔五月女落Ⅰ式製塩土器〕	→	{	P. L.108→666~670, 672, 674, 675	}
			P. L.109→676~679	
			P. L.110→686, 688	
〔五月女落Ⅱ式製塩土器〕	→	{	P. L.110→680~684	}

---

以上の二型式である。また、P. L. 108 → 671, 673, については、出土数も少なく断定を控えたいので、一応製塩土器の疑えあるものとして、類例を待ちたいと思う。(今津遺跡1974)

これらの、Ⅰ式、Ⅱ式、および、製塩土器の疑えあるものとした個々の土器については、P. L.108~P. L.111に記述してあるので省略する。

この二型式の製塩土器のうち、「五月女落Ⅰ式製塩土器」としたものは、大洞C<sub>2</sub>式土器に共伴するものと認められ、また、「同Ⅱ式製塩土器」としたものは、大洞C<sub>2</sub>-A式 → (仮称)とした第9群土器に伴うように認められる。

少なくとも、Ⅰ式製塩土器としたものが先行することは、確實のように観察された。

(e) その他の土器(皿形、注口土器)について、

第11群、第13~第15群土器については、それぞれP. L.101以下に述べてあるので省略するが、この項では、皿形土器と注口土器について若干述べておきたい。

・出土した皿形土器は、約95個体でその数は異常に多い出土数である。また、出土した皿形土器は、写43~写46、実測図43~46に示したように、その多くは、径6.2~15.1cm程度の小形のものが多くのである。このことは、皿形土器の容器としての機能と、食料との相関関係を考えてみる必要があろう。

他の遺跡、特に小生が担当した観音林遺跡(新谷、1976)出土の皿形土器では、径15cm以上のものが多くのである。

すなわち、遺跡の立地条件と、そこで生産される食料の相違、それにかかわる容器の形態および機能の問題も考える必要があろう。

このことについては、今後の研究に行つほかはないのであるが、ここでは、以上の問題を指摘しながら、小形の皿形土器が、しかも器形が同一器形のもので大量に出土したことを述べておきたい。

● つぎに、注口土器についてふれることにしたいと思う。

注口土器は、復原したもの1個体、現存程度のもので1個体（大洞B・C、C<sub>2</sub>式、他に、注口部・胴部破片が、約41個体分、計43個体分出土した。出土数としては、他の遺跡に比してきわめて多い数といえることができる。

このことから、既述したように、当遺跡の立地条件、注口土器の容器としての機能、出土した石器類をも含めて、本遺跡を造営した縄文時代晩期の人々の生活レベルをも推察することが可能である。すなわち、当時としては、相当豊かな生活レベルを有していた遺跡と考えたいのである。

なお、土器の分類等について破片のため、不備な点も多くあると思われるが、ご叱正下されたい。

## (2) 出土石器・石製品について

さきに、石器・石製品の項で述べたように、本遺跡において出土した石器・石製品は、きわめて多量の出土であった。

以下、これらの石器・石製品について、要点と思われる事項に限定して若干の考察を加えてみたいと思う。

### (a) 石器・石製品の岩質について

石器・石製品の岩質は、既述したように、14種に分類される。

このうち最も多いのは、珪質頁岩で石器・石製品の55.9%を占め、当地方の遺跡とほぼ同じ傾向にある。

● 本遺跡から出土する石器類の岩質上の特徴を述べると、まず、第一はめのうが多いことである（石器の18.3%）。このことは亀ヶ岡遺跡のそれが約11%であるのと比較してもわかる。出土した石鏃、石槍、スクレーパーはほとんど珪質頁岩とめのうからなるが、その割合は前者が70～80%、後者が20～30%でめのうの占める割合が高い。なかでも石鏃、播磨の割合が高い（約30%）。

● 第二にホルンフェルスが多いのと（原石を含めた全体の18.8%）、その用途がきわめて広いことである。このことは、(表7)に示されているとおり、石器から石製品までのほとんどに使用されていることからもうなづけよう。

石器類に使用されているホルンフェルスの特質については、(Ⅲ)の4においてふれてお

たが、この岩石はこれまでは凝灰質細粒砂岩、細粒凝灰岩等いろいろな岩質に分類されてきた。今回、これをはじめてホルンフェルスとして分類したのであるが、他の遺跡出土のこれら緑色堅硬質岩についてもホルンフェルスとして分類すれば、本遺跡の傾向と類似してくることが考えられる。そうなれば、ホルンフェルスが石器類に果たしている役割が今後一層明確になるものと思われる。

● 第三は、石器類の約3%を占めるにしき石の成因が流紋岩そのものであるという点である。これらのにしき石は縞にしき石とも呼ばれ、七里長浜の北部に位置する輪元海岸などにごく一般的に分布している。

石器・石製品の原岩については、ホルンフェルスとひすいおよび黒曜石の一部を除けば、津軽半島から西海岸地域に分布する堆積岩、火成岩として存在している。

なお、ひすいについては不明であるが、ホルンフェルスは県内の東岳に産出が知られている。(川村記)

表7 石器器種別岩質分類表

No.	石 質	件 数	岩 質 別													
			珪 質 頁 岩	黒 曜 石	め の う	変 白 石	ホ ル シ ョ ー ル ス	流 紋 岩 ( 緑 石 )	流 紋 岩	頁 岩	安 山 岩	火 武 岩	花 崗 せ ん 緑 岩	碧 玉	ひ す い	石 英
1	石 盤	107	79 73.8	2 1.9	24 22.4		1 0.9	1 0.9								
2	小 形 石 槌	51	34 66.7		17 33.3											
3	石 槌	32	24 75.0		5 15.6		2 6.3	1 3.1								
4	石 盤	46	27 58.7		14 30.4		1 2.2	3 6.5						1 2.2		
5	削 器	45	36 80.0	2 4.4	2 4.4	2 4.4	2 4.4	1 2.2								
6	掻 器	35	20 57.1		10 28.6		4 11.4		1 2.9							
7	石 斧	12					9 75.0				2 16.7	1 8.3				
8	挟 入 石 器	2	2 100													
9	石 刀	5					5 100									
10	石 棒	2					2 100									
11	石 盤	2					1 50					1 50				
12	括 形 石 器	1	1 100													
13	タ タ キ 石	11			1 9.1		2 18.2	2 18.2			3 27.3		3 27.3			
14	ク ボ ミ 石	1					1 100									
15	磨 痕 の ある 扁 平 石 器	14					7 50		6 42.9			1 7.1				
16	割 断 痕 の ある 石 器	3										3 100				
17	磨 痕 と 打 ち か き の ある 石 器	9					7 77.8		1 11.1	1 11.1						
18	石 製 装 身 具	26														
内 訳	・自然石にせん孔したものを	(1)	3 27.3		1 9.1			4 36.4	1 9.1		1 9.1				1 9.1	
	・ペンダント状	(1)					1 100									
	・勾 玉	(1)													1 100	
	・勾玉未完成品	(2)													2 100	
	・小玉完成品	(2)													2 100	
	・小玉未完成品及び磨石にせん孔したもの	(8)													8 100	
・長方形石製品	(1)						1 100									
19	緑 色 原 石	37					37 100									
20	接 合 資 料	1						1 100								
合 計		442 (%)	226 (51.1)	4 (0.9)	74 (16.7)	2 (0.5)	83 (18.8)	13 (2.9)	9 (2.0)	1 (0.2)	5 (1.1)	3 (0.7)	7 (1.6)	11 (2.5)	3 (0.7)	1 (0.2)

※下段の数字は岩質別%である。

(b) 石器の出土数とその問題点

この項では、本遺跡の発掘において出土した、石器の組成上の問題について二三ふれてみることにする。

① 石鏃について

石鏃は、S・P・L1～S・P・L9、および、S・P・L12～135 および表5に示したように、きわめて多数出土した。

すなわち、有柄石鏃については、1類～8類、およびX類に分類したように、多数で、しかも多様であって縄文時代の晩期にふさわしい様相を示している。

これに対して、無柄石鏃として分類したものは、わずかに1点のみである。

この対象的な出土状況は、晩期の遺跡のみならず、他の前期、中期、後期の各遺跡出土の石鏃の組成をみても類例のないものであろう。

筆者は、当地方においては、岩木川東岸地帯と西岸地帯では、無柄石鏃の出土する比率に相違があることを指摘してきた。(新谷、1977、1978)すなわち、岩木川東岸地帯では、その出土比率は小さく、西岸地帯では、大きいという指摘であるが、本遺跡程顕著なものではなかったのである。

この極端とも思われる出土状況をどのように捉えるべきなのか、興味ある問題の一つである。しかも、1点のみ出土した無柄石鏃は、S・P・L12～135に示したように、その器形が特異なもので類例を探すがむずかしいものである。

② 小形石槍について (S・P・L10～S・P・L13)

この小形石槍として分類したもののについては、木葉形のもの、柳葉形のもの、欠損しているもの等々、1～7類に分類したのであるが、このものは、石槍としての機能を付与されていたものなのか、または、石鏃の機能をも、あわせて持っていたものか其疑問が残るところである。

すなわち、無柄石鏃の出土が1点のみであるという事実から、無柄石鏃を必要としない理由のよりどころとも推察されるのである。

③ 石錐について (S・P・L14～S・P・L17)

本遺跡の発掘において注目されるべき事実は、石錐の出土数が多いことである。

この石錐は、Ⅱ a 層の上層に集中して出土した。そして、このⅡ a 層上層からは、削器 (Side-Scraper)、掻器 (end-Scraper) が、殆んど出土しなかったのである。

これらの石錐 (drill) は、使用痕のあるもの、ないもの、有柄のもの、細長い形態のもの等に分けられ、さらに、フレックを利用したものもあるが、最も多いのは、細長い形態の2類 (

S・P・L15) としたもので、その長さが他の遺跡出土のものより長い特徴をもつもので、その剥離技術が優秀であることを示している。

④ 石槍について (S・P・L18～S・P・L22)

石槍は、柳葉形、木葉形のものを中心に出土した。これらのものは、特に本遺跡の特徴をもつものではなく、最も一般的なものである。但し、S・P・L19-13に示したものは類例の少ない石槍である。このものについては、類例を待って後日に考えたいと思う。

なお、S・P・L22-28～32は、形態上は石錐と類似のものであるが、先端が扁平に剥離されているので石槍として分類した。

⑤ 削器・搔器について (S・P・L23～S・P・L31、S・P・L32～S・P・L37)

・削器は、有柄削器(横形、縦形)、および、無柄削器(剥片利用のもの)、さらに、楕円形、半月形のものに分けられる。このものうち、第3類(S・P・L31-42～45)としたものに特徴を認めるが数が少ないので考察は省略したい。

・搔器については、最も典型的な楔形形態のものが出土したが、これらのものは、縄文時代晩期のもんとしては一般的なものである。

フレックを利用したものも含め、器形、剥離法を含めて検討しても特に特徴は認めがたいものである。

むしろ問題としなければならないのは、出土層位なのである。

さきに、石錐の項で述べたように、Ⅱa層上位約20～40cmにおいては、石錐が集中的に出土し—(G1-Ⅱa上が特に多く出土した。)— 削器、搔器の出土は、2点のみの出土であったのに対して、G1(グリット1)を中心にして、Ⅱa層中位約40～70cmでは、削器、搔器の出土が急激に多く出土しはじめたのである。

このことは、かなり重要な意味をもつものと思われる。

すなわち、このⅡa層中位においては、出土土器の項で述べた、骨片を内蔵した土器や(第11図)に示したように、骨片が集中的に分布し出土しているのである。

削器または搔器が、主として持つ機能が、それぞれ、切ったり、削ったり、または、搔きとったり、削ったりする機能を持つものであるとすれば、この骨片の出土層と同一層、同レベルに集中して出土することは、無関係ではない筈である。

出土した削器、搔器の形態や剥離技術については、他の遺跡より出土したものと比較しても差違は認められないのであるが、その出土層と共伴物との関係において、以上のように考えることが可能と思われる。

⑥ 石斧、石斧状石器、抉入石器、鋸形石器、石錐等について (S・P・L38～S・P・L43)

これらの石器については、出土数も少なく、明確な記述はできないのであるが、若下の考察を加えてみる。

石斧は、2点を除いて、他はすべて折れているものである。このことは、石斧の用途と関係があるのであろう。また石斧状石器としたものは、簡単な打欠きによって刃部を作出したもので、機能的には石斧と類似しているものと思われる。

抉入石器（notch）は、2点、鋸形石器は、1点の出土であるが、フレークを利用したものである。

また、石錘として分類したものは、2点のみであって少ない。遺跡の立地条件からすれば、きわめて少ないように思われる。

⑦ タクキ石、クボミ石、磨痕のある扁平石器、剥離痕のある扁平石器、磨痕や打欠きのある扁平石器（S・P・L43～S・P・L50）

これらの石器については、特に注意を払う程出土数は多くない。むしろ、クボミ石の出土がわずか1箇のみと云う点が若干問題になりそうである。

さきに述べたように、石錘の出土も少なく、また、クボミ石の出土も、他の遺跡に比して少ない点が問題なのである。遺跡の立地条件からすれば、漁に使用する石錘が多く出土しなければならないようにも考えられる。

また、クボミ石の出土は、他の遺跡では、相当数出土するのが常である。このように出土した石器の組成のあり方に本遺跡の特徴があるように考えられる。

また、扁平石器については、三種に分類して述べたのであるが、どのように使用されたのかは目下のところ不明である。

しかし、側面に磨痕があったり、剥離されているもの、磨痕と剥離痕をもつもの等、なんらかの機能をもつことは否定できないものと思われる。

⑧ 石棒、長方形石製品、石製装身貝類、緑色原石について（S・P・L51～S・P・L54）

これらのもののうち、石棒は破片のみで、全体形は、不明である。また、長方形石製品としたものは、（S・P・L53-1）に示したように、器厚のうすいもので、中央に細長い楕円形の穿孔があるものである。このものは、類例の少ないもので用途、機能等は不明であるが装身貝類の一種とも考えられる。

・石製装身貝としたものは、自然石に穿孔のあるもの、ペンダント状のもの、および、勾玉完形品、同未完成品、完形小玉、同未完成品等が出土した。さらに、小玉の原石と考えられる緑色原石（ホルンフェルス）が多数出土した。

すなわち、本遺跡においては、以上述べたように装身貝類としたものが相当数出土している

のである。筆者が担当した観音林遺跡（新谷、1976）では、装身具類の出土は、皆無であったのと比較すれば、その出土数は、きわめて多いのである。もしも装身具の出土量が、その遺跡を営造した人々の生活水準の豊かさをあらわすものと仮定すれば、きわめて豊かな生活が、（その当時とすれば）営まれていたものと考えられる。

このことは、魚類、貝類、鳥類、獣類等の骨類の出土からも推定することが可能である。

⑨ その他の資料について（S・P・L55、写真X3）

S・P・L55に掲げたものは、石器ではないが、接合資料として掲げたものである。

また、写真X3の下段に示した磨製石斧は、(II)遺跡周辺の地学的環境の項、4、石斧、石刀、石棒等に使用されている緑色堅硬岩石名について→の項で述べた鑑定資料としたものである。このものは、青森県西津軽郡鯉ヶ沢町大字建石字大曲開拓において表採されたものである。なお、その鑑定結果については、本文を参照されたい。

(3) 骨類、貝類、堅果類について

これらの出土品については、既述してあるので、この項では、五月女遺跡を営んだ縄文人の食料の問題として若干考察してみたいと思う。

出土したものを分類してみると、①獣骨、②鯨骨、③鳥骨、④魚骨、⑤貝、⑥粟の実等に大別される。

このうち、獣骨、魚骨、鳥骨の一部は焼けており、ある程度、これらのものの調理法をも予想できるものである。

また、これらのもののうち、資料No1～5としたものは、既述したように鉢形、壺形土器内から検出されたことも述べたとおりである。このことから鉢形土器、壺形土器の用器としての機能を理解できる好例であった。そのことのみとりあげても今回の発掘成果は、大きいものであったと評価ができるであろう。

さて、この遺跡を営んだ縄文人の食料は、バラエティに富み、豊かな生活を送っていたことは、容易に想像できるところである。

すなわち、狩によって獣をとり、海では魚をとる生活が展開されていたのであろう。いわゆる山海の食料や、堅果類といったものまで採集していたようである。

この食料の豊かさが、土器製作や装身具の豊富さに反映しているものと考えるところである。

〔VI〕 おわりに

以上、市浦村「五月女遺跡」の発掘を担当して、土器、石器、付類、堅果類等々、その出土遺物の豊富さに、ただ驚くばかりであった。また、縄文時代人の生活力のたくましさにもふれて人間のすばらしさに感激させられた次第である。

この貴重な遺跡の発掘調査を担当させていただいた市浦村村長白川治二郎氏、村教育委員会の方々に深甚の謝意を表す次第である。

また、本報告書の作成にあたって、資料を鑑定していただいた、昭和鑿泉株式会社土質研究所、宮城一男、金子浩昌、橋本守美の各氏に謝意を表す次第である。

また、種々助言を賜った、加藤孝、鈴木克彦、工藤竹久氏にも謝意を表す次第である。

本報告の内容は、貴重な遺跡に比して貧弱であろうと思われる。その点は担当者の力不足であるのが主因と反省されるところである。今後とも諸賢の御叱正と御指導を賜りたいと思う。

(1983. 2 新谷、川村)

〔参考文献〕

- |      |                |                         |            |
|------|----------------|-------------------------|------------|
| 1970 | 江坂 輝弥          | 石神遺跡                    | 石神遺跡保存会    |
| 1974 | 村越 潔           | 円筒土器文化                  | 雄山閣        |
| 1968 | 田村 誠一          | 大曲1号遺跡                  | 岩木山刊行会     |
| 1968 | 今井富士男<br>磯崎 正彦 | 十腰内遺跡                   | "          |
| 1980 | 杉山 武<br>大間 勝也  | 神明町遺跡                   | 青森県教育委員会   |
| 1967 | 山内 清男          | 所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末    | 考古学1-3     |
| 1975 | 新谷 雄蔵          | 津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究    | 北奥古代文化7号   |
| 1974 | 橋 善光<br>工藤 竹久  | 今津遺跡                    | 平館村史       |
| 1976 | 新谷 雄蔵          | 観音林遺跡                   | 五所川原市教育委員会 |
| 1977 | "              | 一本松遺跡                   | 深浦町教育委員会   |
| 1978 | "              | 妻の神遺跡                   | 金木町教育委員会   |
| 1960 | 芹沢 長介          | 石器時代の日本                 | 築地書館       |
| 1981 | 飯島 義雄          | 仮称「連繫人組文」と「横位連続工字文」について | 考古風土記第6号   |
| 1974 | 村越 潔他          | 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書            | 青森県教育委員会   |

〔Ⅵ〕出土遺物……………(資料) ……目次

〔Ⅰ〕土器・土製品

(1) 完形・復原土器 (写1～写55)

(2) 破片土器 (P. L 1～P. L 120)

〔Ⅱ〕石器・石製品 (S. P. L 1～S. P. L 55)

〔Ⅲ〕竹類・貝類・堅果類 (b 写1～b 写8)

〔Ⅵ〕 出土遺物

写1

〔1〕 土器・土製品

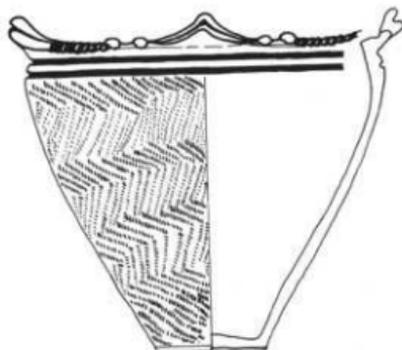
〔深鉢形土器〕

(第7群土器)



(G1-II a 中)

← (R. L + L. R)



☆ [写1-実測図1]

- この深鉢形土器は表3-Ⅱ1-1に示したようにG1-II a層中位(以下G1-II a中と略記する。以下も同様)から出土したものである。
- 口縁には、先端が前後に分かれる山型突起が4つあり、その間に2×1対の小突起が左右両側に配置されるもので、その間には刻目が付されている。
- 頸部には3条の平行沈線文がめぐり、肩部より底部までは、四段の羽状縄文が施文されるものである。
- なお、このものには、朱ぬりの痕跡を認めるもので、第7群土器(大洞C1式)の精製深鉢形土器である。
- 羽状縄文は、0段多条のR.L+L.Rで四段に施文される。この羽状縄文の施文される土器は、大洞C2式期では稀少である。

(第8群土器)



(G1-Ⅱ a中)

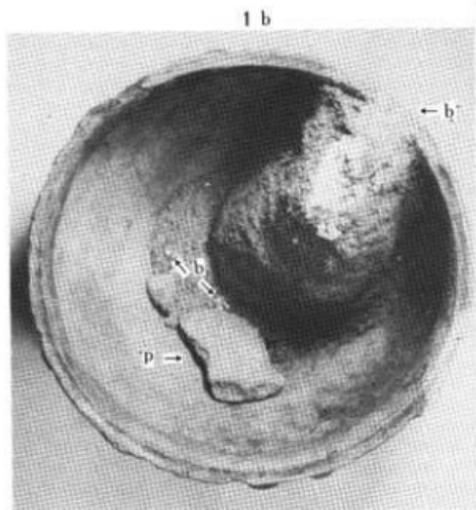
☆ [写2-1・写2-2・実測図2-2]

- [写2-1および写2-2]に掲げた土器は完形土器で、第8群土器(大洞C2式)の鉢形土器である。
- 平縁の口縁には、小突起が付けられ、頸部は無文帯をなし、肩部には、3条の沈線文がめぐり、さらに2こ1対の粘土粒が4対つけられているものである。
- 肩部より胴部にかけては、左傾する(L.R)縄文が地文として施文され、浮文的な雲形文が施文されるものである。すなわち大洞C1式期の主文様が崩れ曲線化したものであろう。(写2-2参照)

☆なお、この鉢形土器には[写2-2・実測図2-2]に示したように骨片が内臓されているものである。その内臓された骨類については既に述べたとおりである。(資料紙3)

☆資料No.3の  
骨片内蔵

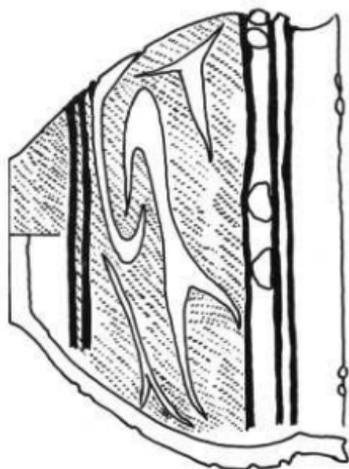
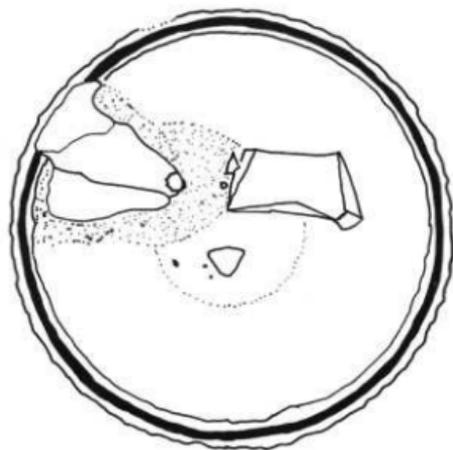
☆第8群土器



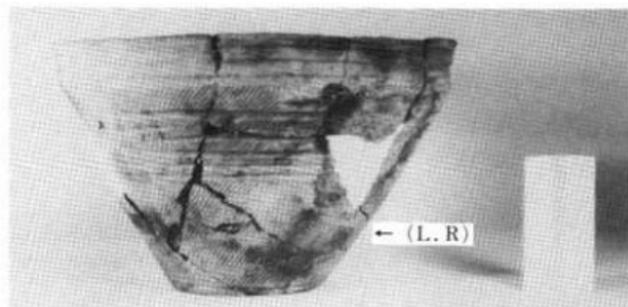
☆〔写2-2・実測図2-2〕

- このものは、骨片の内蔵状態を見せるものである。
- 大洞C2式期において食料と用器の関係を知る大切な資料であろう。

b = 骨片  
p = 土器片



☆第9群土器



(G1-II a 中)



☆〔写3・実測図3〕このものは、第9群土器（大洞C2-A式→仮称）とした鉢形土器である。

このものは、表3-Ⅱ1-3に示したようにG1-II a 中より出土したものである。

- 口縁は平縁で、上端に刻目文があり、頸部に浅い3条の沈線文をめぐらし、肩部より胴部にかけては、地文として（L.R）左傾縄文が施文され、その上に、入組み工字文が施文されるものである。
- 色調は、明赤褐色、胎土、焼成とも最良である。（復原土器）



(G1-II a 中)

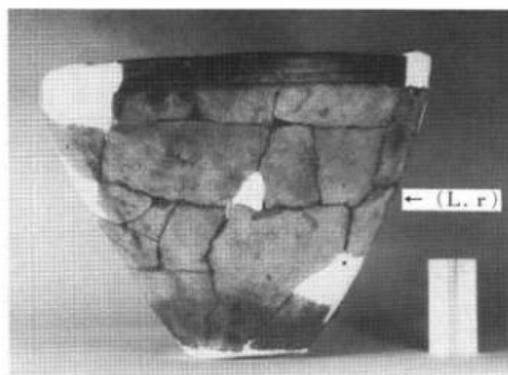
☆第8群土器

← (L.R)



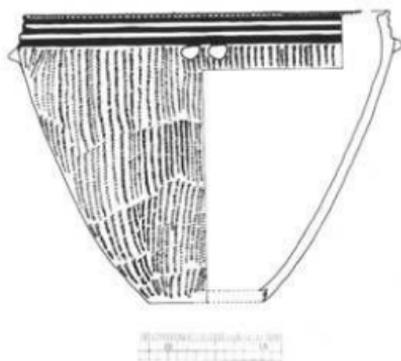
☆ [写4・実測図4] ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の典型的な鉢形土器である。(精製・復原土器)

- このものは、平縁で、口縁上端に刻目文をもち、頸部には3条の平行沈線文が施文されている。
- また、肩部には、2こ1対の粘土粒が対象的に4対付される。肩部下より胴部には、大洞C2式の典型的な雲形文が施文され、地文は(L.R)縄文が施文されている。さらに胴下半には、左下りの(L.R)縄文が施文されるものである。
- 色調は、灰黄色、胎土、焼成とも良好である。また胴下半の文様帯の下端および底部直上には、各2条の平行沈線文も施文されるものである。



☆第8群土器

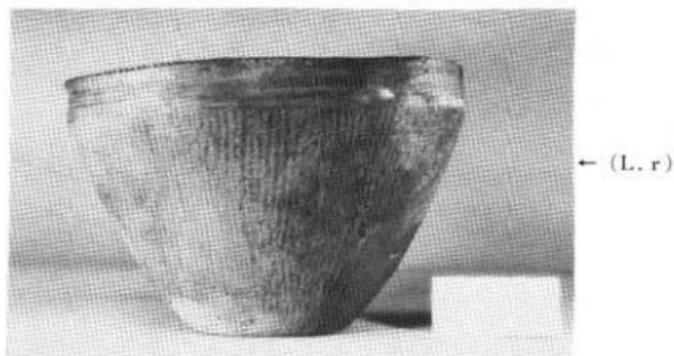
(G2-II a中)



☆〔写5・実測図5〕このものは、第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。このものは、表3-1-5に示すように、G2-II a中出土である。

- このものは、口縁上端に刻目文を付し、頸部に3条の浅い沈線文が施文され、肩部より底部へかけては、(L. r) 単軸燃糸文が縦位に施文されるもので、半精製土器である。
- 色調は、灰白色を呈し、胎土、焼成とも良く堅緻なものである。(復原土器)

☆第8群土器



(T. P 1-Ⅱ a 中)

☆ [写6-1・写6-2・実測図6-2] ここに掲げたものも第8群土器(大洞C2式)の鉢形土器である。

- このものも、口縁上端に刻目文があり、頸部には、3条の沈線文が施文され、肩部より底部へかけては、(L. r) 単軸捲糸文が縦位に施文されるもので、半精製土器である。(完形品)
- 色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好である。なお、このものと、(写5、実測図5) に示したものは、大洞C2式鉢形土器の典型的なタイプである。

☆また、この鉢形土器の内部には、(写6-2、実測図6-2) に示したように、骨片、および石片が内蔵されていた。骨片については、後述する。(資料紙1)

[骨片内蔵鉢形土器→再掲]

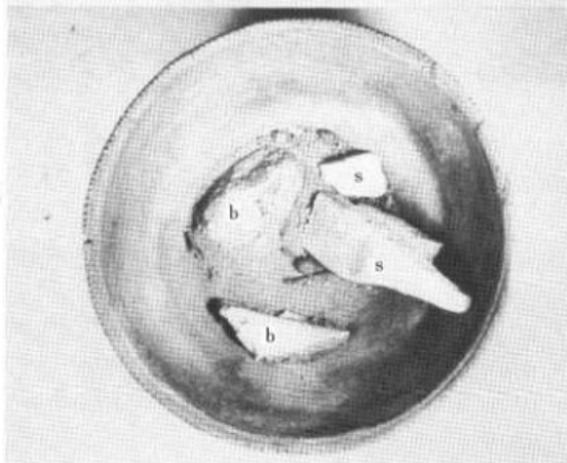
写6-2

☆資料6.1の  
骨片内蔵

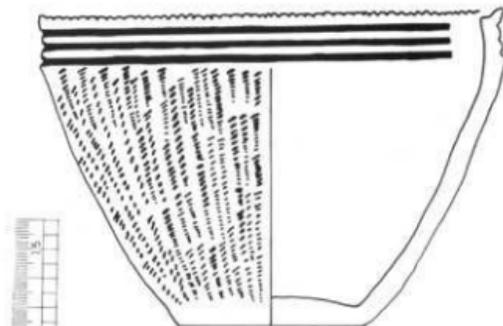
1 a



1 b



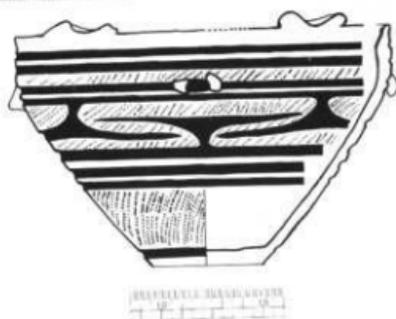
b = 骨片  
s = 石片





(G1-II a中)

☆第9群土器

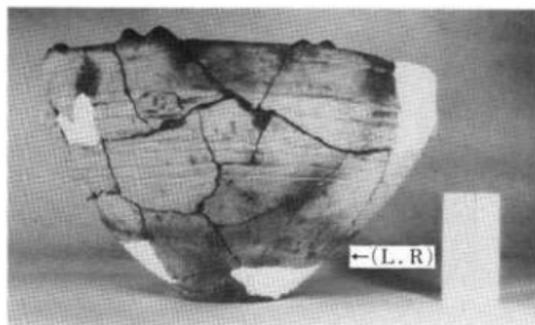


☆ [写7・実測図7]ここに掲げたものは、第9群土器(大洞C2-A式→仮称)の鉢形土器として分類したものである。

- このものは、平縁ではあるが口縁が小波状を呈し、2こ1対の小突起が4対ほぼ対応してつけられる。また、頸部には、無文帯と沈線文2条がめぐりさらに肩部にも2条の沈線があって、その第1沈線上に、2こ1対の粘土粒を対象的に4対つけるものである。
- 肩部から底部へかけては、地文として左傾する(L.R)縄文が施文され、その上には、初現的な入組み工字文が施文され、文様帯の下端(胴下部)は、2条の沈線文によって区画され、以下は、左傾する(L.R)縄文が施文されるものである。(復原土器)
- 色調は、暗赤褐色、胎土、焼成とも良好である。

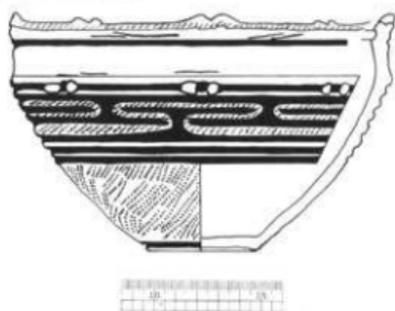
☆なお、第8群土器の鉢形土器の器形は、[写3・4・5・6]に示したものが典型的であるが、第9群土器の鉢形土器は、口径が広く、肩部が張るふくらみのある器形に変化するものである。

すなわち、第9群土器(大洞C2-A式→仮称)の鉢形土器では、[写3]の器形と[写7・写8]の器形が共存するものようである。



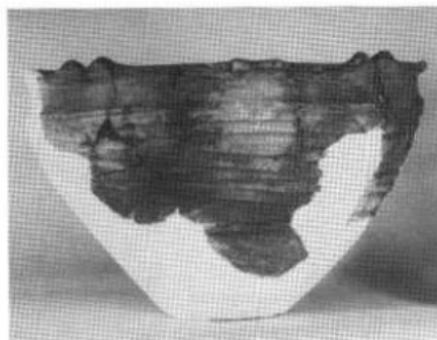
☆第10群土器

(G1-Ⅱ a 中)



☆〔写8・実測図8〕ここに掲げたものは第10群土器（大洞A式）の鉢形土器である。

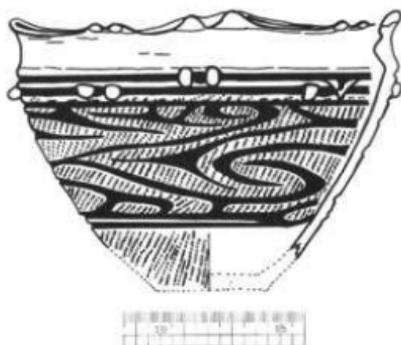
- このものも〔写7・実測図7〕と同様、平縁で口縁に2こ1対のやや大きい突起4対と、その間に、やや低い小突起（2こ1対）が対象的に4対付けされ、頸部に無文帯を有するものである。
- 肩部は、やや張り、胴部のふくらむ器形で、その胴部上半には、大洞C2式の主文様がくずれ、平行沈線文化した入組み工字文が、地文の（L.R）縄文の上に施文されるもので、施文帯の下端は、2条の沈線文で区画される。
- また、胴部下半から底部へは、左傾する（L.R）縄文が施文される。さらに大きい突起の下部には、2こ1対の粘土粒が4対付けられるものである。
- 色調は、明赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。（復原土器）



☆第8群土器

← (L.R)

(G1-Ⅱ a 中)



☆〔写9・実測図9〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。

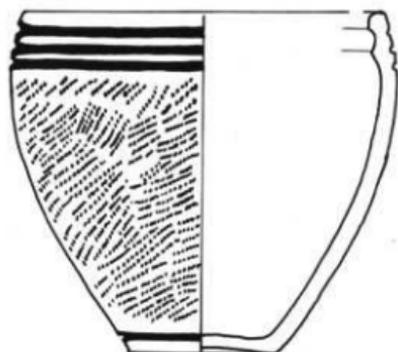
- このものも、平縁に2こ1対の大きい突起が4対と、その間に前方にせり出す2こ1対の小突起が4対付されるものである。また頸部には無文帯を持ち、胴部上半には、地文である。(L.R) 縄文の上に、横にのびる大洞C2的な曲線的雲形文と、その文様の上部および下端に、萌芽的な入組み工字文を見せ、その入組み工字文が未だ未完成で沈線が斜行するものである。
- 胴部下半には、左傾する(L.R)が縄文が施文され、色調は暗赤色、胎土、焼成とも良好である。(復原土器)
- 器形は、〔写7・8〕すなわち、第9・10群土器に近づいているが、口径と器高比から見て、口径がせまいものである。また施文は大洞C2式の曲線的雲形文に、入組み工字文の萌芽が見られるものである。



(G 2-Ⅱ a 中)

☆第 8 群土器

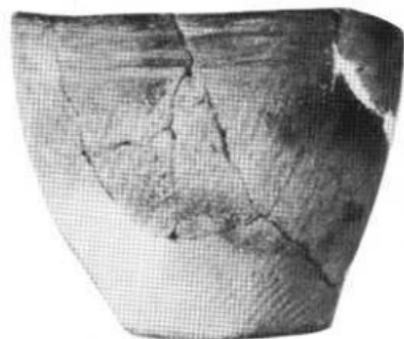
← (L. R)



☆〔写10・実測図10〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の小形深鉢形土器である。

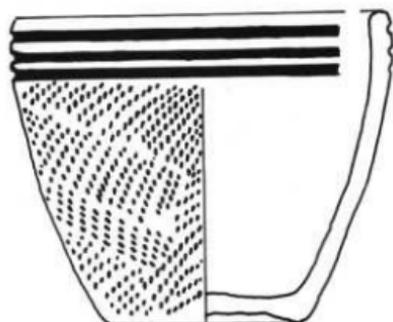
- このものは、平縁であるがゆるい小波状を呈し、頸部には、この期の特徴である、3条の平行沈線文が施文される。また口縁内側にも1条の沈線文が施文されるものである。
- 肩部は、やや張り胴部もゆるくふくらむ器形で、肩部下より底部までは、(L. R) 縄文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好な粗製深鉢形土器である。(復原土器)

☆第8群土器



(G2-II a下)

← (L.R)



☆ [写11・実測図11] このものは、第8群土器（大洞C2式）の小形の鉢形土器である。

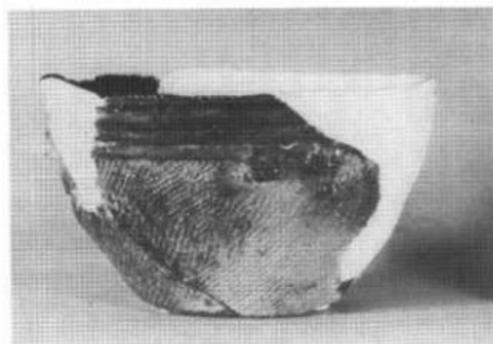
- このものも、平縁で、頸部に浅い沈線文が3条施文され、肩部下より底部までは、(L.R) 縄文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好である。(粗製土器)

☆第8群土器（大洞C2式）においては、器種に関係なく、(L.R) 縄文が最も多く、すべて左下りに施文される。

註 ①すなわち、(L.R) ⇨ 二段単節縄文 ⇨ (L.R) は、撚りの方向を示す記号である。↓

- この (L.R) 縄文が左下りに施文されるということは、縄文原体（施文に使用される縄のこと）→ の回転方向は、(右→左、左→右) でなければならないのである。

このことから回転方向が常に一定しており、また、使用される原体もまた、(L.R) を多く使用していることが理解される。



☆第8群土器

← (L.R)

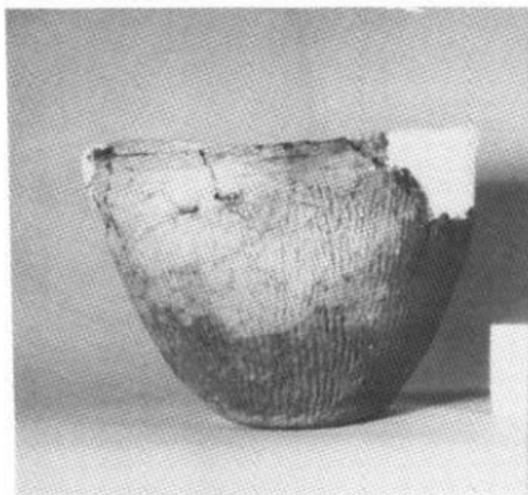
(G2-II a 中)



☆〔写12・実測図12〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の小形鉢形土器である。（粗製・復原土器）

- このものは、平縁で口縁上端に刻目文があり、頸部には、浅い平行沈線文が3条施文される。また、肩部には、2こ1対の粘土粒が4対、対象的に付される。
- 肩部より底部へかけては、左傾する（L.R）縄文が施文される。このものの色調は、灰黒色で胎土、焼成とも良好なものである。
- 器形は、口径が大きく、器高が低い寸づまりのもので、この期のものとしては、特異な器形のものである。

## ☆第8群土器



← (L. r)

☆〔写13-1・写13-2・実測図13-2〕ここに掲げたのも第8群土器（大洞C2式）の小形鉢形土器である。（粗製・復原土器）

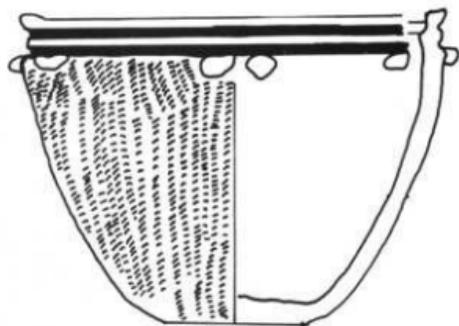
- このものは、平縁であるが口縁がいびつである。頸部には、浅い平行沈線文が2条施文される。もともと、この期のものは、3条の平行沈線文が施文されるのが、基本であるが、ごく少数頸部に2条施文されるものも出土する。
- 肩部には、2こ1対の粘土粒が4対、対象的に付されるものであろう。肩部下より底部へかけては、(L. r) 単軸燃糸文が縦位に施文されるもので、この施文法が〔写5・写6〕にも見られ、施文法の1タイプである。
- 器形は、肩部より胴部上半が、ゆるやかにふくらむもので、色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好である。

☆なお（写13-2・実測図13-2）に示すとおり、器形は、ゆがんでいるが、これは、徐々に推積する砂質土の圧力下で形成されたものと考えられる。

また、このものは、骨粉・骨片を内蔵していたものである。このことについては既に述べた。

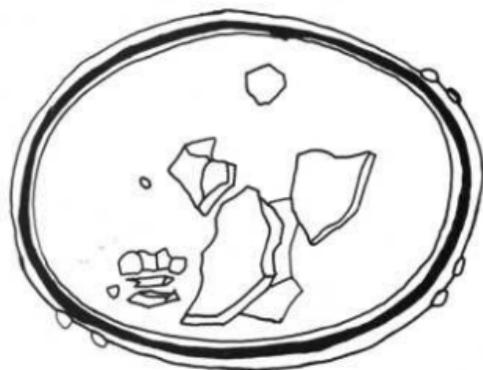
〔骨片内蔵鉢形土器→再掲〕

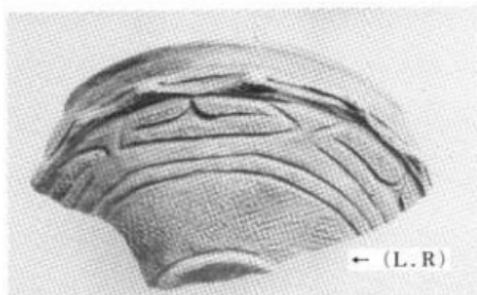
写13-2



☆器形がゆがんでる。

p = 土器  
b = 骨片





(G1-II a上)

☆第10群土器



☆ [写14・実測図14] ここに掲げたものは、第10群土器（大洞A式）の浅鉢形土器である。（現存せず、精製土器）

- このものは、平縁で、頸部は無文帯をなし、肩部には、前方に突出する突起と、その突起間を連結する沈線文が施文される。
- さらに肩部下の胴部上半の施文帯には、肩部の突起と上下関係をもちながら、単位文様が6こ磨消手法によって区画され、対象的に施文されるものである。
- また、各単位文様間の空間は、ていねいに研磨され無文の空間をなしており、文様帯の下端は、2条の沈線文によって、胴部下半の縄文帯と区画している。
- 胴下半の縄文帯は、二段単節（L.R）の縄文が左下りに施文されるもので、底部直上にも1条の沈線文がめぐるものである。
- 色調は、内外面とも灰黒色で胎土、焼成とも最良である。なおこのものの口縁内側には、1条の沈線文がめぐる。出土数は、このもの1このみで破片の中にも、この単位文様をもつものはない。

## ☆第8群土器



(G1-Ⅱ a 中)

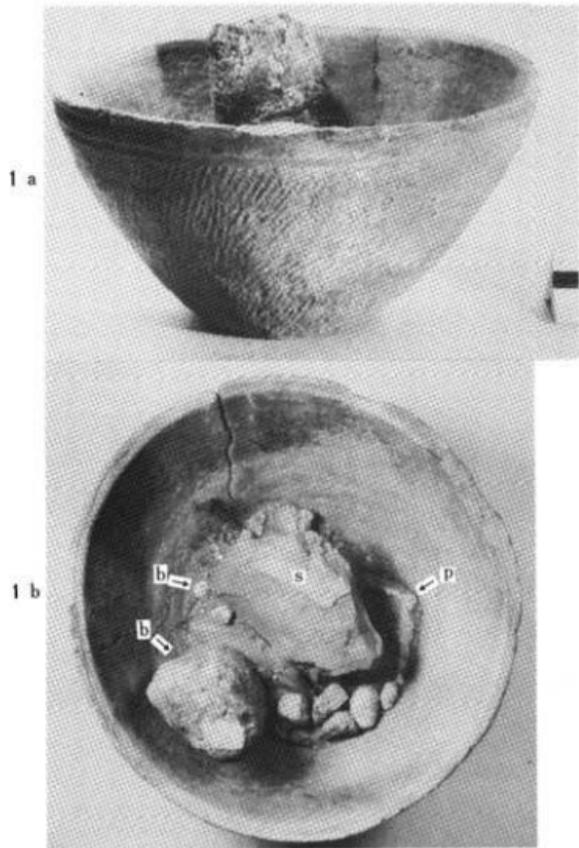
☆〔写15-1・写15-2・実測図15-2〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の小形鉢形土器である。（粗製・完形土器）

- ・このものは、口縁が平縁で、頸部が無文帯をなし、肩部に沈線文が1条めぐるものである。
- ・肩部より底部へかけては、0段多条の（L.R）縄文が左傾、すなわち左下りに施文されるものである。
- ・色調は、内・外面とも灰黒色で、胎土、焼成とも良好なものである。

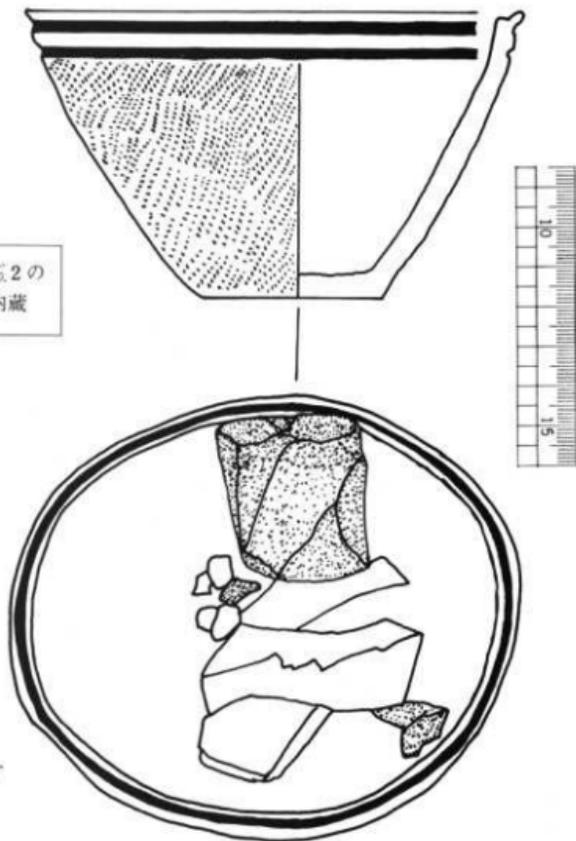
☆このものの器形は、器高に対して、口径が大きく、また、頸部は無文帯をなす等々器形、施文帯の状況からやや特異なものである。

☆さらに、この鉢形土器の内部には、〔写15-2・実測図15-2〕に示すとおり骨片、焼けた石片・土器片が内蔵されて直立状態で出土した。このことについては、既に述べた。（資料系2）

〔骨片内蔵鉢形土器→再掲〕



☆資料館2の  
骨片内蔵

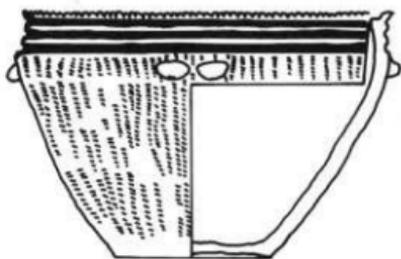


☆第8群土器



(G1-Ⅱ a下)

← (L {  $\frac{r}{r}$  })



☆ (写16・実測図16) ここに掲げたものも第8群土器 (大洞C 2式) の鉢形土器である。(粗製・復原土器)

- このものは、平縁で、頸部には、浅い平行沈線文が3条施文され、肩部がやや張り、肩部下には、2こ1対の粘土粒が、対象的に4対付されるものである。
- 肩部下より底部へかけては、単軸燃糸文 (L {  $\frac{r}{r}$  }) が縦位に、しかもやや不整に施文されるものである。
- 色調は、灰黒色で胎土・焼成とも良好なものである。また、器形は、肩部がやや張り、胴部は、まるくふくらみをもつものである。

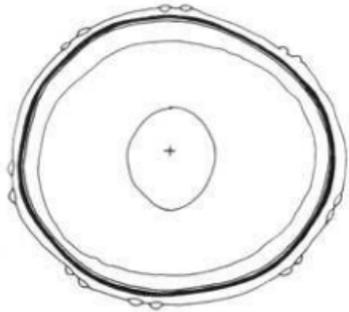
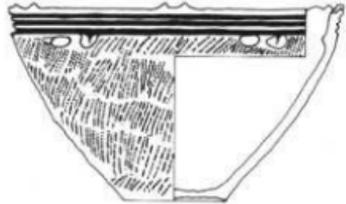
☆既に述べたように (写5・6・13)、単軸に燃糸を巻き、それを回転して施文する手法による鉢形土器が一つのタイプを形成すると考えられる。

☆第8群土器



← (L. R)

(G1-Ⅱ a中)



☆〔写17・実測図17〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。（粗製・完形土器）

- このものは、平縁で、口縁上端に小突起を4対付し、頸部には、3条の浅い沈線文が施文される。
- また、肩部には、2ヶ1対の粘土粒が4対対象的に付されるものである。肩部から底部へかけては、左傾する（L. R）縄文が密に施文されている。

☆器形は、口径が大きく、そのわりに底部径の小さいもので、大洞C2式の典型的鉢形土器（写4・5・6）と異なり、（写7・8・9）すなわち、第9群土器（大洞C2-A式→仮称）の鉢形土器に近似する器形である。

☆また、注目すべきは、肩部下に付された粘土粒の片方に刻目が付される施文手法である。この手法は、第9群土器に顕著である。以上のことから、このものは、大洞C2式より大洞C2-A式→仮称に移行する直前のものと考えられるところである。

☆第8群土器



(G1-Ⅱ a 中)

☆ [写18-1・写18-2・実測図18-2] ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。(粗製・完形土器)

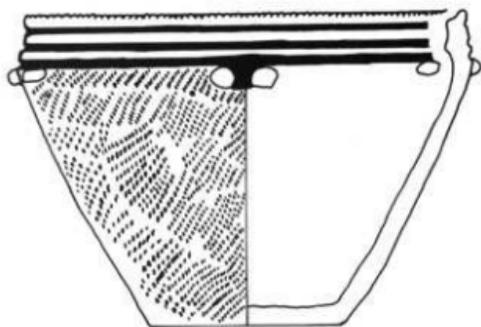
- このものも平縁で、口縁上端には、刻目文があり、頸部には、3条の浅い平行沈線文が施文されるもので、この期の基本的施文パターンである。
- 肩部には、2ヶ1対の粘土粒が対象的に4対付され、肩部より底部へかけては、左傾する(L. R) 縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、赤褐色で胎土、焼成とも良好である。

☆このものは、(写18-2・実測図18-2) に示すように、この土器の内部に骨片が内臓されるものである。このことについては、既述してある。(資料紙4)

1 a

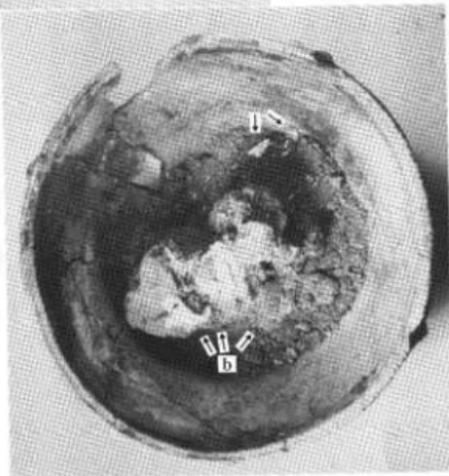


←(L.R)

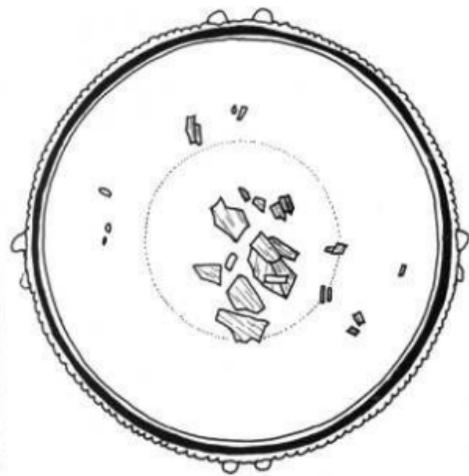


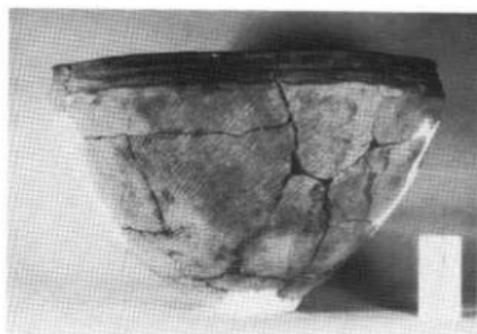
☆資料64の  
骨片内蔵

1 b



b=骨片

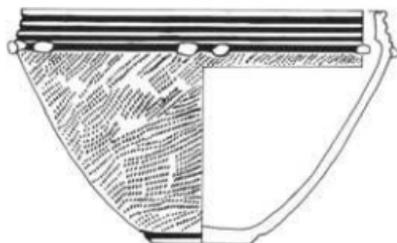




☆第8群土器

← (L.R)

(G1-II a 下)



☆〔写19・実測図19〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。（粗製・復原土器）

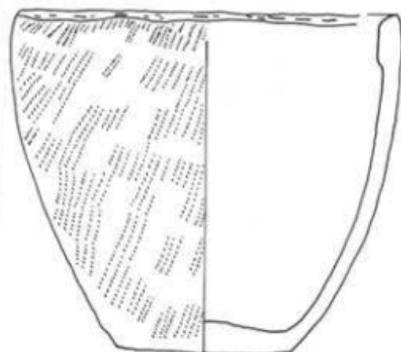
- このものは、大形の鉢形土器で、平縁をなし、頸部には、浅い平行沈線文が3条めぐり、肩部にも1条の沈線文が施文される。その沈線文上に2こ1対の粘土粒が対象的に4対付されている。
- 肩部より底部へかけては、二段単節（L.R）視文が左下りに施文されるもので、色調は、内外面とも灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。
- 器形は、口頸部が外反し、肩部がやや張るもので、胴部がゆるくふくらむものである。



(G2-II a 中)

☆第8群土器

← (L. R)



☆〔写20・実測図20〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の深鉢形土器である。（粗製・復原土器）

- このものは、平縁で、口縁直下より、(L. R) 縄文が左下りに底部まで施文されるものである。
- このものの器形は、口頸部が、やや内傾し、肩部に張りがなく、胴部がかかるくふくらむものである。また、口縁内側が肥厚し、段を有するものである。
- 色調は、赤褐色、胎土、焼成とも良好で堅緻なものである。

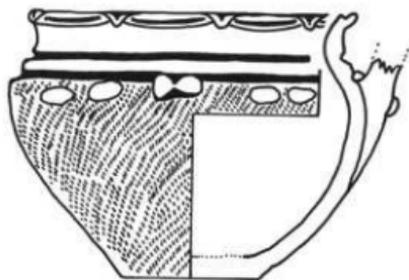
☆上に述べたように、この期の深鉢形土器には、口縁内側が肥厚し、段を有するものと、肥厚しないものの二種が認められる。そして後者のものが、つぎの大洞A式期まで永続するものようである。



☆第8群土器

← (L. R)

(G 1 - II a 中)



☆〔写21・実測図21〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C 2式）の把手付鉢形土器である。

（粗製・復原土器・把手上半欠損）

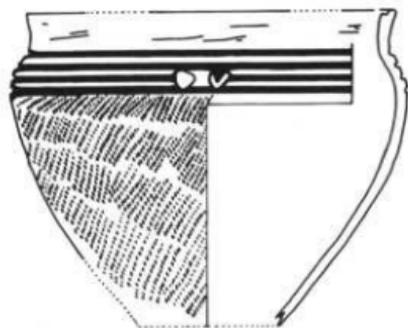
- このものは、平縁で、低い突起があり、口縁上部が肥厚し、そこには1条の沈線文がめぐる。また、頸部は無文帯をなし、肩部との境には、1条の沈線文が施文される。
- 肩部には、やや不整な、粘土粒が2ヶ1対付され、また把手が付されるものである。胴部より底部へかけては、左下りの(L. R)縄文が施文されている。
- 器形は、口縁上部が帯状に肥厚し、段をもって頸部とつながり、頸部は、外反し、肩部がふくらみを持って張る器形である。
- 色調は、内外面とも灰黒色、胎土、焼成ともやや良好である。

☆第8群土器



(G2-II a中)

← (L. R)



☆ [写22・実測図22] ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の鉢形土器である。（半精製

・復原土器）

☆このものは、一見して深鉢形に見られるが、口径15.3、器高13.0であるので鉢形土器として分類した。

- ・このものは、平縁で、頸部は無文帯をなし、肩部には、3条の沈線文が施文される。この沈線文の第三沈線上に2ヶ1対の粘土粒が4対付されている。
- ・肩部より底部へかけては、(L. R) 縄文が左下りに施文されるものである。
- ・器形は、平縁の口縁が多少ゆがみ、頸部がゆるく外反する。肩部は、まるみをもってふくらみ、急に底部へ向って細くしぼまる器形で底径は小さいものである。
- ・色調は、灰褐色、胎土、焼成とも最良で堅緻である。



(G 2 - II a 上)

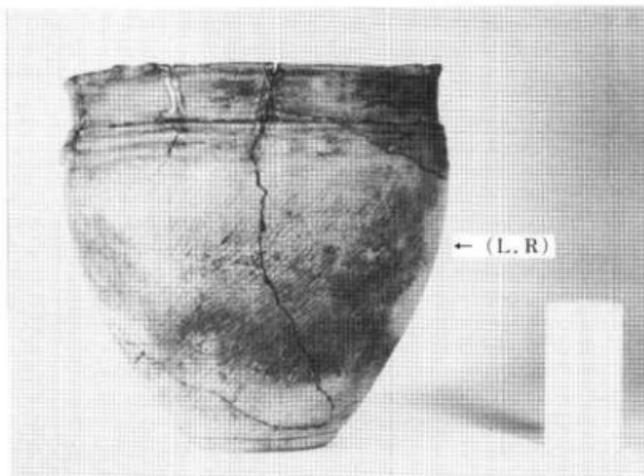
## ☆第8群土器

← (L. R)



- ☆〔写23・実測図23〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C 2式）の深鉢形土器である。（粗製・復原土器）
- このものは、平縁で、口縁に縄の押圧による刻目状文を付し、2こ1対の小突起が対象的に4対付されるものである。
  - また、頸部は無文帯をなしているが、縄文を磨消したものと認められる。肩部には、2条の沈線文がめぐり、そこには、2こ1対の粘土粒が4対付されるものである。
  - 肩部より底部へかけては、左傾する（L. R）縄文が不整に施文される。
  - 色調は、明赤褐色、胎土、焼成は良好で、器厚があり重い土器である。
- ☆このものの出土は少なく、かつ永続する器形で、大洞A式期まで少量ずつ出土するようである。

## ☆第8群土器



(G1-II a中)

☆〔写24-1・写24-2・実測図24-2〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の深鉢形土器である。（半精製・復原土器）

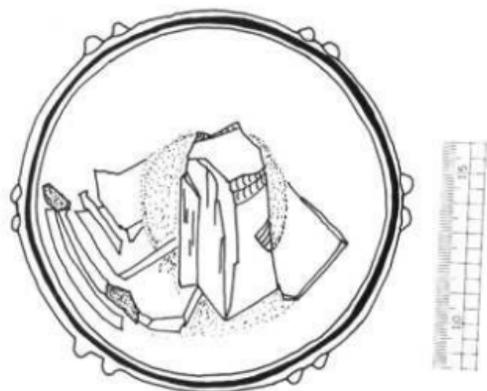
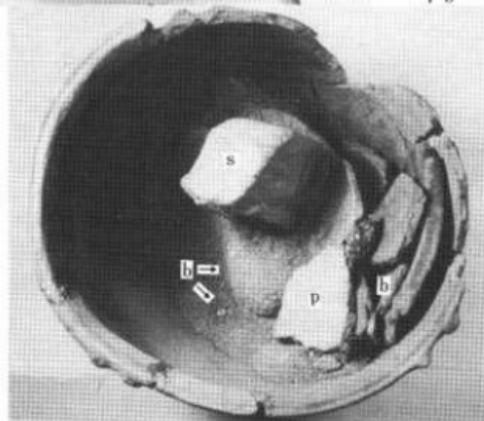
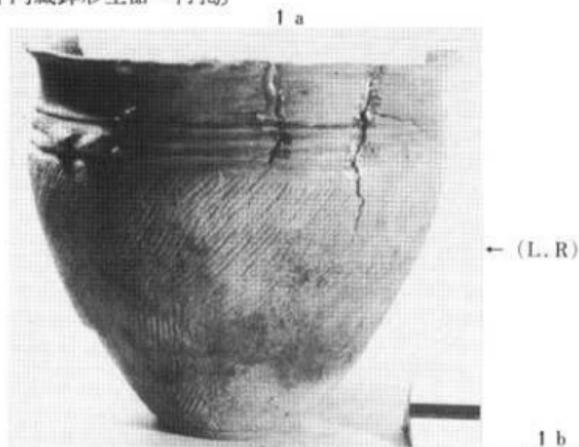
- このものは、平縁で、口縁には、前方に突き出す小突起が2こ1対ずつ4対対象的につけられる。
- 頸部は、(写21~23)と同様、無文帯をもち、肩部には3条の平行沈線文が施文され、その第2沈線上に2こ1対の粘土粒が付される手法、および肩部下より胴部、底部へは、やはり(L. R)縄文が左下りに施文され、底部直上にも沈線文が1条めぐむものである。

☆すなわち、(写21~24)の鉢形・深鉢形土器の施文手法は一定しているのである。これらのものは、大洞C2式の後半、大洞C2-A式→仮称にまたがる時期のものと考えられる。

☆なお、このものの内部には、少数の骨片が内蔵されていた。このことについては、細片のため記述は省略した。

[骨片内藏鉢形土器→再掲]

写24-2



☆第8群土器



(G1-II a 下)

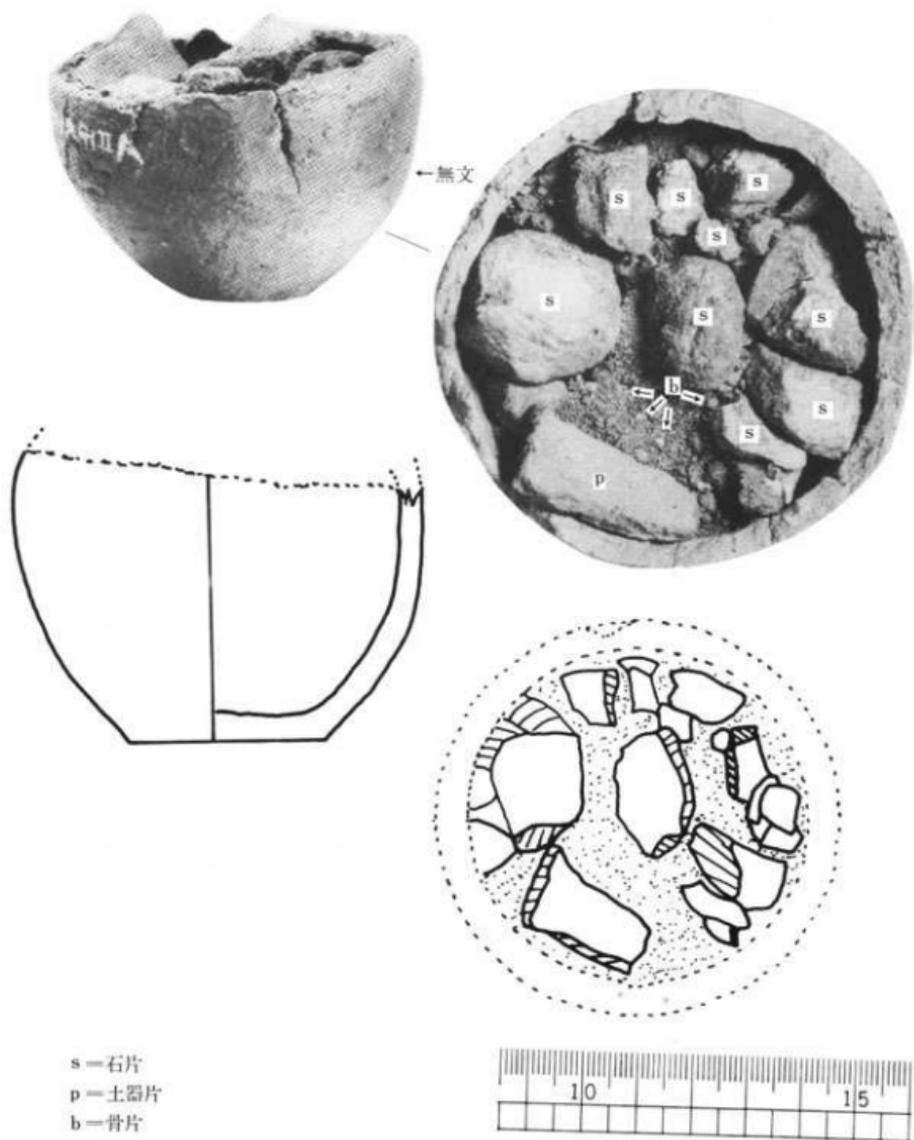
☆ [写25-1・写25-2・実測図25-2] ここに掲げたものは、一応第8群土器（大洞C2式）の壺形土器として分類したものである。（粗製・上半部欠損）

- ・このものは、上半部が欠損し、無文であるため、現存部の器形から壺形土器とした。また、型式を明確にするきめ手を欠くが、出土層が（G1-II a 下）すなわちII a層の下位であることから第8群土器としたものである。

☆このものの全体器形は不明であるが、(写25-2、実測図25-2)に示すように焼けた石片、土器片とともに骨片が内蔵していたものである。

- ・色調は、灰褐色、胎土、焼成とも良好である。なお、現存部の計測値は、(表3-16 2-25-1)に示してある。

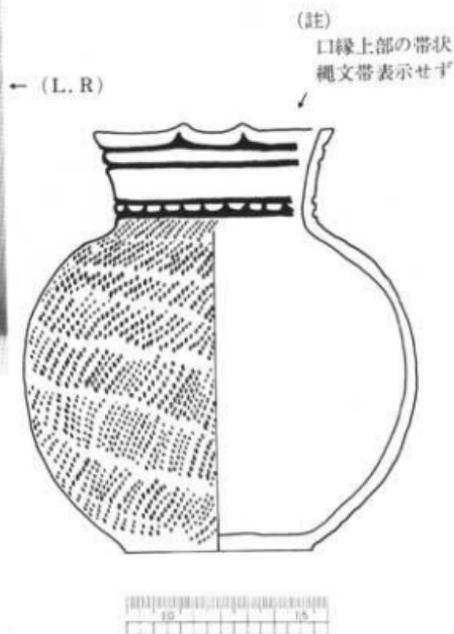
☆また、内蔵されている骨片等については、細片のため記述は省略した。





(G 3-Ⅱ b 下)

☆第7群土器



☆ [写26・実測図26] ここに掲げたものは、第7群土器（大洞C1式）の壺形土器である。（精製・完形土器）

- このものは、口縁は平縁であるが、小突起が2こ口縁に付くもので、口縁上部には帯状に縄文帯をもち、2条の沈線文によって頸部と区画され、頸部は無文で研磨されたものである。
- また、頸部の下端には、1条の沈線文と隆帯上に刻目文があり肩部より底部へかけては、(L. R) 縄文が左下りに施文されるもので、色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好である。
- このものは、球形の胴部をもつのが特徴で、つぎの(写27)と上下にかさなって出土した。（写7上段左）



(G 3-Ⅱ b 下)

☆第7群土器

← (L. R)



☆〔写27・実測図27〕 このものも第7群土器（大洞C1式）の壺形土器である。（半精製・完形土器）

- このものは、平縁で、頸部は無文で研磨され、肩部より底部には、(L. R) 縄文が左下りに施文されるものである。
- 器形は、肩の張らない球形の胴部であり、前述（写26）のものと同様の器形である。色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好なもので器厚はうすい。

☆このものは、(写26)の下にあり、両者は上下にかさなって出土した。なお、グリット3、すなわちG 3のⅡ b層からは、この2個体のみ出土し、他は破片も出土しなかったのである。（写真7上段左）



(G1-II a 中)

☆第8群土器



☆〔写28・実測図28〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の壺形土器である。（精製・完形土器）

- このものは、口縁に大突起をもち、その左・右には、2ヶ1対の粘土粒が二重に付けられ、口縁部上端が帯状に肥厚し、そのほぼ中央に沈線文が1条ある。すなわち複合口縁を形成するものである。
- また、頸部は無文で肩部との境には、浅い沈線文が1条あり、胴部は大きくふくらみ、底部は、四脚を有する特異なものである。
- 器形は、複合口縁が段をもって頸部に接しており、頸部がすそ広がりになるもので、この期の特徴を示している。

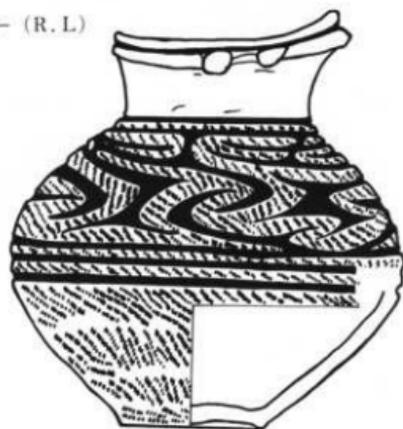
☆この種の四脚壺形土器は、ごく少数の出土で、本遺跡では、他に3片出土した。



(G2-II a上)

## ☆第8群土器

← (R.L)



☆ [写29・実測図29] ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の壺形土器である。（精製・完形土器）

- このものは、1この突起を口縁にもち、口縁は複合口縁をなすもので、頸部は、ゆるやかに外反するものである。
- 肩部は張りがなく、胴部の最大幅は、中央より下にある器形のもので、肩部より底部にかけては、地文として（R.L）縄文が施文され、胴部上半の文様帯には、沈線による曲線文が大洞C2式の主文様パターンを示している。
- なお胴下半の縄文は、右傾する（R.L）縄文である。色調は、明黄褐色、胎土、焼成とも良好である。また、このものは朱ぬり痕をとどめている。

☆第8群土器



(G1-Ⅱ a 中)

← (R. L  $\left\{ \begin{array}{l} \text{R} \\ \text{L} \end{array} \right.$ )



☆〔写30・実測図30〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C 2式）の壺形土器である。（半精製・復原土器）

- このものも、1この突起をもち、口縁は複合口縁をなすものである。頸部は、無文帯をなし、ほぼ直立しているものである。
- 頸部と肩部の境には、浅い沈線文が1条、また、肥厚する口縁と頸部には段を有し、1条の沈線がめぐるものである。
- 胴部は、強くふくらみ、0段多条の（R. L）縄文が左下りに施文されている。色調は、灰黒色で胎土、焼成とも良好なものである。

☆このものも頸部がほぼ直立することから大洞C 2式後半のものと考えられる。

## 〔壺形土器〕



(G1-Ⅱ a 上)

## ☆第8群土器

← (L. R  $\left\{ \begin{array}{l} e \\ e \\ e \end{array} \right\}$ )

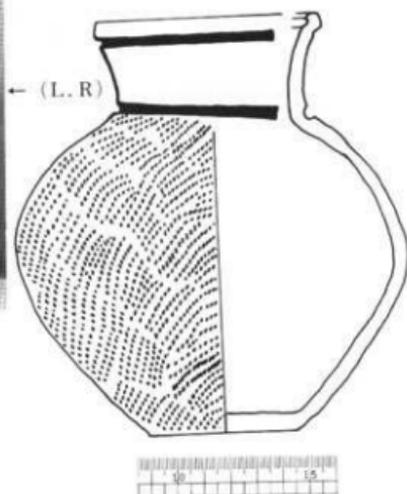
☆〔写31・実測図31〕ここに掲げたものも第8群土器(大洞C2式)の壺形土器である。(粗製・完形土器)

- このものは、やや低い突起をもち、口縁は複合口縁である。また、突起の下方およびその左・右に刻目文をもち、頸部は、ほぼ直立し、胴部の最大幅は、胴下半にあり、底部へかけてしぼまる器形のものである。
- 胴部には、0段多条の(L.R)縄文が施文され、色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好である。



(G1-II a 中)

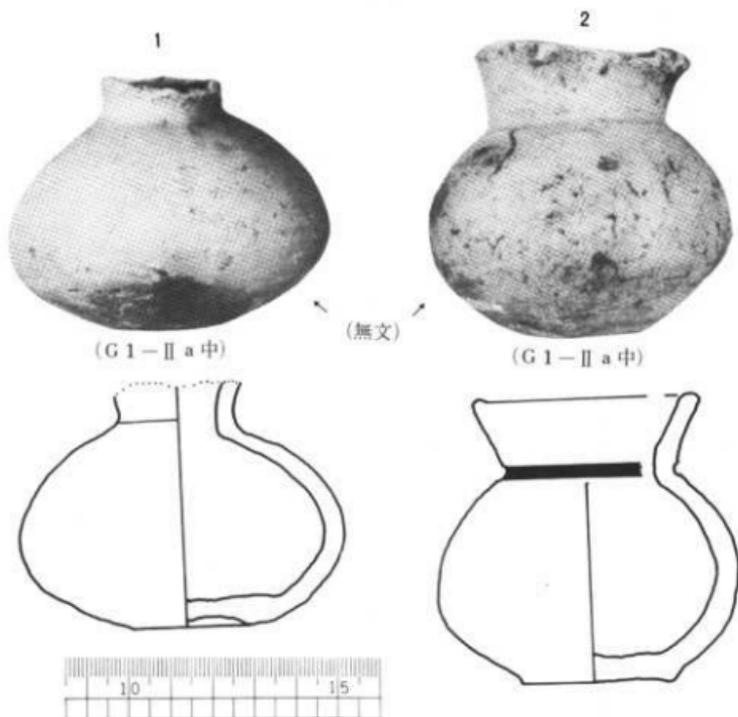
☆第8群土器



☆ [写32・実測図32] ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の壺形土器である。（粗製・復原土器）

- このものは、わずかに突起状のふくらみを口縁にみせるもので、口縁上端がまるみをもって肥厚し、このものの頸部も、ほぼ直立している。
- また、肩部はなだらかで、胴中央部に最大幅のある器形である。
- 肩部より胴部・底部へかけては、(L.R) 縄文が左下りに施文されるもので、色調は、白灰黒色、胎土、焼成とも良好である。

☆第8群土器

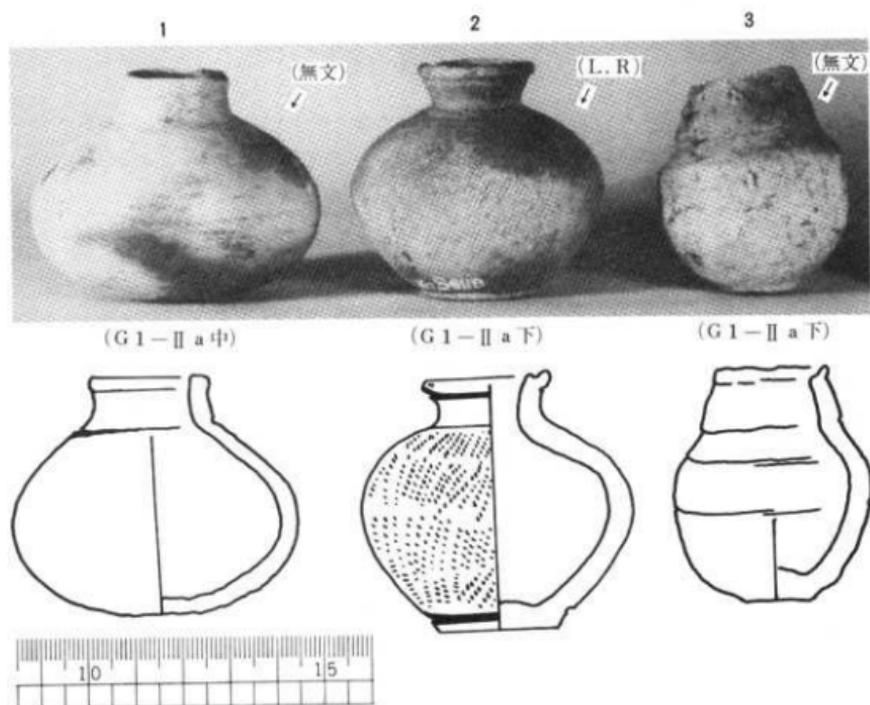


☆〔写33・実測図33-1・2〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C 2式）の小形壺形土器である。（1＝精製、2＝粗製、ほぼ完形土器）

- (1)は、口頸部の細い細口壺である。胴部の最大幅は胴下半部にあり、下ぶくれの器形をなし、無文で研磨されたものである。（袖珍土器）
- (2)は、口縁の一部が欠損している無文壺形土器である。このものも肩部が張らず最大幅は胴下半部にある。
- 色調は、(1)は黄白色・胎土・焼成とも最良なものである。また、(2)は、明黄褐色を呈し、口頸部は、外反するものである。

☆なお、(1)・(2)の計測値は、〔表3-Ⅱ 3-33-1・2〕を参照されたい。

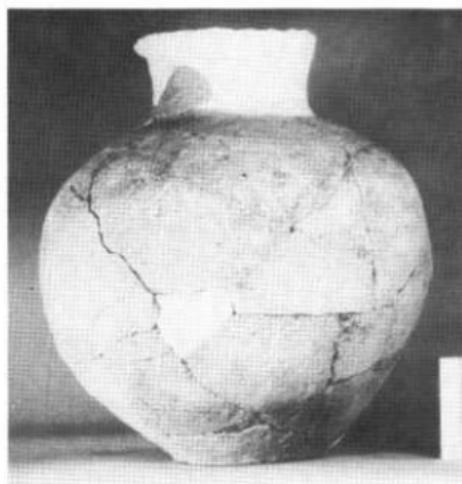
## ☆第8群土器



☆〔写34・実測図34-1・2・3〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の小形壺形土器（袖珍土器）である。このもののうち(1)は精製、(2)は半精製、(3)は粗製で、完形土器である。(但し、3は口縁部や欠損)

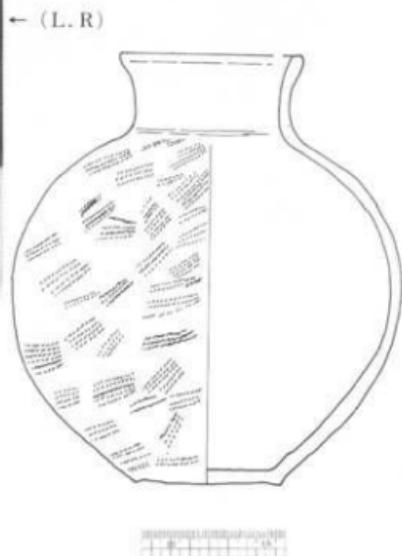
- (1)は、無文の細口壺で(写33-1)に類似する器形である。
- (2)は、胴部に(L. R)の左下り縄文が施文されるものである。
- (3)は、胴部が球形で口頸部の長い器形で胎土、焼成とも粗末である。
- 色調は、(1～3)それぞれ明黄褐色・赤褐色・黄褐色を呈し、(1・2)は、胎土、焼成とも最良、(3)は、胎土が悪いものである。

◎なお、計測値については、(表3-16)3-34-1・2・3)を参照されたい。



(G1-II a 下)

第8群土器



☆〔写35・実測図35〕ここに掲げたものも第8群土器（大洞C2式）の壺形土器である。（粗製・復原土器）

- このものは、口頸部が欠損しているものであるが、頸部は、復原したものとおりであろう。器形は、球形に近いふくらみを持ち、底部直上でしぼまるもので、(L.R) 縄文が肩部で左傾・胴部で横走、胴下半で左傾するものである。

色調は、灰黄色、胎土、焼成は良好なものである。

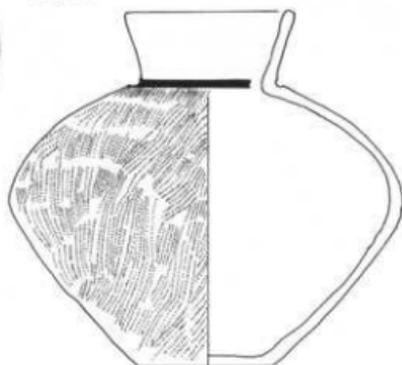
☆縄文の回転方向は、肩部→、胴部→、胴下半部→のように方向を変えている。

☆第8群土器



(G2-II a中)

← (L.R)



☆ [写36・実測図36] ここに掲げたのも第8群土器（大洞C2式）の壺形土器である。（粗製・復原土器）

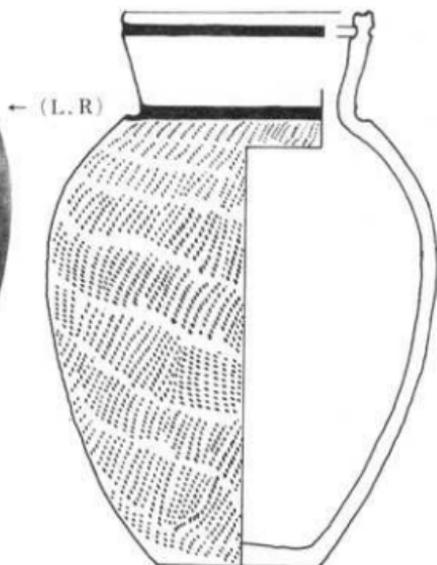
- このものは、平縁で口頸部が無文である。器形は、口頸部が直線的に外反し、肩部が張らず最大幅は、胴部中央やや下であり、急角度に底部へしぼまるものである。
- 胴部には、左傾する不整（L.R）縄文が施文される。また、色調は、赤褐色、胎土、焼成とも良好である。

☆以上 [写25～36] にわたって、壺形土器を掲げたが、[写26・27] は、大洞C1式、他は、すべて第8群とした大洞C2式の壺形土器である。このうち [写33・34] の袖珍土器を含めて、きわめて変化に富んでいることが理解されるところである。

☆第10群土器



(G1-II a上)



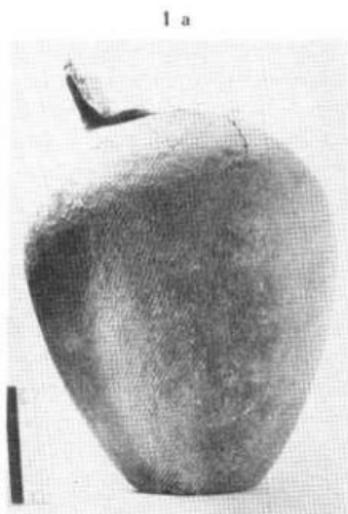
☆ [写37-1・写37-2・実測図37-1] ここに掲げたものは、第10群土器（大洞A式）の壺形土器である。(粗製・復原土器)

- このものは、平縁で頸部は無文で、ほぼ直立し、胴部は長胴の器形である。
- また、胴部には、(L.R) 縄文が左下りに施文され、色調は、外面赤褐色、内面は、灰黒色で、胎土、焼成とも良好である。

☆この(写37)の器形は、特異なものである。このことは、(写27~36)とした第8群土器の壺形土器と比較すれば、器形の相違が理解されよう。また、第9群(大洞C2-A式)の壺形土器は分類不能であった。おそらく第8群とした壺形土器のうち、口頸部が直立したものが使用されていたのであろう。

☆なお、このものには、(写37-2)に示すように、骨片、その他が内蔵されていた。そのことについては既に述べたとおりである。(資料編5)

資料展5の骨  
類内蔵土器

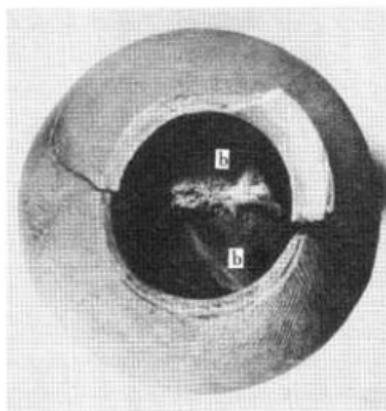


☆ (註)

{ 写37-1の壺形土器の  
復原前の写真である。 }

← (L. R)

1 b



b-骨片



☆ [写38・実測図38] このものは、第10群土器（大洞A式）の壺形土器である。（粗製・復原土器）

- このものの口頸部に特徴がある。すなわち、小さい甕をのせたような口頸部をなすもので、頸部が強くとびれ、肩部が張らず、なだかなふくらみをもつもので長胴をなす器形のものである。これと同類のものは、破片で3箇体出土した。
- 施文は、口縁下に沈線文1条、肩部との境に隆帯をめぐらせ、その上に横位の短沈線文が間隔をおいて押圧される。また、肩部より胴部へかけては、(L. R) 縄文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、明赤褐色、胎土、焼成とも良好である。

## ☆第10群土器



(G1-II a F)



☆〔写39・実測図39〕ここに掲げたものも第10群土器（大洞A式）の壺形土器である。（粗製・復原土器）

- このものは、口縁が平縁で退化した低い突起を2こ口縁上に付すもので、口縁は外反し、口径の大きい広口壺に近いものである。
- また、頸部はすそ広がりのもので、肩部がやや張り、胴部はややふくらみを有し、底部直上で、ややしばまる器形である。
- 施文は、胴部より底部へかけて（L, R）縄文が左傾し、また、口縁下、および肩部に1条の沈線文が施文される。
- 色調は、灰赤褐色、胎土、焼成とも良好なものである。

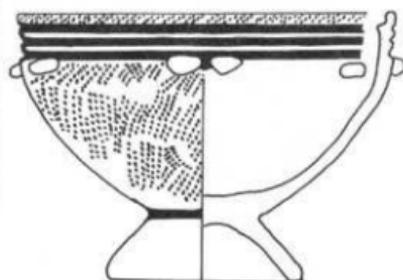
☆このものは、一応器形から第10群土器（大洞A式）としたが、第8群土器の要素が、口縁突起に、また頸部のすそ広がりに認められるので第9群土器の仲間に入れることも可能であるように考えられるが、この群として一応分類しておくことにする。なお、第10群土器（大洞A式）とした理由は、この器形のもものが砂沢式土器群の古い方にも共伴する例があるからである。

☆第8群土器



(G2-II a 下)

← (L. R  $\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{\text{e}} \\ \textcircled{\text{e}} \end{array} \right\}$ )



☆ [写40・実測図40] ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C2式）の台付鉢形土器である。

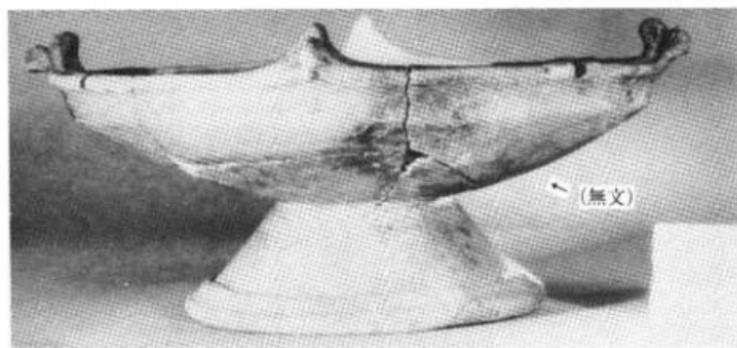
（粗製・復原土器）

- このものは、口縁は、やや不整な平縁で、口縁上端には帯状に縄文が施文され、頸部には、この第8群土器（大洞C2式）の特徴である3条の平行沈線文が施文される。
- また、肩部より台部直上までは、(L. R  $\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{\text{e}} \\ \textcircled{\text{e}} \end{array} \right\}$ ) の左下り縄文が施文され、台部との境には、沈線文が1条めぐるものである。また台部は無文である。
- 色調は灰黒色、胎土、焼成とも良好で、台部は、研磨されている。

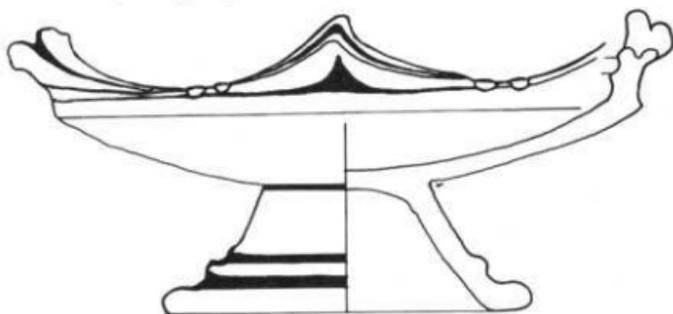
☆この第8群土器の仲間である台付土器の台部は、サカズキをふせた形をなすものが一般的器形である。そして、第9群土器（大洞C2-A式→仮称）すなわち、大洞A式に移行する時期より直立する台部が前者と併行し、この両者の器形が縄文時代終末期の大洞A式（砂沢式）まで永続するようである。

## 〔台付浅鉢形土器〕

## ☆第9群土器



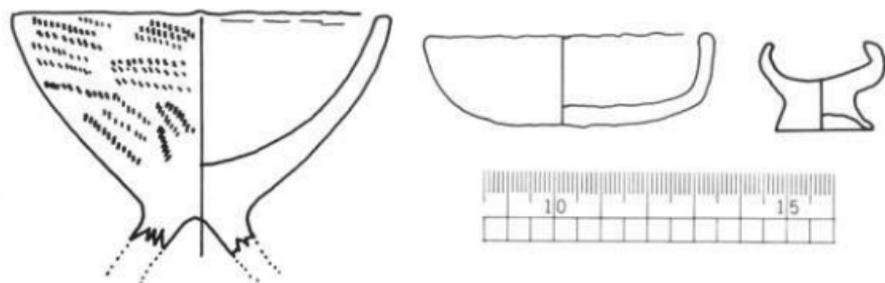
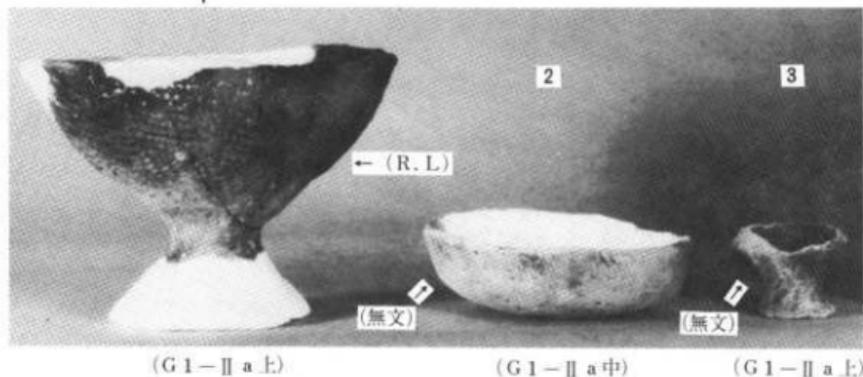
(G1-II a中)



☆〔写41・実測図41〕ここに掲げたものは第9群土器（大洞C2-A式）の台付浅鉢形土器である。（精制・復原土器）

- このものは平縁に前後二つに分かれる大突起4こが対象的につけられ、その間に前方に突き出る、二叉山形の小突起が4対つくものである。
- 頸部は、無文でやや内傾し、口縁下には、浅い細目の沈線文が1条めぐるものである。胴部も無文で、肩部より急角度で台部に接する。胴部と台部との接点には、1条の浅い沈線文が施文される。
- 台部下端には、隆帯が2条あり、その間にも1条の沈線文がめぐるものである。なおこのものは、口唇部に沈線文がめぐり、また、口縁内側にも1条の沈線文が施文されるものである。

## ☆第8群土器（1・2・3）



☆〔写42・実測図42-1・2・3〕ここに掲げたものは、いずれも袖珍土器で、第8群土器の仲間である。(1=小形台付土器、2=小形皿形土器、3=小形台付土器で、1・2は復原土器、3はほぼ完形、いずれも粗製土器である)

- 1は、平縁なるも口縁は不整、胴部に(R.L)縄文が右下りに施文されるもので、台部は欠損して器形は不明である。
- 2は、無文のもので、一応皿形土器とした。このものは、手づくねによって成形されたものである。
- 3は、無文のもので、手づくねにより作られている。

☆なお、これらの袖珍土器の計測値は、〔表3-164-42-1・2・3〕を参照されたい。

☆1の縄文は、(R.L)で、その条の方向は、右下りである。すなわち、原体の回転方向は、左→右または、右→左の横方向である。既に述べたように、(写11参照) - (L.R)は左下り、(R.L)は右下りに縄文が施文されていることは、回転方向が横方向に一定している傾向を示すものである。

☆第8群土器



(G1-II a 中)



☆〔写43・実測図43〕ここに掲げたものは、第8群土器（大洞C 2式）の皿形土器である。（半精製・復原土器）

- このものは、平縁で口縁に、小突起が対象的に4対付されるもので、口縁下に2条の平行沈線文が施文される。また、口縁内側にも1条の沈線文がめぐるものである。
- 胴部は無文で、研磨されている。色調は、灰黒色、胎土、焼成ともに良好である。

☆平縁で、小突起が4対あり、口縁下に2条の平行沈線文、また、口縁内側に1条の沈線文のあるもの→〔1類〕

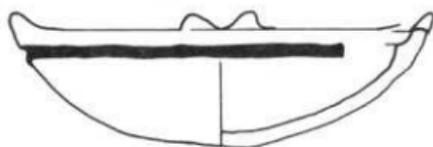
1



(G1-Ⅱ a中)

☆第8群土器  
(1・2)

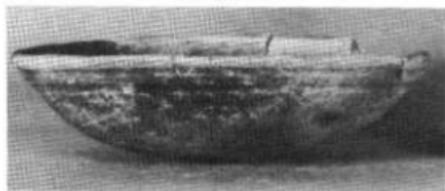
← (無文)



☆〔写44-1・実測図44-1〕このものも第8群土器(大洞C2式)の皿形土器である。(半精製・復原土器)

- ・このものは、平縁で、口縁に小突起を4対もち、外面に1条の沈線文、内面にも1条の沈線文がめぐるものである。→〔2類〕
- ・色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好である。

2



(G1-Ⅱ a中)



← (無文)



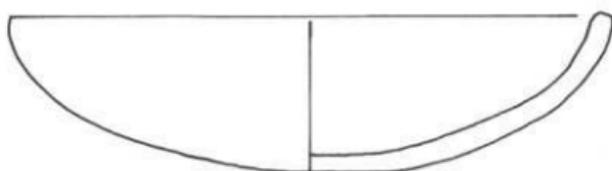
☆〔写44-2・実測図44-2〕このものも第8群土器(大洞C2式)の皿形土器である。(半精製・一部欠損)

- ・このものは、平縁で、口縁に小突起が無く、外面に2条の平行沈線文が施文され、内面には、沈線文のないものである。→〔3類〕
- ・色調は、灰黒色で胎土、焼成とも良好なものである。

☆第8群土器



(G1-Ⅱ a上)



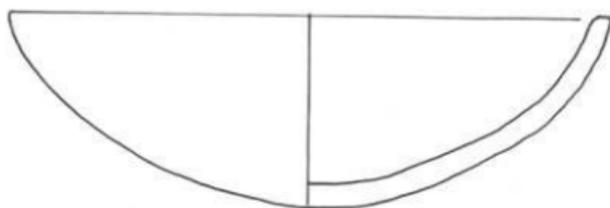
☆〔写45・実測図45〕このものも第8群土器（大洞C2式）の皿形土器である。（粗製・復原土器）

- このものは、不整な平縁をなすもので、外面・内面ともに無文のものである。→〔4類〕
- 色調は、赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、また、焼成も悪くもろいものである。

☆第8群土器



(G1-II a上)



☆ [写46・実測図46] このものも第8群土器（大洞C2式）の皿形土器である。（粗製・復原土器）

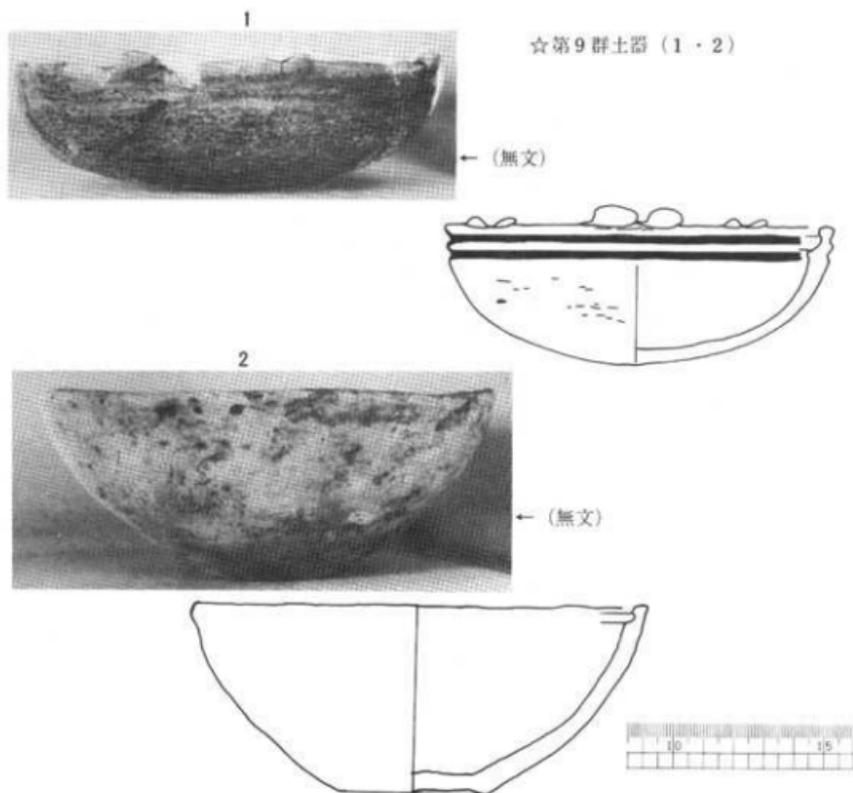
・このものも不整な平縁をなすもので、外面・内面ともに無文のものである→ [4類] → [写45と同類]

・色調は、灰白色、胎土・焼成ともに良好なものである。

☆皿形土器のうち、完形、および復原土器については、既述したように、1類～4類に類別した。

このうち、1～3類の器形は、ほぼ同様で、4類としたものは、やや深く、浅鉢形に近い器形のものである。

☆また、[P.L.80～P.L.91] に示すように皿形土器は、約80個体分出土した。この破片を精査すると、さらに細別することが可能であるが、そのことについては、他日にゆずることにしたい。



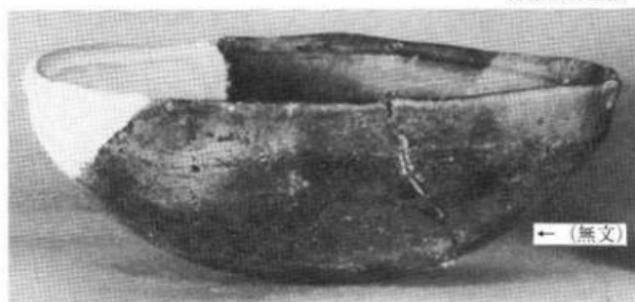
☆ [写47・実測図47-1・2] ここに掲げたものは、第8群土器 (大洞C 2-A式→仮称) の盥形土器である。(1-精製、2-粗製、それぞれ復原・完形土器)

- 1は、口縁に、2こ1対の突起が、6対つもので、口縁下には太い沈線文が2条施文され、他は、無文であるが朱ぬり痕を認めるものである。
- 器形は、胴部上半がふくらむもので底面は平底である。
- 2は、不整な平縁で、器形も不整なものである。また、このものには、口縁の内面に沈線文が1条めぐるので、外面は無文である。

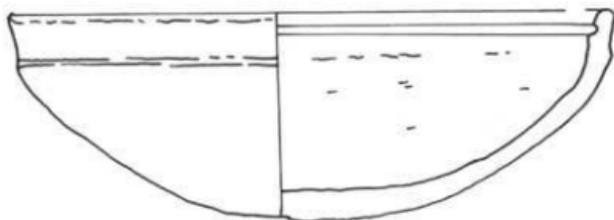
☆1については、色調は、灰黒色、胎土、焼成とも良好であるが、朱ぬり土器は、やわらかい焼成をしているのが一般的である。このやわらかい焼成は、朱ぬりと相関関係があるように考えられる。

- 2について、色調は、灰黄色、胎土、焼成ともやや良好である。

☆第9群土器



(G 1 - II a 中)



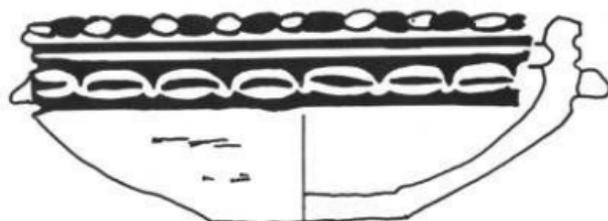
☆〔写48・実測図48〕ここに掲げたものは、第9群土器（大洞C 2 - A 式→仮称）の盤形土器として分類したものである。（精製・復原土器）

- このものの口縁は、平縁であるが不整である。また、口縁内側に沈線文が1条めぐるほかは、内・外面とも無文で、朱ぬり痕を認めるものである。
- 器形は、口唇部がまるく整形され、頸部は外反し、肩部が張る器形のもので、胴部から底部へかけてふくらむものである。
- 色調は、灰黒色を現在は呈しているが朱ぬりされたものと認められる。既述したように朱ぬり土器の胎土、焼成は、その製作過程において、一定の配慮があったものと認められ、このものも、やわらかい器面をなしている。

☆第10群土器



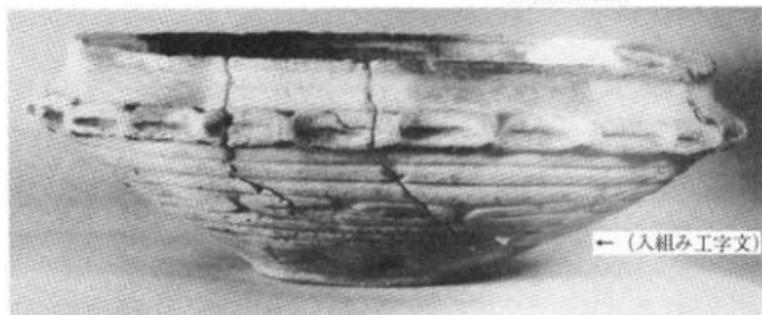
(G2-II a中)



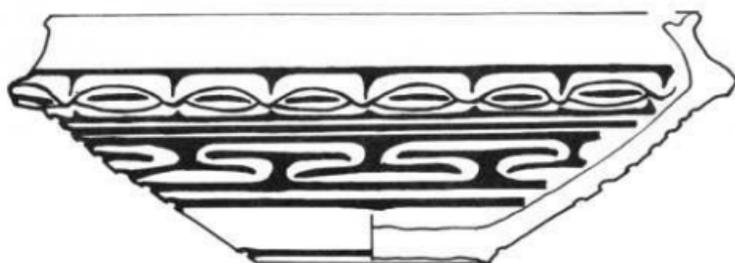
☆ [写49・実測図49] このものは、第10群土器(大洞A式)の浅鉢形土器である。(精製・復原土器)

- このものの口縁は、小波状を呈するもので、口唇は、押圧によって扁平になっており、口縁全体が肥厚しているものである。
- 口縁と頸部上端は段をなしており、浅い沈線文が1条めぐる。頸部は無文で、肩部との境にも1条の沈線文が施文され、この沈線文が突起の位置では、山型に突起中央までのびる大洞A式の特徴を示す施文法が認められる。
- 肩部には、隆帯がめぐり、その隆帯上には、前方に突出る山型突起と、その突起間を横位の押圧沈線文が連続し、帯状に1周するもので、このものも第10群土器の特徴的施文法である。また、胴部はかるくふくみ、底面はやや上げ底である。
- 色調は、現在灰黒色を呈するが朱ぬり痕が認められ、胎土、焼成とも朱ぬり土器の技法によるものと考えられ、良好でかつやわらかい焼成である。

## ☆第10群土器



(G1-II a 中)

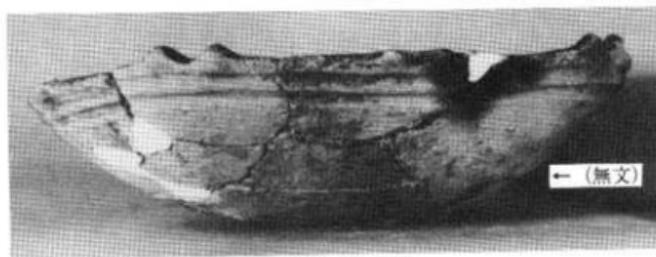


☆〔写50・実測図50〕ここに掲げたものは、第10群土器（大洞A式）の典型的な器形・施文をもつ浅鉢形土器である。（精製・ほぼ完形土器）

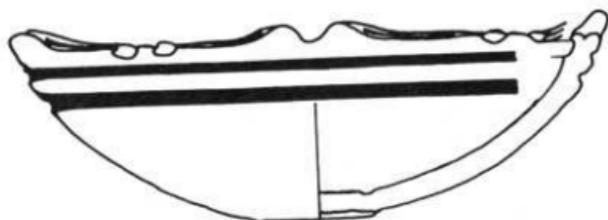
- ・このものは、平縁で、口唇部は、まるく整形され、頸部は、無文で肩部は強く張るものである。
- ・肩部には、帯状にめぐる連続山型突起と、その間をつなぐ横位の押圧沈線文があり、頸部の下端と肩部の下端（隆帯の上・下）には、沈線文がめぐりこの沈線文が山型突起の中央部で、やはり山形に入りこむものである。
- ・胴部は、1条の沈線文と、胴下半の2条の平行沈線文によって文様帯が区画され、その文様帯には、入組み工字文と、それによって構成される、隆起変形工字文が認められるものである。文様帯の下位、すなわち胴下半は無文である。
- ・色調は、明黄褐色（黄土色）で、朱ぬり痕を内外面に認めるものである。このものも胎土、焼成は、朱ぬり土器を製作する意図で選定、焼成されたものと考えられる。

☆朱ぬり土器は、色調において二種（二色）が主流と認められる。このことについては、本文で考察をすることにした。

## ☆第10群土器



(G2-II a中)



☆〔写51・実測図51〕ここに掲げたものも第10群土器（大洞A式）の浅鉢形土器である。（精製・ほぼ完形土器）

- このものは、波状口縁で、二叉山形突起が4対、対象的に口縁を飾るものである。また、この二叉山形突起の間には、前方に突き出る小突起が4対交互に付されている。
- また、口縁下には、2条の平行沈線文がめぐり胴部は無文のもので、底部は、その径が小さいものである。
- 色調は、明かるい赤黄色、胎土、焼成とも最良のものである。

☆ここに掲げた（写51）の浅鉢形土器の器形は、つぎの大洞A式（砂沢式）まで永続するもののようなのである。

また、（写50）に掲げた浅鉢形土器の器形、および肩部の連続山型文のある施文手法は、当地方においては（大洞C2-A式→仮称）の初期に発生し、この第10群とした大洞A式で盛行し、つぎの大洞A式では、その手法は痕跡を残す程度で消滅するもののようなのである。

1 a



(G2-II a 下)



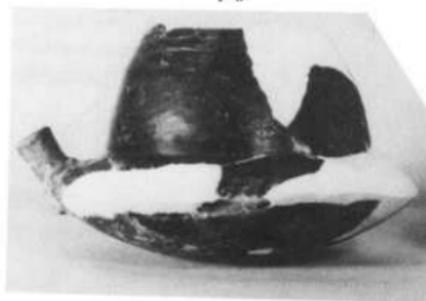
- このものは、口縁上部に、小裝飾突起をもち、それを中心に、細い沈線文と大洞B・C式の主文様であるところの羊歯状文(しだじょうもん)のくずれた文様が施文されており、頸部より胴部はふくらんだ形状で無文である。
- 胴下部は、やや内ぞりに大きくふくらみ、注口部が上むきについているもので、この胴下半部には、三叉文、菱形文のくずれた文様が注口部の左右に施文されている。
- 色調は黒色で光沢があり研磨されている。

☆第6群土器

☆〔写52・実測図52〕

- ここに掲げたものは、第6群土器(大洞B・C式)の注口土器である。(精製・復原土器)

1 b



- ☆この注口土器、すなわち第6群土器(大洞B・C式)、および先行型式である、大洞B式土器は、土器の器厚がうすく、かつ、黒色研磨の土器群が盛行する。このことは、縄文時代晩期のうち、B・B・C式において顕著である。